693
70

0004669000
0004669-000
６９３－７０

憲政回顧録

岡崎邦輔・著

福岡日日新聞社東京聯絡部

昭和１０

ABC

トエー24-27
6?3

憲政回顧録

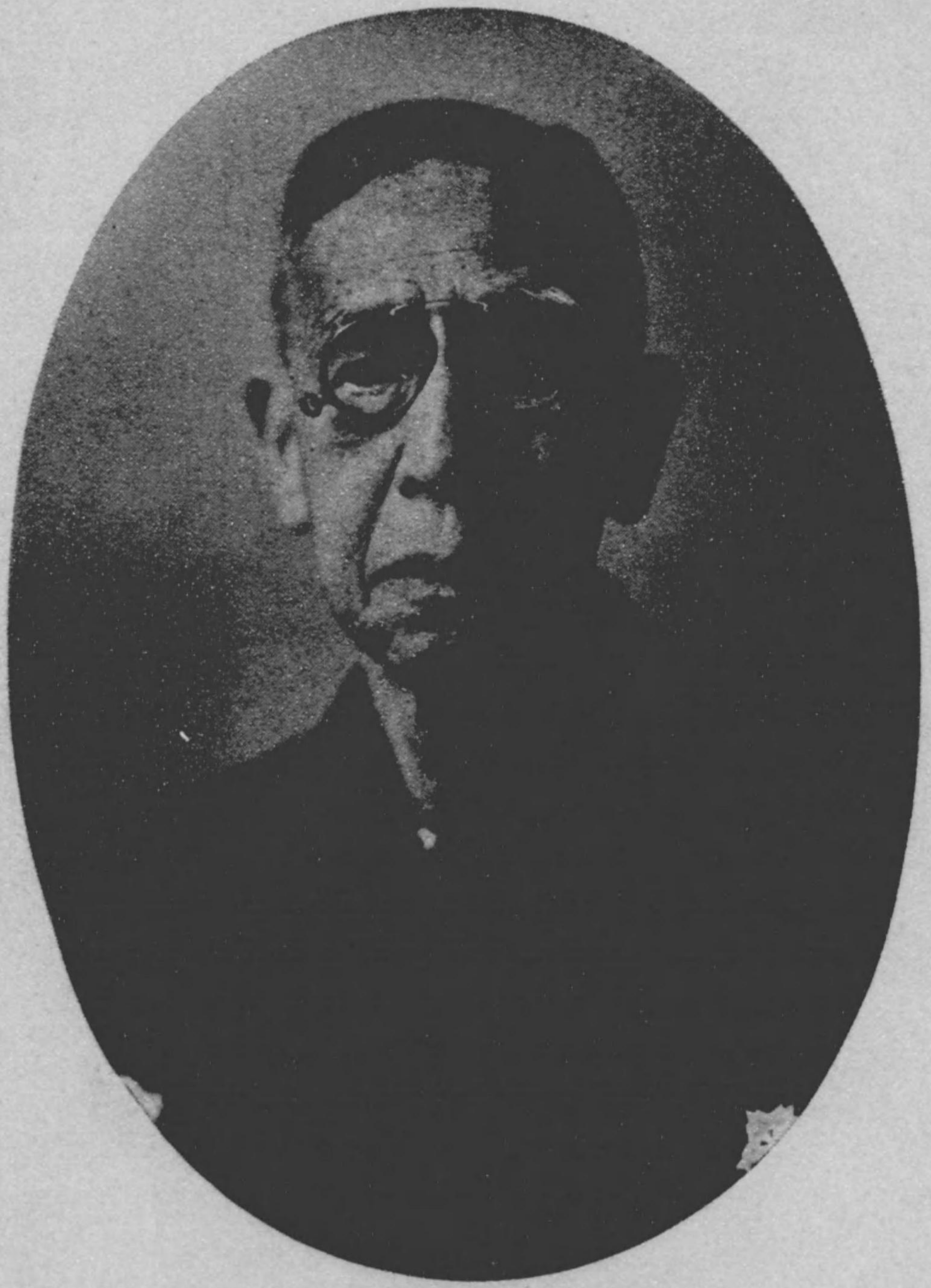
岡崎邦輔述

岡崎邦輔 述

憲政回顧録

岡崎邦輔氏　岡崎邦輔氏は舊和歌山藩士長阪學彌の二男に生れ岡崎氏を嗣ぐ。夙に米國に留學し歸朝後明治廿四年以來衆議院議員たること十一回、此間古河鑛業理事、京阪電鐵、大同電力、新京阪鐵道等の重役及び京阪新京阪兩會社の社長となる。又曩に遞信省官房長となり、護憲三派内閣の農林大臣に親任せられ、昭和三年貴族院議員に勅任せられた安政元年一月生れ當年八十二歳で、政友會の長老である。

岡崎邦輔翁近影



岡崎邦輔翁近影

693-70.

序

本書は岡崎邦輔翁が、北海タイムス、河北新報、新愛知及び福岡日々新聞四社の結成する日本新聞聯盟の爲めに談話せられたものゝ筆記である。翁のわが政界における閲歴、地位に就いては、玆に改めて說くまでもない。即ち翁自から日本政黨史の象徴であり、政黨の起伏隆替、悉く翁の脈管と相通ずるの感がある。即ち又政界の表裏、巨頭大家の去來、翁の話中に躍動し、さながら一幅のパノラマを見るが如くである。しかも翁一片耿々の心、國家を思ひ、政黨を思ふの情、自からその間に流露し、政黨および政黨人の爲めに、最も豐富なる經驗と知識と萬丈の氣焰とを以てせられたデモンストレーションを見るの概がある。政黨華やかなりし思出としても、更に將來復興の示唆としても、黨人は勿論、一般國民に取つて、興味ある讀みものたることを失はない。

尙本書記述上の責任は、一切編輯者にある。

昭和十年十一月

福岡日々新聞東京聯絡部

憲政回顧録

目次

定めなき世……（一）
明治大帝の御軫念……（二）
大浦內相の干涉陣……（三）
伊藤公の卓見……（二九）
日淸戰爭と三國干涉來……（三六）
遼東還附の大詔……（四）
松隈內閣から板隈內閣……（五二）
純政黨內閣出現……（五九）
陷穽に落ちた政黨……（六七）

非常時と官僚、軍閥……（七五）
自由黨と政府の楔……（八七）
立憲政友會創立……（九七）
若手將校連の運動……（一〇七）
幸運に惠まれた桂公……（一一六）
講和不滿と憲政擁護……（一二五）
桂公への反感……（一三四）
純忠無比の園公……（一四四）
井上（侯）板垣、原……（一五四）
普選が生れる迄……（一六三）
政友會大分裂……（一七二）

憲政回顧錄

定めなき世

何事も變り變りて定めなしと言ふが、全く世の中の變遷の激しいには驚く外ない。昨是今非はおろかな事、自分の手でこしらへ上げたものを、後には打ち壞して、涼しい顔するなど言ふ事もザラにある。政治家としてその主義主張に終始一貫するとか、道義節操を重んずるとか言ふやうな事は、今の世の中では、何だか古臭い時代後れのやうな感じさへ持たれる。かうした世の中では、自分のやうな八十翁の繰言は、あまり聞いて面白いものでもあるまいと思ふ。

近頃は選擧肅正がはやりものとなつて、猫も杓子も肅正音頭に浮かれてゐるが、肅正に反對のものゝあらう筈はない。肅正の目標にされ、腐敗の塊と思はれてゐる政黨すら反對ではない。反對でないどころか、最も熱心に、眞劍に肅正を心掛けてゐるものは、政黨だとさへ言へる。世間の人達はこの點で、最初から大變な勘違ひをして居りはしないか。

今、選擧肅正の音頭を取つてゐるのは、いはゆる官僚の連中で、さも政界廓淸の家元のやうな顔をしてゐるが、自分達から見れば、政界を腐敗させたのも、選擧を手のつけられんやうに墮落させたのも、元はと言へば、みな官僚のなす業であつた。勿論、今の官僚は首領と言はれる後藤を始め、みんなまだ五十そこその若い連中で、政界へ顔を出したのもホンの昨今の事だから、この連中が別段政界を腐敗させたわけでもないが、この連中と思想や立場を同じくする官僚の先輩こそ、政界墮落の元兇である。政黨も國民も、選擧の與へられた最初は、それこそ處女のやうな純眞さをもつて、議會の貞操を守らうとしたものだ。それを無理矢理に墮落させ、手のつけられぬ今の狀態に突落したのは、主として歷代の官僚のなす業であつた。

官僚は議會政治を厭遠へて居つた。或は厭遠へねば、自分達の存在が脅かされるためかも知れない。何故かなれば、議會――即ち政黨が有力となつて、行政府を壓するやうになる事は、官僚自ら政黨に征服される事になる。封建思想の拔け切れぬ明治の官僚は、政治は自分達のなすべきもの、政黨に左右さるべきものではないと考へて居つた。それが議會を開いて見ると、當時の所謂民黨と稱せられた自由、改進兩黨の勢力が旺盛で、一々政府の政策を批難し妨害する有樣なの

で、官僚から見れば、怪しからん現象が起つて來た。藩閥や官僚の橫暴を攻擊する民黨に對し、內務大臣の樺山伯が、衆議院の壇上で

「明治の政府は薩長の手で作つたものだ。
議會がこれを批難するなど、身の程知らぬ僭上の沙汰だ。」

と、今から見れば、狂氣じみた演說を堂々とやつてのける程の有樣であつた。しかし僭越でも何でも、憲法に保障せられた議會の權能は、取上げるわけにいかない。そこでこの民黨を切崩して、藩閥や官僚が自分達の思ふ儘の政治を行ふため、選擧の腐敗、政界の墮落が始まつたのである。

今の官僚は、直接この昔の官僚の衣鉢を襲いだわけではなし、又これ程亂暴な事を考へてゐるわけでもあるまいが、彼等自ら選擧場裡に現はれ、議會政治に參加しやうとはせず、自分は高く特權の城塞に隱れて、選擧肅正の音頭だけ取ると言ふのでは、その思想も行動も、昔の官僚と少しも違ひはない。國民を被政治者と見て、自ら治者の態度を取るもので、憲政の異端と言ふ點では、彼等の先輩と擇ぶ所はない。これで選擧を肅正しやうなどゝは、片腹痛い次第で、歷代の官僚がさうであつたやうに、自分達の都合次第では、いつこれが選擧干涉に變化せぬとも限らぬ。

既に今日その兆候もボツボツ見える。

選擧肅正に對する政府の方策は、まだ詳しく聞いてゐないが、要するに直接選擧の腐敗を匡す方法と、腐敗せしめないやうに良質の議員候補者を多く出すと言ふ事に歸着すると思ふ。

選擧腐敗の主なものは、言ふ迄もなく買收と干渉である。干渉は政府が直に肚を決めてかゝれば、出來ぬ事もないが、買收の方はなかなか取締り困難と言はねばならぬ。候補者の側で、誰れも買收したくて買收してゐる人のあらう筈がない。買收せねば當選出來ないから、選擧を爭ふ以上、已むを得ず不正と知りつゝやつてゐる事で、買收する必要のないやうな狀態となりさへすれば、自然無くなるわけである。この呼吸は誰れにも分る筈であるが、實は實驗者でなければ、眞の事は分らない。もし政府が眞に肅正の決心があるなら、買收する必要のない狀態を作るか、でなければ絕對に買收の不可能な狀態にする外ない。繰返し言つておくが、候補者も政黨も好んで買收してゐるのではない。畢竟昔の官僚や藩閥が、自己の無理を押通すため蒔いた腐敗の種が、今は手のつけられぬまでに生ひ繁つて來たもので、政黨や候補者は何人よりも買收の根絕され、選擧の明るくなる事を熱望してゐる。そこで政府に、絕對買收の餘地の無い選擧を行ふだけの用意と決心があるか、あるなら、その具體策を聞きたいものだ。その用意がなくして徒らに選擧肅正を叫ぶなどは、結局空念佛、國民を迷はす僞善者と言ふ外ない。

政府の現在やつてゐる所を見ると、唯講演やパンフレットによる敎化運動と、一方には所謂政黨ずれのしてゐない、良質候補者の蹶起を促してゐるに盡きてゐるやうである。講演やパンフレットの敎化運動が、眞劍勝負の選擧運動にどれだけの効果があるかは、考へるだけ愚かしい事と言はねばならぬ。論より證據、それなら肅正選擧を主張する人々が、その通りの方法をもつて、理想的選擧を行つて見るがよい。それで當選出來るかどうか、體驗は何よりもよい教育になる。

世間は政黨を惡魔の巢のやうに思ひ込んで、如何なる立派な人物も政黨に入つたが最後、惡化するものと思つてゐるやうである。そこで優秀な議員を得るためには、恒產あり、恒心あり、人格も高く、知識も豐富な人物を政黨外から候補者として推立て、選擧を實質的に肅正しやうとも考へてゐるやうだ。政黨と雖も、さうした優良な候補者が欲しくないわけではない。欲しくないどころか、常にさう言ふ人物を探し求めてゐるのであるが、不幸にして選擧界の情弊が餘りに甚だしいため、さやうな立派な人々は、黨や選擧に近寄らぬのである。

政府は恒産あり、恒心あり、人格識見共に申分ないやうな人物は、政黨からの候補者としては出るものではないと見てゐるやうであり、この種の人を今度の選擧では大いに奬めて立候補させやうと考へ、すでに縣會議員の選擧には、この方針を實行にかゝつてゐるやうである。政黨と離も、さやうな人物を欲しがらぬわけではなし、常にこれを求めてゐるのであるが、何分にも現在の選擧界は腐敗が甚だしく、同時に危險率も多い。そこで有力優良な人々は、選擧に出て來ないのだ。又政黨が批難されて居るため、政黨色のつく事は、何となく人物を小さくするやうにも見られて、有力者が政黨入りを澁つてゐる事も事實である。

もしも選擧に腐敗がなく、又危險が少いとなれば、有力な社會人が續々選擧場裡に出て來るに相違ない。政府はさやうな有力者の出ないのは、政黨が選擧界に跋扈してゐるためと思ひこみ、政黨の横暴を抑ふれば、優良候補者がドン〳〵出るやうに思つてゐるらしい、勘違ひも甚だしい。放つておいては、優良な人物と言ふものは選擧に出て來るものではない。過去の選擧にも屢次、いはゆる地方の名望家とか、或は社會的有力者などが選擧界に現れた事があるが、この場合は、極力政府がこれを斡旋し、同時に保護して、その當選を保障するやうな場合に限られてゐる。保護する事は即ち當選に干與する事で、換言すれば、選擧干渉の行はれた際のみ、官僚の所謂優良則ち穩和なる人物が現れると言ふ奇現象を呈してゐるのである。形式的な選擧肅正論者から見れば、頗る不可解な事かも知れないが、事實は正にその通りであつた。

自分の選擧に關する經驗をふり返つて見ても、その通りである。三十餘年の代議士生活中、最も甚だしい干渉を受けたのは前後三回あつた。第一回は明治二十五年の有名な品川内務大臣の大干渉で、この時の事は餘り古くて、詳しい記憶はないが、我々民黨——即ち自由黨及び改進黨——の候補者を叩き落すため、全國到る所、その地方の名望家と言はれる人々を候補者に狩出し、いはゆる吏黨としてこれを保護したものである。この時、自分を落すため吏黨として立つたのは、鎌田榮吉君と森下岩楠君であつたが、吏黨といふので、問題にならなかつた。官權の干渉も金錢による投票の買收も、すべてこの時に始まつたもので、憲政墮落の第一歩は、この選擧から踏出してゐる。優秀な人物を議會に送り、議會を革正——その時の閥藩官僚はさう思つてゐた——しやうとして、逆に議會を墮落させ、選擧を腐敗させ、憲政を暗黒化してゐるのだ。机上の空論ばかり弄ぶ獨善的な官僚などには、想像もつかぬ奇怪な出來事だらうと思ふ。

その後、自分が酷い目にあつたのは、大隈內閣と清浦內閣の選擧であつた。二度共、地方の豪族名望家を選擧戰線に狩出した。大隈の時、自分を落すため選ばれたのは、今九州にある實業家の木村君である。君の家は紀州に於て七百年間も連綿として續いて居る大豪族で、その親族緣故者をもつて全紀州を掩ふと言ふ有力者だ。當の木村君その人も立派な人物だが、この人が選擧に出たと言ふのも、官僚の保護があつたためである。自分は今日も同君とは懇意にしてゐるが、併しこの一戰は、私の苦しんだのは勿論、紀州の選擧の風儀は、俄然墮落した初めであつた。

清浦內閣の時には海草郡の豪族で、自分の選擧の有力な支持者である谷井家の當主が、政府に唆されて立候補して來た。谷井君は文學士で、朝鮮總督府の官吏をして居り、人物としては申分のない人であるが、この人を押立てるについては、今の滿洲國總務廳長長岡隆一郎君が警察部長として、極力これを斡旋し、ひどい干涉を蒙つたのだ。長岡君と言へば官界の俊才、內地に居ればさし當り今度は肅正運動一方の旗頭たるべき人物だが、それが何と優良候補者を出す爲に選擧を腐敗させて居るのだ。官僚の言ふ肅正運動の本態は、これでも知れる。この時は小選擧區で、開票の日など落選の號外まで出されたが、それでもやつと二十票の差で勝ちは勝つたが、酷い目

にあつた。自分が酷い目にあつたばかりでなく、紀州の選擧界は、さらに一段と腐敗を加へることになつた。

兎に角、政府も世間も大變な考へ違ひをしてゐる。政黨が無理をやり、横車を押すから、良候補者が出ない。政黨を抑へれば、良議員が民間から雲のやうに湧き起ると思つてゐるらしいが、事實は右の通り、政府が保護即ち干涉せぬ限り、所謂優良人物と言ふものは出るものではない。選擧の苦勞さへなければ、どんな立派な人物でも出て來るが、現在の狀態をそのまゝにして、良候補者が自發的に出馬するわけがない。

そこで、この積極的な肅正が駄目となれば、後には嚴重な選擧取締と、國民の政治敎育と言ふ極月並な微溫的なものゝみが殘る。月並でも微溫的でも、やらぬよりはましと言ふ程度で、この運動には意義があらう。政黨が肅正運動に不熱心だとか、殊に政友會が反感をもつてゐるとか言ふものがあるが、不熱心や反感どころか、眞に公平峻嚴な取締による肅正は、政黨が最もこれを望み、就中、今は野黨たる政友會が最も熱望する所だ。選擧のあらゆる腐敗を一掃するやう、最も嚴重に取締が出來れば、選擧費用は半減或は三分の一位に減少するからである。たゞ過去の經

驗によれば、これが逆に選擧の腐敗を導き、肅正運動即ち干渉に轉化する惧れがあるのである。

警保局長の唐澤君が、先日も政友會本部へ來て、政府の肅正運動を話し、今度こそ、干渉のカも言はれぬやう、公明正大にやるつもりだと言つて居つたが、公明なつもりでも、選擧の實戰となると、なかなかさやう單純にはいかなくなるものである。殊に今日は、既に朝野兩黨對立の狀態となつて選擧を爭ふのだし、そこへ選擧取締の任に當る後藤、小原兩君の意識の中に、さきに述べた官僚的精神があつては、肅正運動がどんな形で干渉にならぬものでもない。

唐澤君の話によると、政府は今後選擧豫報を絶對取らぬと言つてゐるが、豫報を取るといふ事は、最も簡單に、又最も有效に干渉の實を擧げ得る事は、誰も知る通りだ。警察官が戸毎に聞いてまはるのだから、この位露骨有効な干渉はない。政府がどんな形式でゞも豫報を集めぬとなれば、それだけでも選擧は、大部分明るくなる。

所が肅正運動そのものが、干渉になる危險すらある。第一に棄權防止であるが、官憲が戸毎に或は部落毎に棄權防止を觸れ歩くとなると、ここに非常な危險が伴ふ。又司法大臣は檢事に命じて、選擧肅正は檢擧の成績を擧げるより、違反なからしめるやう努むべきだと訓示し、內務大臣も地方官、特に警察官吏にこの事を力說してゐる。精神は立派な事であるが、違反防止を如何にして國民の間に徹底させるつもりであらうか。注意を與へ、警告する方法次第では、これこそ危險極まる干渉になる。

要するに政府今回の肅正運動は、どれ程の効果を擧げるかは分らぬが、少くも棄權率の激增する事だけは明らかだらう。

明治大帝の御軫念

寔に長き話であるが、明治天皇におかせられては、この憲政の運用と言ふ事について、非常に御軫念遊ばされ、自分なども伊藤公始め諸先輩から、いろ〳〵な御事蹟を拜承し、常に恐懼に堪へずにゐる。

第一回の議會が開かれた折は、それが建國以來の一大變革であるだけに、御軫念の程は申しようもない程で、開院式臨御に先んじ、宮中賢所に御參拜の上、祖宗の御神靈に奉告遊ばされ、憲政運用の全からん事を御祈念に相成つたと言ふ事を承つてゐる。式場における御容子も、その御

緊張の御有様は、拜する者悉く感激せずには居られなかつたとの事である。伊藤、山縣等、當時在廷の元勳臣僚が聖旨を奉じて、愼重事に當つた事は言ふ迄もないが、板垣伯始め政黨側の人々も、非常な緊張と謹愼をもつて議會に臨み、第一回議會は非常な好成績をもつて終了する事が出來た。

陛下におかせられては、この結果に對して、痛く御滿足に思召され、閉院式終了後、特に侍從を岩倉、大久保、木戸三元勳の墓所に差遣はされて、憲政の見事に緒に就いた趣を告げしめられた。如何に議會の運用、憲政の前途について、聖慮を煩はし給うたか、この一事をもつても拜察出來る。

然るに第二回の總選擧では、早くも前記のやうな大干涉が起り、朝野の物情騷然となつて來たので、御軫念の餘り、德大寺侍從長をもつて伊藤公に、如何にすれば善良なる議員を多數選出し得るや、との御下問を賜はつた。これに對し伊藤公は『聖慮と雖も、善良議員のみを選出する事は困難』なるべき旨を奉答し、その理由を七ケ條に涉つて伏奏してゐるが、その要旨は、國民中の恒產恒心ある豪族、名望家等は、騷然たる選擧裡に起つを好まず、かゝる人々に政論家は甚だ稀れである。所謂優良なる候補者即ち穩和なる代表者は、かゝる者の間にこそあるべきで、善良な議員の選出はなかなか困難であると言ふにある。この御下問奉答は、伊藤公爵家所藏の書類中から發見したもので、選擧に關する文獻中、最も貴重なものゝ一つだと思つてゐる。

明治天皇は申すに及ばず、伊藤公始め日本の先覺者等が、如何に我が憲法政治の發達に苦心せられたかは、かゝる事から見て、實に感激に堪へない。政黨、官僚、國民共に叡慮の程を偲び奉つたならば、昨今のやうな醜態を繰返して居つては、當に罪萬死に値するとも言へるであらう。

思ふに、伊藤公の奉答にあるやうに、いはゆる優良議員と言ふものは、放任しておいては、選擧に出て來るものではない。これを出すためには、出すやうな方法を講ぜねばならぬ。明治天皇の思召を奉じて、國民擧つて選擧に當るやうにしなければ駄目である。

今の官僚が叫ぶ選擧肅正なるものも、明治二十五年松方內閣が考へた精神から、少しも進步しては居らぬ。松方內閣や當時の藩閥は、政黨員をもつて過激な破壞主義者と考へ、治者たる政府に反抗する不良國民と見なして選擧に干涉したのであるが、今の新官僚は、政黨員は墮落して終つてゐるから、未だ政黨ズレのしない優良國民を議院に送らうと考へ、選擧肅正を唱へてゐるの

である。

優良な國民とは何かと云へば、昔の藩閥も今の官僚も、恒產あり恒心あり、學德共に具はつた地方の有力者、或は財界學界の有志を指すものであるが、さやうな人物は、政黨畑からは出て來ぬと見てゐるのである。政黨畑から出て來ないのでなく、實は選擧そのものが恐ろしく、その冒險にたへ切れないのだ。いはゆる財界、學界或は地方の有識者が、全く政治に關心を持たぬかと云ふと、持たぬどころではない。安全と見れば、巨額の金を投じてゞも、多額納稅議員の選擧には出て來る。又財界の有力者にしても、勅選に推薦されゝば、喜んでこれを受け、中には自ら少からぬ運動費を投じ、獻金してまで勅選となつてゐる有樣である。

これを極く最近の事實に見ても、三井の池田成彬、三菱の各務鎌吉兩君の如く、推薦されゝば、御家の法度に叛いてまでも、內閣審議會委員となつて、實際政治の中に踏込む程であるから、政治が嫌ひどころの話ではない。唯選擧が恐ろしいのである。

官僚が選擧肅正の喇叭をいかに吹立てゝ見た所で、いはゆる優良候補者と云ふものは、放つておいて出て來るものではない。肅正運動などを本氣でやるのならば、これを唱へるもの自らまづ選擧を爭ふべきであらう。自ら選擧の中に飛込み、身をもつて理想選擧を行ひ、肅正の實を擧ぐべきだ。その上で理想選擧が行はれ得ると言ふ確信がつけば、いはゆる優良候補者は續出して來る。官僚輩が自ら選擧を爭ふ勇氣も、用意もなく、特權の城塞から國民を見下して、空念佛を唱へるなど、實に片腹痛い次第と言はねばならぬ。

自分の經驗によると、選擧が最も公正に、選擧らしい選擧の行はれたのは、第一回と第二回の選擧だけであるが、第二回は早くも政府の干涉によつて、腐敗し始めたから、眞に立派な選擧は、四十年間を通じて明治二十三年の第一回選擧だけと云ふ事になる。知識も低く、國民の文化もまだ開けなかつた第一回選擧だけが立派で、文明は進步し、敎育は普及した昨今が、最も腐敗墮落してゐると云ふのでは、何が文明か敎育か分らぬではないか。妙な話と云はねばならぬ。

何故、第一回の選擧が理想的に行はれたかと云へば、第一に立憲政治に對して、國民が非常な期待と熱意をもつて居つた事、第二には元來我國民性が淸廉であつて、この時は不正手段による選擧の腐敗など、まだ知らなかつたためである。當時の國民は封建制度を打破して、國民の意氣向上心と云ふものが、甚だ旺んであつた。藩閥や官僚多年の橫暴腐敗に對し、これを匡正して、

國運を打開するものは、我々國民であるとの信念に燃え立つて居つた。これが選擧に反映して、全國各地共、地方第一流の人物を擧げ、藩閥官僚に代つて、直に國政を托するに足る人材を目標に候補者を選定したものである。

各地共この風潮であつたから、勢ひその次は、我縣からは決して他府縣に負けない人物を選ぶと云ふ事が競爭となり、いよ／＼第一流の學德共に具はつた人が、選出される事となつたのである。從つて我れから進んで候補者として名乘りを擧げる人間などは、品性劣等、士人の共に齒すべからざるものとして擯斥され、迷惑がる立派な人物を無理矢理に選擧民が選擧する有樣であつた。中には本人の知らぬ間に當選したものもあれば、本人の承諾なしに選擧して終つたものも澤山にある。費用の如きも有志家の自辨で、候補者自身は一文も出さず、全部選擧民の負擔したものなど到る所にあつた。これで投票買收などのあらう筈はない。同時に制限せずとも、選擧費用のかゝらう筈がなく、其實際は、驚くべき金のいらぬものであつた。名實共に、眞の理想選擧と云へるのは、唯この一回だけである。

自分の鄕里の和歌山縣は、當時二區に分けられて居り、第一區からは時の農商務大臣で紀州を代表する政治家陸奥伯を第一に候補者に推立て、後の二人は地方第一の人物を、これも有志一同の推薦に因つて出て貰つた。第二區では、當時東京日々新聞の社長で新人として鳴らして居つた關直彥君を一人だけは決めたが、これに匹敵して恥づしからぬ人物が容易に見つからぬ。八方苦心の末、前知事で縣治に非常な功績を殘し、和歌山に隱栖して居つた松本鼎と言ふ人を、本人に無斷で擔ぎ出した。勿論選擧の奔走に要する旅費は有志家の自辨で、松本君の場合などは、演說會の費用や、集會その他一切の費用全部、有志が出したものである。近頃の選擧と較べ合はせて、實に感慨無量と言ふ外ない。

さらに面白い事は、松本君も當選後、餘り何から何まで有志諸君の御世話になつて、その上歲費まで頂戴しては申し譯ないから、せめて歲費だけは、選擧民諸君が何か役に立つ事に使つてくれと申し出たが、これに對して有志家は又、自分等が頼んだ代人だから、費用を負擔するのは當然の事だと言ふ、押問答の末、とうとう和歌山日報と言ふ有志家の機關新聞に、三百圓だつたか五百圓だつたか、松本君から寄附して鳧をつけた程であつた。全く今日からは、想像も出來ぬことである。

獨り和歌山ばかりでなく、各國各地共すべてこの有樣であつた。これは日本人の淸廉な國民性と憲政に對する眞情の溢れた結果であつて、國民や政黨が憲政の運用に適しないなど言ふ人々に對しては、生きた反證と言へるであらう。元來日本國民は立派に憲政を運用出來るのであるが、これが今日のやうに墮落したのは、國民が墮落したゝめではない。藩閥官僚によつてその純眞を汚され、習ひ遂に性となつたものである。

所が、二十五年の第二回の選擧となると、政府が我意を押通すため、國民の自由意志による選擧を妨げ、いはゆる民黨を壓迫して、吏黨を擁護し、有名な歷史的干渉となり、折角の淸純な選擧も滅茶々々に潰される事となつた。選擧の腐敗はこの時に始まり、憲政は横道に外れ、國民の良心も痲痺してしまふ事となつた。

大干渉は何故行はれたか、それには當時の政治狀勢を一應話しておかねばならぬ。

二十三年に召集された第一回の議會は、さすがに全國から眞に輿望を負うて集まつた人々だけに一人の屑もなく、文字通り帝國の選良たるに恥じなかつた。貴族院議長は伊藤公、衆議院議長は土佐の中島信行——久萬吉男の嚴父——であつた。議員一同は國民の輿望を負つてゐるのみでなく、列國に對しても非常に緊張した氣持をもつてゐた。その頃まだ三等國扱ひを受けて、東洋の一小國としか見られてゐなかつた日本が立憲政體を採り、議會を開くと言ふのであるから、歐米諸國は何の日本人に議會政治などやれるものか、立憲政治は白人獨特の文明政治で、日本が柄にもなく猿の人眞似などやつても、必ず失敗するに決まつてゐると、半ば嘲笑的態度で環視して居つた。言はゞ列國を試驗員として、有色人種の白人文明に對する試驗を受けてゐるやうなものであつた。日本としては當時歐米との對等條約を獲得したいと、條約改正は擧國一致の熱願であつた。議會政治に成功すれば、歐米も日本の文明的眞價を認め、條約改正にも光明が開けるが、もし失敗したが最後、それ見た事かと、侮蔑冷笑を買ひ、條約改正などとても望める事ではない。言はば國の名譽と權利を賭けた國家的大試驗であるから、朝野共に非常な緊張と愼重さをもつて議會に臨んだのである。

所が議員達の多くは藩閥政府多年の横暴に痛憤してゐるから、ややもすれば議論が過激となり易く、これを統御する板垣、大隈兩首領始め、民黨の領袖達の苦心は一通りや二通りではない。少壯派は豫算に對して、藩閥政府が勝手次第に政費を膨脹させ、國民の膏血をもつて冗官を設

け、冗費を濫用してゐるのだから、よろしく一割天引の上、冗費を節約せしむべしと主張し出し、自由、改進黨共之が大勢を制した。當時の豫算は總額約八千萬圓餘だから、八百萬圓天引論である。板垣伯はこれに對して、藩閥の横暴は懲らすべきだが、一割天引では政治機關を停止せしめ、破壞するに等しいから、各款項に亘り檢討の上、約六百萬圓を削減して通過せしめるがよいとの意見を述べ、政府側でも山縣公等が解散論を抑へて、互讓妥協を主張して歩み寄つた。併し自由民權のため血を浴び、獄を潜つて來た少壯代議士は、板垣伯の說得をもなかなか肯かない。そこで伯はもし黨議が硬論に決して、內は國民の寄託に背き、外は列國の嗤ひを招くやうな事になるならば、黨首たる自分は、國家のため同志を率ゐて脫黨する外はないと述べ、辛うじて過激派を抑へつけ、無事第一議會の難關を突破する事が出來た。伯のこの時の態度識見は、國家の重きに任ずる政黨の首領として、範を百世に垂れたものと、今もつて想ひ出す毎に頭の下がる感じがしてゐる。現代の政黨總裁が、かやうな場合に遭遇したらどうであらう。苟くも政黨の首領たる底のものは、國家を第一とする不動山のやうな信念がなくては、その禍は蓋し測るべからざるものがあらうと思ふ。かくてこの議會は伊藤貴族院議長をして閉會に臨み「本年の議會は我が憲法の効力を實地に應用せし初年なり、何れの國の歷史にも斯く正々堂々と、秩序よく、美果を收めたるは他になし。議員諸君の努力を感謝する」と挨拶せしむる程の好結果を收め、日本は文明試驗に最優等の成績をもつて及第し、列國の日本に對する尊敬信用は、俄然一變した。このまゝ進めば、日本の憲政は實に洋々たるものであつたが、第二議會となると、自制を失つた藩閥政府のため、果然憲政は暗礁に乘上げて、不祥な方向へ進む事となつた。

大浦內相の干涉陣

第一議會で總歲出の一割に近い政費を削つて、政府を痛擊した民黨は、一年の間に十分な政務調査を行つて議會に臨み、質問や討論で藩閥を散々痛めつけた。これが著しく藩閥の自尊心を傷つけ、民黨なるものは反逆者に等しいとの反感を政府側に募らせ、解散して、穩健な議員を味方として多數選出せしむる外ないと決心させたものと見え、前年の約六分の一、僅か九十八萬圓の豫算削除を口實として解散して終つた。あれ程理想的に行はれた選擧が、民意を反映したものではないと獨斷して、味方を作るために解散したのである。始めから選擧に干涉するつもりでかゝ

つたのだから、この選擧が公正に行はれる筈がなく、憲政が眞直ぐに歩ける筈がない。

果然選擧は混亂し、殺人、暴行、脅迫など血腥い事件が頻出して、民黨と吏黨即ち政府との大鬪爭が始まつた。政府は品川彌二郎子爵が内相として選擧の采配を揮つたが、非常に疳の强い人で、民權とか自由など全く眼中にない、國粹精神に凝り固まつた舊式政治家であつた。品川内相は各地方長官、警察部長に命じて民黨の大壓迫、吏黨の應援に公然乘出させた。知事、警察部長が又封建時代の支配意識を殘した、いはゆる官員氣質に固まつた連中の事だから、内相の命令とあつて、滅茶苦茶な干渉を始めた。

警察部長が壯士を率ゐて、民黨の候補者を脅かす位はまだしも、知事自ら仕込杖を揮つたり、民黨の攻擊演説をやつたりする氣狂ひまで飛出し、四百數十人の死傷者まで生ずるといふ騷ぎであつた。どうしても民黨に勝てぬ地方では、投票を僞造して、本物の投票は取捨てるやうな亂暴まで働いた。土佐の如きは選擧後、この投票僞造が暴露し、民黨から告訴が起つて、投票箱を大阪の裁判所へ送る途中、これを海中に投棄して犯跡を晦ます騷ぎさへ起つた。

地方有志家に金錢その他の便宜を與へて立候補を促し、選擧腐敗の俑を作つた事は言ふまでもない。これ程の干渉をやつても、結果は民黨聯合軍の大勝に歸し、吏黨は三分の一にも達せず、牢固たる民意の存する所を示した。壓迫干渉を蒙つて見れば、元來藩閥官僚を仇敵視してゐる民黨の事であるから、忽ち猛烈な敵愾心を起して反撥し、以來日清戰爭に至る數年間は、朝野唯鬪爭から鬪爭に終始し、憲政折角の芽生えは、早くも踏み躙じられて終ふ事となつた。

それでも民黨はやはり、候補者推擧も、選擧費の支辨も、第一回選擧の風格を失はず、實に淸純なものであつた。自分は第一議會閉會後、陸奥が議員を辭任して、その補缺に當選し、第二議會はつまり二度目の選擧であつたが、和歌山市に選擧本部を作り、その費用を若干負擔しただけで、その他には殆んど金の必要はなかつた。吏黨の方は賴まれもせぬのに、我れから名乘りを揚げるのだから、奔走して貰ふにしても、車馬賃を拂ひ、事務所や會合の費用、或は辨當代など、既に相當の金がかゝり始めた。選擧界の毒蟲のやうに言はれる選擧ブローカーなるものは、この吏黨の運動員から成長したものである。

買收はいつ頃から始まつたか。正確にこれを調べるわけにもいかぬが、すでに選擧民の自由意志を蹂躙しやうとする干渉が起つたのだから、その後間もなくどこからともなく、壓迫に代る誘

惑が始まつたものである。それも民黨側は先にも述べた通り、候補者は選擧民に推されて出て來たもので、吏黨の方は反對に我れから名乘を擧げたのだから、選擧民誘惑は、勿論吏黨から始まつたものと見るが至當である。事實又、飮食その他饗應手段の許されて居つた時代、民黨側はそれらの費用は有志の自辨が多く、吏黨側は候補者持ちだから、まづ饗應による誘惑は、明らかに吏黨が先きであつた。いはゆる上品は色をもつて惑はし、下品は食をもつて誘ふ奴で、誘惑は飮食から始まり、次いで利をもつて誘ふ買收に移つたのである。

民黨の氣勢旺んで、吏黨の割込む餘地の無い所では、長く選擧の純潔を保つ事が出來たが、吏黨民黨の對立する地方は、どこでも腐敗が早かつた。今日政爭激甚な地方と言へば、必ず選擧界の甚だしく腐敗した土地であると言ふのは、その名殘りとも言ふべきもので、東北で宮城、福島兩縣、關東で栃木、茨城、埼玉の如き、四國の高知、九州の熊本、大分など、その適例である。

買收が最も大がかりに、全國的に行はれ出したのは、大隈內閣の總選擧以來である。當時、政友會が多年に亘り多數を恃んで、横暴を極めて居るといふことは、藩閥官僚の徒の皆一樣に考へてゐたところである。政友會は例の增師問題などでは、陸軍の要求を拒み、又桂內閣を忽ちにして仆すなど、山縣以下長州系元老の憎しみを受け、これを叩き潰すため、唆かされて出馬して來たのが大隈侯であつた。そこで增師問題を片附ける一方、政友會の横暴を懲らすのは、我が輩の役目なんであると見得を切り、大正三年十二月、增師案否決を理由に解散した。侯としては明治三十一年以來、十七八年ぶりの政權であり、與黨の同志會としても同樣、長年政友會の與黨ぶりを羨んで居つたものだから、この時とばかり選擧に力を注いだ。まづ大浦農相を內相に轉じて、得意の警察政治による大干渉陣を整へ、山縣、井上の兩元老が財閥方面に聲をかけて選擧費を集めてやり、三菱も莊田平五郎、豐川良平、三井系は朝吹英次などの諸君が大いに力瘤を入れたから選擧費の豐富な事驚くばかり。その上、和歌山に於ては木村氏のやうな地方の豪族名門を、大隈伯後援會の名の下に候補者に狩り出したから、未曾有のインフレ選擧となつた。

勿論この頃にも、黨中有力なる候補者でありながら、その運動費が足りぬとか、犧牲を承知で黨略上、立候補させるとか言ふ人には、若干宛の援助はして居つたが、それとても高の知れた額であり、候補者全部に一定の補助金を渡すなどとは、思ひもよらぬ事である。全くこの選擧からさう云ふことが始まつたのであつた。

選擧ブローカーが目立つて活動を始めたのもこの頃からで、選擧に金儲けを覺え、選擧の金を着服して家を建てたの、妾宅を構へたのなど言ふいやな噂も始まつて來た。一度惡事の味を占めたら、もう忘れられぬ。そこで候補者の側では、見す〳〵ブローカーの奸策とは知り乍ら、勝敗の前には躊躇し難いので大金を抛つて當選を確保せんとするに至つたのである。一層甚だしいのになると、金がなければ、立候補さへ出來なくなつた。

三派協調內閣の選擧であつたと思ふが、政友會の候補者が公認料を請求したので、自分は公認料と言ふのは、黨の地盤を借りて選擧に出る候補者が本部に納むべきものだ。本部に公認料を出せと言ふのは、土地を借りて地代を寄越せと言ふやうなもので、本末顚倒も甚だしいと嗤つた事があるが、何しろ流行と時勢の力には勝てない。今日は御覽の通りの有樣となつた。

政黨を惡化墮落させたについては、いろ〳〵議論もあるであらうが、何と言つても、その主たる原因は、この金のかゝるやうになつた事である。政黨が惡化したから、金がかゝるやうになつたのでなく、金がかゝるやうになつたから、墮落して來たので、金のかゝる第一の原因は、選擧がと言ふ事になる。如何に識見の優れた政治家でも、或ひは又人格の高い人でも、素手では選擧が出來ない。金を集めるためには無理が起る。一歩を進めて、金の出來ない人は、黨內で口が利けなくなる。選擧に莫大な金を提供しさへすれば、それだけで總裁も幹部も頭を抑へられて終ふ。昔は財閥の後援を受けると言つても、高の知れた金だし、それによつて、總裁や幹部を絕對に左右する力など、むろん無かつたが、一回の選擧に何百萬と言ふ金が要る事になると、そこに財閥との間に、無理不自然な腐れ緣が生じ、それに從つて又、いろ〳〵の不都合も生ずると云ふ譯である。

實際はさうではないが、金さへ澤山使へば、誰でも議員となれるやうに思ひ、議員で金の自由のつく者なら、下らぬ人間でも勢力が得られる事と思ひ、政治はすべて金次第と言ふことになつて來た。尙政黨の首領になれば、必ず大命降下の機會があると信じ、野心家は金をつくつて黨內に勢力を張り、無理にも總裁を狙ふ事になる。德を修めず、金づくで幹部となり、總裁となる事を急ぐやうになつた。

近年の政治的疑獄と言へば、その全部がこの幹部や總裁を狙ふ政治資金に關係がある。勢力を張るためには手兵を作らねばならず、選擧に巨額の資金を供給してやらねばならぬから、無理な

手段で金を作る。これが判で押したやうな近年の疑獄の型である。

さらにこの當然の順序としては、金持の政界入りが始まつて、政界に鼻持ならぬ銅臭を撒き散らし、墮落腐敗に一層の拍車をかける事になつた。自分にも昵懇な人があるから、敢て名を指すわけにもいかないが、さやうな人が續々出て來た。世間有閑マダムなるものあり、夕景になると、市內にその影をあらはす、こゝにはまた有閑富豪なるものがあり、勃々たる政治的野心をおこし、懇意な政治家からしきりに金の無心に應ずるよりは、その程度の金で、大臣となり、總理大臣となれるなら、安いものだと言ふ氣になる。どうで獻金する位なら、自分が政治家となり、遂には大臣ともなつて、思ふ存分振舞ふ方が面白いと言ふ所から、金持の政治道樂が始まつた。

金の威力がすでに十分發揮されてゐる政界は、忽ちこの人々の周圍に、汚臭に群る蠅のやうに集まつて、黨內の大勢力家にして終ふ。實に主張や意見や人格に集まつたものではないが、利益に集まるのだから、その威力と言ふものはなかなか強い。そこで政黨はさやうな、金づく又は力づくで手兵を蓄へた人々の自由に動く事となり、本來の政黨としての面目、意義を失ひつゝあるは、歎息の極みである。禹に百人の衆なくして、諸侯に王たりと言ふが、さう言ふ事では、今の政黨に首領たる事は出來ない。德などはどうでもいゝ。政治的識見などよりは、その求むるところは、外にあるのである。先に話した第一回議會に於ける板垣伯のやうな態度を今の政黨總裁が取つたとしたら、忽ち總裁自身が除名でもされやう。今回は幸ひに政府も政黨も兩院議員も學者も官僚も、選擧肅正を高調してゐる。まことに結構なことと思ふ。もし實際上効果を得ば、天下の慶事と思ふ。選擧肅正論者の立論は、正しき議論を演說し、その議論に感服せしめ、所謂善良な候補者の奮起を促さんとするのである。併し現狀の如きやり方では、それはむつかしき注文と思ふ。その積弊を矯むるは、口舌に非ず、只實物教育にあり。その第一の着手として、所謂善良なる人を立候補せしめ、その人物を選擧人に知らしめ、その謂はゆる不善良なる候補者をして後に瞠若たらしめ、由つて以て迷夢より覺醒せしむべきである。

伊藤公の卓見

伊藤公の用意には實際敬服する事が澤山あるが、この政黨の運用についても、早くから非凡な考慮を拂はれて居つた。

政黨惡化の一つの原因は、多數黨の首領になりさへすれば、誰れでも大命を拜するやうな習慣を作り、信念を與へた點にあるが、この結果は德を修めずとも、力づくで總裁たるを得ば、從つて首相の印綬を佩び得ると言ふ事になり、我が憲政運用上、非常な危險を豫期しなければならなくなつた。

申すまでもなく、首相の御任命は大權の發動によるもので、それが如何なる形に於いても、大權の發動に些少たりとも束縛や陰翳があつてはならぬ。政黨は憲政運用上の一手段として發生すべきものではあるが、多數黨の首領が必ず政權を取り、大命は必ず大政黨の總裁に降下するものとの習慣を作り、信念を與へるやうになつては、大權の發動に一種の束縛を加へる事になる。その首領に對する御信任の有無は、問ふ所でないと言ふ、國體上、許すべからざる事態を生じ、一面どんな悖德の者が力づく、金づくで總裁となつても、これに政權を掌握されると言ふ實際上の危險も起つて來る。現に政黨はその危險に近づきつゝある。總裁となりさへすれば、首相となり得ると言ふ信念を與へたゝめ、そのためには五百萬や千萬の金は使ふ覺悟を決め、或は暴力によつてゞも、總裁の地位を奪ふと言ふやうな兆候が現はれて來てゐる。

この點に伊藤公は、さすが卓拔な意見と用意を殘してゐる。憲法義解を始め、さまざまな書物或は演說等で、日本憲法の特異な事を力說し、自ら政治を擔當するに當つても、百年の將來を見越して愼重な態度をとつて居るが、就中、政友會創立に際して、黨員に示した演說及び公の名で發表された立憲趣旨書には、この點について萬全の用意がされてある。立憲趣旨書の一節にはかう述べてある。

> 抑閣臣の任免は、憲法上の大權に屬し、其簡拔擇用或は政黨員、或は黨外の士を以てす。皆元首の自由意思に存す。而して已に擧げられて輔弼の職に就き、獻替の事を行ふや、黨員政友と雖も、決して外より之に容喙するを許さず。苟くも此本義を明にせさらむ乎、或は政機の運用を誤り、或は權力の爭奪に流れ、其害言ふべからざるものあらんとす。予は同志を集むるに於て、全く弊竇の外に超立せん事を期す。凡そ政黨の國家に對するや、其全力を擧げて、一意公に奉ずるを以て任とせざるべからず。凡そ行政を刷新して、以て國運の隆興に伴はしめんとせば、一定の資格を設け、黨の內外を問ふ事なく、博く適當の學識經驗を備ふる人材を收めざるべからず、黨員たるの故を以て、地位を與ふるに能否を論

ぜざる如きは、斷じて戒めざるべからず。地方又は國體利害の問題に至りては亦一に公益を以て準となし、緩急を按じて、之が施設を決せざるべからず。或は鄕黨の情實に泥み、或は黨業の請托を受け、與ふるに黨援を以てするが如きは亦、斷じて不可なり。予は同志と共に此の如きの陋套を一洗せん事を希ふ。(下略)

讀み來ると現在の政黨の弊害をすべて豫見して、この趣旨書を書かれたやうにさへ思はれる。さらに立黨式の演說では

「政黨は多數を望むよりも黨員の質を重んじ、規律を明らかにし、秩序を整へ、奉公の誠を以て事に從はねばならぬ。」

と述べ、自ら天下の模範たらんと期してゐる。

もし伊藤公のこの精神が政黨を始め、一般國民に徹底して居つたならば、政黨は今日の如く權力爭奪の具となり、腐敗することはなかつたであらう。金づくで黨內に勢力を占めて、幹部を狙ひ、總裁を狙ひ、首相たらんとするやうな所謂督軍制度が行はれなかつたに相違ない。從つて國民の信用も失墜せず、現に見るやうな無力に墜ち、國民の輕侮を招く筈もなかつたのであらう。惜むべき限りである。

さて第一回の解散は先に述べたやうに、政府の誤つた觀念から政黨を撲滅し、別に政府の御用を勤める議員を多數選出させるため行はれたので、この選擧から當然、選擧としての眞の意義を失ひ、國民の意思を妨げるやうな選擧の墮落が始まつた。結果は民黨側百五十九名、吏黨百十四名の當選となり、國民の政治意志は牢として奪ひ得ない事を示した。干涉の元締たる品川內相は、勿論職に留まる譯にいかず、選擧直後に辭職して終つた。農相であつた陸奧は、最初から選擧の公正を主張して、干涉に反對して居つたが、これも品川を追うて辭職し、內相に副島種臣、農相に河野敏鎌を補充して、第三議會に臨んだ。

この議會は最初から貴衆兩院共、政府の干涉を彈劾し、貴族院は干涉官吏の處分建議案を可決し、衆議院は內閣彈劾案を通過させて停會された。結局、政府は追加豫算二百八十萬圓の中九十萬圓を削減され、兩院から事實上の不信任を表示されながら、無事閉會となり、數月の後間もなく總辭職し、後には伊藤公を首班に、山縣司法、河野文部、仁禮海軍、大山陸軍、渡邊大藏、井上內務、黑田遞信、後藤農商務、陸奧外務と言ふ元勳總出の內閣が出來た。

これから二十七年の日清開戰に至る二年間は、干渉に對する反感と、議會を擁護して藩閥に當ると言ふ建前から、事毎に政府と民黨は爭つて、實に騷然たるものであつた。近頃議員の演壇占領や議事妨害の醜態が攻撃されるが、これもどちらかと言へば、この頃の政府や官僚が敎へたやうなもので、政府委員席から議員を彌次つたり、閣僚が議長の制止を肯かず、勝手に登壇したり、隨分亂暴なものであつた。

第四議會では民黨が結束して、總豫算の一割に當る八百八十萬圓削減を決議し、政府が不同意を唱へるので、自ら休會までした。彈劾上奏文を捧呈したり、停會を受けたり、休會したり、揉み合つた末、詔勅が渙發されて、やうやく鎭まつた。

第五議會も解散され、新議員による臨時議會第六議會も續いて解散され、この總選擧中に日清戰爭が始まり、やうやく擧國一致となつて、政爭が中止されたのだが、この第五議會には政府との衝突の外、衆議院自ら議長星亨を除名すると言ふ珍事件が起つた。

星は傳へられる通り非常に剛腹な人であつたが、決して惡い人ではない。むしろ曲つた事の大嫌ひな方で、從つて自ら是なりと信じた事は、斷じて妥協せず、グングンひた押しに押して行く方であつたから、敵が多かつた。又敵と見たら、鬪はずに居れぬ人でもあつた。星の惡評を蒙つた原因は澤山あるが、中で最も民衆の反感を啖つたのは、相馬事件の家令側の辯護を引受けたためである。相馬事件と言ふのは相馬子爵家の御家騷動で、當主の誠胤子を家令達が狂人と稱して監禁し、藩主側の錦織剛淸と爭つて居つた。それを當時衞生局長だつた後藤新平が、錦織に味方して、子爵を連れ出し、訴訟事件になつたものだが、芝居の筋を地で行つてゐるため、世間は後藤や錦織を忠臣義士と褒め讚へ、家令達を極度に憎んで居つた。そのため家令側には誰も辯護人になり手がないのを、星が例の氣性でこれを引受け、一人で敵役を買つて終ひ、只さへ人氣の惡い所へ、いよいよ民衆の憎しみを受けたわけである。

それに東京市政は、殆んど星一人で切りまはすし、衆議院では自由黨を背景に各派の恨みを買ふと言ふわけで、新聞などからは目の敵にされて居つた。そこへちよつとした下らぬ問題を發かれ、議員から自決を勸告されたが受付けず、上程された自分の問題の議事に迄、議長席を退かぬ押太さに、味方の自由黨さへ怒り出し、たうとう議長彈劾上奏案と言ふ珍無類な案が可決された。よく考へて見れば、自分達で選擧して勅任された議長を彈劾上奏するなど、出來る筋合ではない

帝圖

が、當時の議員はその位、議事に暗かつた譯である。

果して陛下からは、恐懼にたへぬ御下問を賜はり、議員一同謹んでお詫を言上の上、上奏はお下戻しを願ひ、星に對してはさらに反省を求めたが、肯かぬため最後には院議に從はぬ廉をもつて除名の決議をして終つた。しかし當の星は平氣な顔で、間もなくその補缺選擧に最高點で當選し、大威張りで登院、改進黨やその他の反對派議員を呆氣にとらせた。

まづすべての點から言つて、この頃は議員も政府も幼稚なもので、妙な事が多かつたが、この星事件位、珍妙な事は少い。

日清戰爭と三國干涉來

第五議會の解散が、二十六年の押詰まつた十二月三十日、選擧は三月一日に行はれたが、前回の剌戟を受けて、民黨の方も官憲や吏黨の暴力に對抗するため、壯士を集める騷ぎとなり、二十五年同樣、到る所死傷者を出す程の猛烈な競爭が行はれた。勿論この時も民黨側が、壓倒的に勝利を占めてゐる。

この頃は朝鮮問題で、支那との交涉が次第に面倒になり、例の袁世凱のため、日本の外交は散々な目にあつてゐた時である。政府は戰爭を避けるため、種々苦心して居るが、民間志士や政黨、それに貴族院方面でも對外硬論が旺んで、政府を責め立てゝ居つた。一方條約改正の問題を控へ、この方は平等條約を獲得すると言ふばかりでなく、外國人の土地所有權や内地雜居に對して誤解があり、極端な排外論が勢力を得て、内閣を苦しめて居つた。

朝鮮問題では勿論、即時出兵とか、清國膺懲とか言ふ景氣のいゝ議論が大受けで、條約改正の方は不平等條約を廢棄した上、外人には日本人が外國で得て居る權利すら與へぬと言ふ攘夷論の燕返しだから、政府も手を燒いて居つた。而もこれは民間の志士浪人ばかりに唱へられるのではなく、貴族院の近衞公とか、谷干城などと言ふ有力者が、音頭を取つて居つたのである。

今から考へると、實に馬鹿々々しい話であるが、外人に土地の所有を許したら、富士山だの日本三景だの、その他天下の名所は、みな外人に買占められるだらう。外人は非常に金があるから、とても日本人は競爭にはならず、大變な事になる、と言つた調子の議論が大眞面目に行はれてをつた。又内地雜居問題にしても、もし雜居を許すとなると、外人の好色癖や亂暴のため、社

會の秩序風俗は全く亂れて終うだらうと心配して、對外硬論を煽り、政府の條約改正交渉に反對した。當時の輿論がどんなものであつたかは、次の川柳や戯詩を見れば分る。

雑居後は變つた國を傾ける
雑居後はひげの威を借る狐あり

内　地　雑　居

内地雑居雖大慶　時々亂暴差當困
赤髯助倍招珍事　無法寫眞騒女湯
雑居早々刄傷騒　慘狀語傳評判高
辯舌滔々横板水　判官日夜御心勞

當時の政府としては、支那と言ふ大敵を相手にいつ戰端を開くかも分らず、財政は苦しい、軍備は足らず、議會では貴衆兩院から責め立てられ、その上條約改正の大事業を控へて居るのだから、全くその苦心は察せられる。貴族院でも條約勵行建議案として、婉曲に政府を問責する案を決議し、衆議院は眞向ふから政府を彈劾する。院外では對外硬全國同志大會を開いて、五千人からの有志が集合して、政府の弱腰を痛撃する有様で、近頃の自主的外交運動などの生温さではない。畏れ多い事だが、陛下にもいろいろと御軫念遊ばされて居つたと承はつてゐる。

この險悪な對外硬論の中で、第六議會が召集された。衆議院は内閣彈劾の上奏案を可決し、引續き條約改正に關する强硬な決議を、殆んど全會一致に近い數で決議して、解散された。これが六月の二日だから、既に支那との國交は決裂に近く、京城では將に火を發せんばかりに切迫した時局の眞つ最中であつた。

解散の直前、政府は陸奥外相を起たせて、條約改正に關する演説をさせたが、その趣旨はこの非常時局に當り、徒らに向ふ見ずな硬論をふりまはして、政府の施設を妨害するやうでは、國民も昂奮して、外國に侮られ、その結果は、外交に累を及ぼすばかりであるから、須く冷靜に歸つて貰ひたいと言ふ意味であつた。併し對外硬論は國民の輿論で、貴族院すら各派交渉會を開いて、民黨應援を決議し、近衛公なども意見書を發表して、政府の處置を非難した程であるため、民黨側の意氣はいよ〳〵昂まる有様であつた。

解散から十日目の六月十二日には、我が陸軍が仁川に上陸して京城に入り、風雲いよいよ急と

なつたので、朝野の對立空氣は次第に和いで來た。七月の豊島沖の海戰に續き、遂に八月一日宣戰の大詔渙發され、政爭は一瞬にして中止され、擧國一致、外敵に當る事となり、九月一日に行はれた總選擧は、久々で平穩に終つた。

支那では連年に亘る日本內部の政爭を見て、到底日本は開戰など出來るものではないと高を括つて居たが、開戰と決して一夜の中に擧國一致の火の玉となつたために、こゝに大變な違算を生じたらしい。この事は、李鴻章や袁世凱等の後年の回顧談に物語られてゐる。

實にこの外敵に當る場合に於ける擧國一致と言ふ事は、日本國民のみの持つ特色とも言へるであらう。前二回の選擧には、多數の死傷者まで出して、爭つてゐたものが、イザ開戰となると、藩閥も政黨もない。昨日まで政府を散々攻擊して居つた政黨や貴族院、民間志士のいはゆる對外硬同志が、先頭に起つて政府を擁護し、鞭撻するのであるから、支那政府などから見ては、唯呆氣にとられる出來事であつたに相違ない。日露戰爭の時もさうであつたが、この時も廣島に開かれた臨時議會は、一億五千萬圓の臨時軍事費を即決可決して終つた。當時の豫算は八九千萬圓であつたから、これを今日の豫算に比例を取れば、約五十億の軍事費に當る。今日とは比較にならぬ苛烈な政爭の最中、これを即決して終つたのだから、如何にその擧國一致が鮮かであつたか、國民の意氣が熱烈であつたか想像出來る。

媾和談判の結果は遼東半島、臺灣、澎湖島を獲得し、償金二億兩を收めると言ふのであるから、如何な對外硬派も、これには一點非難の打ち所がない。こゝに行くまでには伊藤・陸奥兩全權の水も洩らさぬ用意と駈引がある。政黨側からは自由黨から中島信行、林有造、河野廣中それに自分、改進黨からは鳩山和夫外二三名の者が下關に出向いて、談判を監視して居つたが、その苦心と周到さには全く敬服させられた。これを一々細說する事は、この回顧談とは緣遠いから略しておくが、交涉は最後迄、日本側が平押しに押捲くり、李鴻章襲擊と言ふやうな、當方にとつて非常な不利な事件が起つたにも拘らず・乘ずる隙を與へず、いよ〳〵調印に漕ぎつけた。こゝで三國干涉が起つたのである。

今から憶ひ出しても、實に血の逆流するやうな殘念な事件であつた。併し干涉が起つて見れば、もう落着く先は分つてゐる。もし干涉を排除すれば、三國の精鋭な艦隊は、渤海灣頭を威壓してゐるから、戰後の我が老廢艦隊は敵し得べくもない。折角の戰果は根柢から奪ひ去られるの

みか、我が本土すら危險に瀕しなければならぬ。併し見す〳〵干渉に屈服しやうものなら、以夷征夷の本家支那の事だ。何を言ひ出すか知れたものでなく、同時に戰勝に醉うた國民はどんな騷動を起すかも分らぬ。政黨始め對外硬の一派は蹶起し、戰前にも增した混亂の起る惧れがある。伊藤公以下、政府要路の苦心は察するに餘りあつた。

政府部內でこの時、最も問題となつたのは、媾和條約を批准せぬまゝ干渉を容れて和約をやり直すか、それとも條約は一應批准を終へ、改めて三國の申出に應じ、遼東半島を還附するかと言ふ點であつた。双方それ〳〵理窟はあるが、陸奧伯は斷乎として批准强行を主張し、遼東還附は別に三國の申出に對し、考慮する形式を執れと頑張り、遂にその通りとなつた。今日から考へれば、この外執るべき途はなく、これが最善の策である事は明らかだが、騷然たる內外の時局の中で、かやうな正確な判斷は容易に得られるものではない。內外古今に通ずる識見と、斗の如き膽略が無くては出來難いものである。

この結果、伊東巳代治君が批准交換の使節となつて、芝罘に渡る事となつたが、この時の事につき伊東の回顧談と、伊藤公爵家にある記錄とに違つた點のあるのを最近發見したから、餘計な事だが、ちよつと附加へておきたい。

この時、政府は堂々と軍艦で行けと言つたけれど、伊東は自分はそれは危險だから商船がいゝと主張して、遂に商船で出かけた。芝罘に行つて見ると、果して三國の艦隊が戰鬪準備を整へて待つて居つた。もし自分が軍艦で乘込んだら、どんな間違ひが起らんでもなかつた、と自慢にしてゐるが、自分が伊藤公爵家の書類を見てゐたら、これは全く逆になつてゐる。伊東はこの時伊藤公に、今度の任務は非常に重大だから、自分を是非全權辨理大使にして貰ひたく、同時に軍艦で儀容を整へて乘込みたいと、二つの條件を申込んでゐる。これに對して伊藤公は、この際軍艦で御批准書を携行する事は、三國艦隊に實力干渉の機會を與へるやうなものだから危い。商船なら如何に彼等でも砲擊を加へるわけにはいくまいから、商船で行けと命じたと言ふ事が記されてゐる。

全くこの時、三國の艦隊は艦體の色を塗替へ、戰鬪準備を整へて、旅順沖に待受けて居つたから、伊東が軍艦で行つたとしたら、大變な事になつたであらうと思ふ。かうした點にまで苦心して居た先輩の用意の周到なるには感服せざるを得ない。

遼東還附の大詔

遼東還附の大詔が渙發されると、果然豫期した通り、國內の物情は騷然として起つた。國民としては無理はない。有史以來の國難を克服し、歐米列國すら多少は憚つて居つた支那を叩きのめし、彼を降服させ、有頂天になつてゐたのであるから、正に九天の上から奈落へ突落されたやうに感じたものである。戰爭は連戰連勝してゐた後であるし、政府特に外交當局の不手際から、この屈辱を招いたとして非難攻擊の旋風に投げこまれて終つた。貴衆兩院その他の對外硬同志會は勿論猛然として政府問責運動を始めた。冷靜に考へれば、何人が局に當つても、あれ以上の解決が出來なかつた事は明らかだが、昂奮した人心は、いつの時代でも同じ事、唯滅茶々々に政府を攻擊して騷いだ。伊藤、陸奥兩先輩はこの情勢を豫見したから、干涉を秘して批准交換を急いだのであるが、かうなると豫め干涉の來る事を豫知しなかつたのが、外交上の一大手落だとさへ非難し始めた。

日本としては、一面に戰後の經營を行はねばならぬと共に、軍備を充實してこの屈辱を雪ぎ、同時に、列國の壓力を排除しなければならぬ。戰時中にも勝る擧國一致の力をもつて臥薪嘗膽、他日を期せねばならぬ時であるが、この狀態を放任しては、內爭はいよ〳〵苛烈を加へるばかり、さし當り戰後經營の第一着手とも言ふべき軍備擴張は、議會と政府の衝突によつて、到底解決出來さうにもない。議會を開けば恐らく正面衝突をもつて解散を繰返す外ない、と自分は考へた。これは放任しておけない。國民に選ばれて國政を託された議員が、感情に囚はれて大局を忘れ、昂奮した輿論に雷同するのは、よく〳〵愼まねばならぬ。冷靜であらねばならぬ貴族院の大多數すら、激昂の餘り、政府問責に夢中となつてゐる今日こそ、政黨たるものが國家の大局を考へて國民を指導し、憲政をして眞に意義あらしむべきではないか、と考へた。當時自分はまだ四十そこ〳〵の若輩であつたが、多くの先輩が何故この點を考へないかと、實は烏滸がましいが不審に思つた。

そこである日、當時黨內で板垣伯に次いで重望を負うて居つた河野廣中君に、自分の意中を打ち明けた。大體かう話した。

「世間では三國干涉を豫知しなかつたのは、政府の重大な手落だと言つて、攻擊してゐ

るが、たとへ干渉を豫知したとて、それを防げるものではあるまい。もし媾和談判中に干渉を認めて、これを考慮の中に加へたら、談判はどうなつたであらう。あれ程の成果はおろか、惡くすると國家の危機を招いて居るかも知れん。政府が干渉を受けながら、これを秘して、とも角もあれだけの條約を成立させ、批准を終つたのは、むしろ大成功ではあるまいか。

自分の考へでは、媾和條約が餘り我國に有利に出來過ぎた。即ち成功し過ぎたため、この干渉を招いたものとも見える。干渉の來た事と媾和條約の成果は、別にするが當然であるし、況んや戰後經營の問題は、これこそ擧國一致を必要とする筈で、徒らに政府を責めて騷擾するなどは、血迷つた沙汰と言ふべきであらう。又干渉に應じ、屈辱を招いた事を責める議論が高いが、これとても今更政府を責めて何になるか。屈服したのは政府ではない、我が國の實力が屈服を餘儀なくさせたのだ。もし三國の要求に應じなかつたらどうなるか。勿論三國と一戰しなければならぬ。今戰後の老廢した艦隊と、疲弊し切つた國民をもつて、あの三强國を相手に戰へるであらうか。何人が局に當つても、泣いて三國に從ふ外ない。一戰して敗れたら亡國あるのみだ。

もし現在のまゝで議會に臨むとすれば、政府と議會は衝突して、解散を受けるか、政府が退くか、二途を出ない。たとへ誰が後繼內閣を組織しようとも、今更遼東還附を取消す事は出來ぬ。今後の問題は、干渉の後始末をどうつけるか、我が國力を如何にして充實させるか。そしてこの雪辱を他日に期する方策を講ずる外ない。それは擧國一致、臥薪嘗膽の外ないではないか。御詔勅を拜すれば、畏れ多いが聖慮の程もこゝにあるものと拜察される。

軍備の擴張は戰後經營の第一要務で、其の大豫算も勿論次の議會に出る事と思はれる。もし議會が政府を問責する結果、之を次年度に持越すと言ふ事になつたら、これは臥薪嘗膽を延ばす事になり、政府を責める者、自ら政府以上の失態を犯す事になる。何人がやらうとも、此の際は只管國力を充實し、國辱を雪ぐ外ない。それには擧國一致だ。この際感情に囚はれて、盲蛇に怯ぢぬ對外硬の尻馬に乘るなど愚の骨頂と言はねばならぬ。國家の大政黨として、この際こそ大局を誤らず、政府を助けて憲政の效用を發揮すべき時ではあ

るまいか。」

大體こんな意味であつた。

自分はまだ若かつたし、老先輩達のやうに議會開設前からの藩閥との苛烈な感情の對立もなく、一方、時の外相として非難の征矢を一身に浴びてゐる陸奥とは、親戚の關係があり、政界に入るについても、常にその指導を受けてゐたものだから、他の黨員に較べると、冷靜である事が出來た。そこでこんな考へも浮かび、これを切出す事も出來たのであつた。

河野は自由黨創立以來の有力者で、星のやうな剛腹さは無かつたが、その人格と閱歷で、當時黨內で板垣總理に次ぐ有力者であつた。その河野は元來正直一方の國士型の人物だから、直に自分の主張に賛成してくれた。そこで二人で黨內の有力者を說く事となり、板垣の懷刀と言はれ、萬事を切りまはしてゐた竹內綱に話した所、これも尤もだと同意を表し、續いて林有造、片岡健吉などの領袖連を說いた所、いづれも賛成した。そこで板垣總理を說き、正式に黨の幹部會に圖る前、一應政府がどう考へてゐるか、その意中を探る必要があると言ふので、自分がその任務を引受けた。

自分としては國家のためたるは勿論、其當局者たる陸奥伯も大いに滿足するであらうと、早速大磯に行き同伯に面會し、それまでの經過を話して、自由黨と提携すべきを說いた所、案外にも陸奥は頗る冷淡で、碌々返事もせぬ有樣であつたから、失望の餘り不滿すら懷いて、早々辭去した。併し同志先輩に對して、政府が氣乘りせぬ……とも返事が出來ないので、今一應、今度は伊藤首相に直接面會して見やうと考へた。併し伊藤公には伊東巳代治が書記官長として附いて居り、これが平大臣を頤で使ふ程の腕利きの上、意地の强い人物故、先づ以て伊東の同意を得べく先づ馬を射よといふ方針で伊東に對して懇談を爲した。

すると伊東は非常な乘氣で、すぐ樣首相に通じた所、公から自分と會見したいと申出て來た。伊藤公もこの時はいろ〳〵と惱んで居られた時ではあるし、手を執らんばかりに頗る上機嫌で國家の爲め是非盡力せよ、と言はれるので、若い自分は大得意で歸つて來た。間もなく陸奥から呼びに來たので行つて見ると「先日の君の話は結構な話には違ひないが、政黨にも相當頑固な人物もあるから、君がいふ如く黨の幹部連を動かすのは、容易の業ではない。第一自分と君との關係をも考へ、且つは重大にして至難の事務であることを思ひ、激勵のつもりでわざと冷淡な挨拶をして

置いたのだが、「今日伊藤首相が來て、非常に喜んで君の話をされた。今日の時局を切抜けるには、政府と政黨が互に提携する外ない。國家のためしつかりやれ」と言はれたので、隨分人の惡い伯父さんだとは思つたが、これで政府の腹がスツカリ判つたから、意氣揚々と河野君に報告した。

それから後は話がどん〳〵進行して、この二十八年から九年にかけての第九議會では、陸海軍共飛躍的大擴張豫算――何でも二億三千萬圓の豫算中、軍事費は一億四千萬圓即ち總歳出の六割に當る――を可決して、日露戰爭に對する基礎的國策が確立された。もしこの時、この提携が行はれなかつたならば、必ずや議會は三國干涉に對する政府の責任を糺彈して政局は混亂し、人心の統一も戰後の經營も緖につく事が出來なかつたと思ふ。事情を知らぬ世間では、政黨を藩閥政府に賣り、妥協の端を開いたのは自由黨で、岡崎はその元兇だとの非難をする者もあつたが、自分としては國家の大局に鑑み、議會政治家として國家に聊か貢獻したと思つてゐる。從つてその後もいろ〳〵政界に働いた事があるが、これが言はゞ私としては初陣の功名で、非常に愉快な記憶である。一身一黨の利害のため動いたどころか、日淸戰後の經營を整へ、次いで來るべき日露大戰の用意のため、政治家としての本分を盡くし得たものと確信してゐる。

板垣伯はその後公然政府を助け、自由黨の政策を行はせるため、入閣して內務大臣となり、伊藤公と我々との交情は次第に緊密となつたが、これが後年公が自由黨を基礎として、政友會を創立される遠因となつたのである。即ちこの事あつて後三年、憲政黨が改進黨系と分裂した時、我々は幹部の總意をもつて、公を黨首に迎へる事を申合せ、その旨公に申込んだ。これに對する公の返事の草稿を近年公爵家から自分が貰ひ受け、今は政友會總裁室に揭げてある。公が公然政黨に關心を示されたのはこれが始めてで、言はゞ政友會草創の秘書とも言ふべきものであるが、その全文は次の通りである。

諸君が憲政黨の名をもつて、余に之が統率の任に當らん事を求められたるは、余の光榮とする所なり。余は深く諸君の厚意を謝し、熟ら之に酬答する所以の途を考慮するに余が今日に於いて名を憲政黨に列し、その首班たらん事は、汎く國民の要素を集めて、政黨の根基を固くし、紀綱を振肅し、責守を嚴明し、以て憲政の運用に對する眞成の機關たらしめんとする諸君の希望に於いても、便ならざる所あらん事を懼る。

顧るに余不敏、亦聊か報効を萬一に期す。而して政黨改善の必要を感ずるに於いて、諸

君と殆んど其希望を一にするを喜ぶ。將來國家文明の政治をもつて立憲の美果を收むるの必要より、余は之に關する愚見を公にするの日あるべし。其期に際し諸君と相謀り、以て同一の軌轍に進む事を得ば、獨り余の幸のみならざるべし。

松隈內閣から板隈內閣

陸奥伯は元來病身な人であつた所へ、條約改正、日清戰爭から媾和會議、三國干涉などの難局に當り、痼疾を悪化させたので引退を乞うたが、思召をもつて現職のまゝ、海外療養の御暇を賜はつた。それで西園寺公が臨時外務大臣となり、伯はハワイへ海上療養に出向いたが、病は依然捗々しく癒えず、遂に辭職した。

薩派方面では、內閣の前途が餘り長くないと早くから見極めをつけ、後繼內閣の準備をして居つたが、三菱の岩崎彌之助男が箱根の別莊に松方、大隈兩侯を密會させ、伊藤と自由黨の提携に對抗する相談をやつて居た。そこで松方は陸奥の辭職を機會に、この際は條約改正その他の後始末を解決するため、大隈を外務に入れ、內務の板垣と共に眞の擧國一致を圖るがよからうと至極尤もらしい話を持出した。近頃の政界でも官僚や軍部と、兩政黨を纒めて擧國一致をやらうと言ふ運動が、繰返し繰返し行はれてゐるが、人間の智慧と言ふものは、幾年經つても大して變らんものと見え、當年のやり方と少しも違はないから面白い。

所が板垣伯と言ふ人は、非常に恬淡な人であると共に掛引の少い、言はゞ正直一方の人であり、一方大隈侯と來たら機略縱橫、殆んど端倪すべからずと言つた型の人で、伊藤公程の人でも、大隈侯の機略には惱まされて居つた程だから、板垣伯にとつてはひどい苦手であつた。これ迄にも度々提携したことはあつたが、いつも背信に終つたらしく聞いてゐる。伯は大隈を入閣させる位なら、自分は辭職すると言ひ出した。伊藤公は折角自由黨の援助を得て政局を安定させ、戰後經營に乘り出した時だから、何とかして松方公の提議を引つこませようと骨折つたが、その方は薩派、三菱、大隈の間に相當突込んだ話をつけて居るから、なか〳〵引つこまない。到頭內閣不統一で八月の三十一日に辭表を捧呈した。

次の內閣は出來上るまでに、何でも二十日以上もかゝり大分難產だつたと記憶するが、これが所謂薩派と進步黨（改進黨の後身）の聯立した松隈內閣で、松方は總理、大隈は外相となつた。

伊藤公はこの時、最後には松方の言分を容れて板垣伯を宥め、擧國一致で行くつもりだつたのではないかと自分は思つてゐる。と言ふわけは、恰度この總辭職の朝、大磯の陸奥別邸に行つて、陸奥と話してゐる所へ突然、これも滄浪閣に居つた伊藤公がやつて來た。暫く話し合つた後、歸りがけに自分に向つて「ちよつと今日は君に用事が出來るかも知れぬから、一時頃私邸の方へ來てくれ」とのことであつた。一時半頃高輪の公爵邸に行つた所、恰度閣議がすんで皆引揚げ、公爵は食堂で葡萄酒に微醺を帶びて居られたが、自分を見ると「もう濟んだ。今閣議を開いて總辭職する事に決めたよ。もし今日の閣議で片附きかねたら、君に用事を頼まうと思つてゐたが、その必要もなくなつた」と言はれ、内閣を投出した人とは見えぬ朗かさであつた。

恐らく松方の言分を容れて大隈を入閣させ、板垣が肯かぬ場合は、自分に板垣引留めを奔走させようと考へて居つたのではないかと思つてゐる。その時は、それ以上强ひて聞く事でもなし、何故急に投出しを決心したかも聞かなかつたが、この時の公爵の心中には、隨分面白い事があつた事と想像してゐる。

進步黨は公然政府と提携を決議して與黨となり、去年の與黨が野黨となつたから、こゝに始めて民黨同志交互に朝野に對立する形勢となつた。この第十議會でも、政府は一億四千萬圓からの軍事費豫算を提出し、内、公債財源六千萬圓となつて居つた。野黨とはなつてゐたが、自由黨は先の伊藤板垣提携の趣旨を重んじてこの大軍事豫算を無傷で通過させたが、貴族院では軍事費が過大だとの非難が高く、歲出三千萬圓の減少、公債半減から遂には軍備緊縮上奏案まで提出されて混亂した。この上奏案は流石に否決されたが、遂に軍艦新造費千六百萬圓を削除する事に決定し、兩院協議會となつた。協議會では衆議院が政府を支持して、結局海軍費から百二十萬圓削つて豫算は成立したが、昨今政黨と言へば、國防の敵を惡罵されてゐる事實と思ひ合せて、隨分面白い事實だと思ふ。

海軍擴張のためには、毎年御内帑金まで下賜され、官吏は俸給を割いて獻金し、上下一途ひたすら次の一戰に備へてゐる時、國民を代表する衆議院は、國防充實を助け、藩閥や官僚の牙城貴族院が、却つて之に反對して居つたのである。第九議會と言ひ、この第十議會と言ひ政黨の理解ある國策援助がなかつたら、軍備の充實は勿論思ひもよらず、當然日露の戰勝もどうなつたか分つたものではない。昨今の政黨が多少墮落して居るからと言つて、政黨を否認し、或は之を有害無

用視する軍人などは、今少しこの歴史的事實を顧るべきである。

松隈内閣は半年程して、薩派と改進黨の仲間喧嘩から、大隈以下改進黨の閣僚、官吏全部引退して、後は純薩派内閣に改造、第十一議會に臨んだ。自由、改進兩黨最初から内閣不信任を決して居つたから、開院式の翌十二月二十五日解散となり、一方松方は、無責任千萬にも解散の仕放しで、その二十八日辭職して逃出した。よく政黨を無責任だとかでたらめだとか惡評するが、こんな無責任な眞似は政黨員には無い。こゝで又伊藤公が再出馬する事になり、三十一年の一月早々伊藤内閣が成立した。

伊藤公は板垣、大隈兩伯と會見して、妥協しやうとしたが、これは成功せず、五月の臨時議會となつた。此の議會に政府は今で言ふ赤字補塡のため二千五百萬圓の增税案を出して來た。野黨側は總豫算に即せざる增税案として否決したものだから、又も解散である。考へて見ると初期議會以來、滿足に議員が任期を終つた事は一度もなく、長くて二年、短ければ當選そのまゝ解散と言ふ激しい政爭を繰返して來てゐる。これで政黨が無難に育つて行く筈がない。

流石に元氣な民黨側の猛者連も、この解散の鈎瓶打ちには飽きが來た。同時に民黨同志の爭ひ

にも馬鹿々々しさを感じて來た。こゝに民黨大合同、即ち憲政黨創立が起り、引續き最初の政黨内閣たる隈板内閣の成立となつたのである。

日本の憲政史に頗る華々しい憲政黨創立も、元を洗つてみれば殆んど偶然といつてもいゝ。ホンの茶呑み話から始まつてゐるので、何も政治的な根據や原因があつたわけではないのである。輕い茶呑み話から始まつたため、或はあの通り實を結ばず、慘めに短命で終つたかも知れない。恐らくさうであらうと思ふ。

恰度この解散の日、三々伍々引揚げて行く議員の中で、福岡出身の進歩黨の有力者平岡浩太郎君が、兩黨の懇意な幹部連に「宅へ寄つて茶でも呑んで行かんか」と誘つたのが、あの大合同のキツカケと言へば、少し可笑しい位だが、事實はその通りなのだ。兩方から十一二人も集まつて居つたかと思ふ。その席で平岡が云ふには

「お互、多年民權のために戰つて、衆議院では常に多數を占めて居るに拘らず、未だに藩閥の勢力に一指も染める事も出來ず、政治は彼等の意のまゝに振舞はれてゐると言ふのは、實に腑甲斐ない話だ。兩黨力を合はせさへすれば、藩閥政府など一擧手一投足の勢で

倒せるべき筈ではないか。この際、お互に過去の行掛りや感情を捨て、藩閥打破のため、兩黨を解黨して、一大新政黨を創立してはどうだ。」

と。これは別に平岡が企んでやつた事でもなく、極く自然にその時の空氣から、平常考へて居つた事を述べたに過ぎなかつたやうに思ふ。所が集まつた連中も、藩閥から懲罰的に解散の釣瓶打ちを食つて憤慨してる所だから一同大賛成、各自黨に歸つて黨議を纏めようと言ふ事に申合せ、すぐ樣運動に取りかゝつた。やつて見ると、兩黨共長老達は二の足を踏んでゐるが、少壯幹部はみな大乘氣で、話はどんどん進行して行つた。黨首はと言ふと、大隈伯の方はあの通り機略に長じた度量濶大な人だから、この話を聞くといづれ合同すれば、みんな自分の手中に丸めこむ位の考へで進んで話に乘つたが、板垣伯は前にも言ふやうに大隈を信用しないから、かなり躊躇して居られた。併し、合同談は長老や首領を置去りに、一瀉千里に進んで、解散されてから僅か十二日目の六月二十二日には、双方同時に解黨の上、新富座で新黨結黨式を擧げるまでになつた。これが憲政黨である。

民黨、即ち嚴正な意味では、日本の政黨を打つて一丸とする、一國一黨の大政黨を僅か十二日間で作り上げたのだから、そこに無理もあれば不自然もあり、話の熟しない所のあるのも、當然と言はねばならぬ。形だけは堂々たる大政黨ではあるが、一皮剝げば中は生煮えの、言はゞ月足らずのやうな政黨に過ぎなかつた。それが無事に育つ筈がない。

自由黨でも黨の大長老たる林、竹內、片岡などゝ言ふ人は、殆んどこの話に關係なく、兩黨首領も結黨式當日まで一度も會合懇談しなかつた。漸く新富座の結黨式に引續き、式後兩國の中村樓で開いた大懇親會の席上で始めて話合つたと言ふ有樣で、順序も手續きも一切無視して押進められたものであつた。それでも併し、外見から見ると民黨の大合同だから、その盛容は藩閥の連中を畏怖せしめる程のものはあつた。

純政黨內閣出現

たとへ內部がどんなに薄弱であらうとも、民黨が多年の行掛りを一擲して合同し、藩閥打破を旗印に總選擧に臨むと言ふのだから、藩閥の諸元老は非常な衝動を受けた。憲政黨成立の翌々日、伊藤公を始め、黑田、山縣、大山、井上、西鄉の諸元老が會合して、對政黨策を協議したが、

この會議は政治史上から見て、かなり重要視すべきものであつたと思ふ。

伊藤公は、既に政黨の實力を無視出來ない時代となつたし、殊に兩黨が合同する以上、如何なる非常手段によつても次の總選擧には憲政黨の絶對多數を阻止する事は出來ない。從つて政府としてはその政策の行はれやう筈はないから、彼等に政權を渡すべきが至當だとの意見を述べたが、山縣以下の諸元老は、全部擧つてこれに反對し、むしろ伊藤公を攻撃する有樣であつた。蓋し伊藤公この時の胸中には、二つの考へが渦卷いて居つたらしい。その一つは憲政の圓滿な發達に關し、政黨を重んずべしとする主張信念で、今一つは逆に此機會に於いて、政黨に一擊を食はせんとする機略である。

憲法の起草者である公は、同時に元勳中、最も進歩した政治家であつた。憲政運用に政黨の缺くべからざる事を認め、その發達改善には少からぬ關心を持ち、結局政黨が政權を掌る時のある事も、早くから豫期した所である。この點で他の諸元老とは、全く認識を異にしてゐた。山縣以下の諸公は、時に政黨を利用する事はあつても、程度の差こそあれ、政黨をもつて過激な政論家の集合と見做し、危險人物視して居つた。從つて政黨に政權を與へるなどは、國家を破壞に導く位に考へて居つたものである。政權は元來、薩長がその實力をもつて、幕府から奪つたもので、明治の新政は薩長の手になり、國民はその恩惠に浴してゐる。だから、薩長の手に政權を握るのは、當然の事だと思ひ込んで居つた。これは今日の時世から顧ると、信じられぬ程馬鹿々々しい話ではあるが、當時の藩閥は全くその位の頑冥な考へをもつて居つたものである。曩にも述べた樺山の亂暴な演說は、この藩閥の感情を率直にさらけ出したもので、當時大して不思議がられもしなかつた。

井上毅子爵は伊藤公傘下の一人として、憲法起草の事業に努力した人である。當時としては餘程の進歩的政治家であるが、それでも藩閥の袖の下に縋り立身出世した官僚の事とて、この點では、やはり頑冥な考へを持つてゐた。次の一文は、樺山の薩長禮讃演說後、井上から閣議その他の模樣を小田原の伊藤公へ報告した手紙で、これも曾て公爵家で自分が借覽したものである。

樺山の演說丈夫の眞色發露、有識爲めに賞讃と同時に政黨激昂を引起したり云々。

病人（井上自身）も夜十時頃まで、首相官邸內議に掛り候處、後藤陸奥のため散々踏潰され、總理は泥中の龜の如く、朝八時より夕四時に至り、事延引と相成候。此日主上の御

配慮不一方、實に恐縮之至りに奉存候。或大臣は後刻御前會議を以て可決と申唱へ候由にて、生は政海の波動に衰德を煩はし奉るは、恐れ多き事に存じ、直に侍從長を以て御前會議など不被仰付、一に首相の意見に任ぜられ可然と申上候。憲政の首相としては、八面玲瓏風中の柳の如く、かく迄に不見識の俗流とは思掛無之、生は覿面罵詈致候。最早絕望に候云々。前途の事思遣られ、鼠輩のため功名を成さしむるのみ、遺憾千萬に存候。

安得猛士治四方

今日の事、只一の猛士を缺くのみ、嗚呼。

十二月二十三日夜　毅

伊藤伯閣下

樺山を丈夫と賞讃し、政黨を鼠輩と罵る所、梧陰先生の識見の程が疑はれるが、定めし伊藤公は、これを讀んで苦笑された事と思ふ。この手紙に明らかな通り、井上達は樺山の演說に對する政黨の反擊に對し、斷乎懲罰を下すべしと主張し、陸奥と後藤に散々やりこめられたわけである。中にはこの問題で御前會議を開き、聖旨を笠に民黨を壓迫しやうと企らんだ不逞大臣もあつたらしく、忠君愛國を看板とする藩閥者流の眞相が、寫し出されて興味がある。

比較的進步的な井上ですらこの程度だから、他の連中の考へは推して知るべしであるが、この破壞主義者、危險人物と思つてゐる政黨に、伊藤公が政權を渡すと言出したのだから、反對するのも無理はない。併し伊藤公は斷じて所信を抂げず、鼠輩に政權を取られ、破壞黨の內閣が出來ては、國が亡びるやうに心配したらしい。併し伊藤公は斷じて所信を抂げず、憲政黨の首領たる大隈、板垣兩人を奏薦する決意を押通した。その結果、元老の中から公を異端視するものまで出て來たので、公はそれならばと、玆に非常の決意を示し、會議の途中で單獨拜謁を願ひ、首相の辭表と共に一切の勳位榮爵奉還を請願した。公としてはこの時、既に政界の大勢を達觀して、丸裸となつて自ら政黨組織に着手しやうと思ひ立つたものらしい。諸元老もこの非常決意には驚いて、翌日の御前會議では公の發議通り、隈、板兩伯に大命降下然るべき旨を奉答し、伊藤公の勳位榮爵奉還は、御下渡しとなつた。議會開かれて僅か十年にもならぬのに、純政黨內閣が出現したのであるから、民黨の得意は想ふべく、それだけ藩閥や官僚のしよげ方もひどかつた。

伊藤公は諸元老と爭つてまで隈、板兩伯を奏薦したが、單純にこれは政黨を重んじたばかりで

はない。その裏には政黨に一鞭を加へやうと言ふ、公一流の機略が隱されてあつた。前にも述べた通り、憲政黨は見かけは堂々たる擧國一黨の大政黨ではあるが、その成立は餘りにも急拵へで、月足らずの弱味がある。十分熟して居らぬから、何かの刺戟を受くれば、直ぐにも土崩瓦解する弱さをもつてゐた。他の諸元老は、唯その威容に驚くのみであつたが、公だけはこれを見拔いて居つた。就中弱點中の弱點とも言ふべきは、自由改進兩黨の融合が未熟で、一黨とは言ふものの、仲間の感情は上から下まで對立し、機會さへあれば、爆發する危險があつた。從つて政權を與ふれば、忽ち猛列な仲間喧嘩を始めて、政務の運行どころでなく、到底永續きするものではないとの見透しをつけて居つた。一面には又、政黨が自ら十分の訓練もなく、勿論確乎たる政策の持合せもないのに拘らず、政府のする事を一から十まで反對して居るから、如何に實際政治が困難なものであるかを知らせると同時に政權を獲るためには、政黨自らまづ如何にその內部を整へ、訓練を加へなければならぬかを十分體驗させるには、この機會を絕好と考へたものであらう。

公はこれがため、二つの重大な用意を行つてゐる。一つは大命降下の形式で、一つは陸軍大臣の推薦である。大命は內閣組織者即ち總理大臣たるものに降るが當然だから、勿論一人でなくてはならぬが、この時は大隈、板垣兩人を同時にお召しになり、兩人に對して大命が降つてゐる。この結果大臣の進退その他國務上に、この二人の間で意見の相違が生じた場合は、必ず同時に引責しなければならぬわけである。どちらが首相となるとしても、意見不一致の場合、一方が退いて一方だけ改造して居殘る事は出來ない。そこで如何なる場合でも、この內閣は兩頭の蛇が必ず一致して居なければならぬが、只さへ仲の惡い二人が、もの〻一年と提携して行けるものではない。老獪と言へば老獪だが、こゝに伊藤公は敵の弱點に乘じて、退つ引ならぬ陷穽を仕掛けたのであるが、果して半年經たぬ中、これに引つかゝつて終つた。

陸海軍は藩閥の本據だから、政黨を蛇蝎のやうに嫌ひ、政黨からの交涉では、どうしても大臣になる者がない。陸海軍大臣は武官でなければならぬから、陸海軍が頭を振つたが最後、內閣は死命を制せられる事昔も今も變りはない。今日に至るまで軍部が政界に特殊な優越權をもつて臨んでゐるのは、結局これあるがために外ならぬ。この時は最初の政黨內閣であり、陸海軍の先輩たる元老全部が、反感を持つてゐるため、大臣の引受手がなかつた。これに對しても伊藤公は一石二鳥の機略を用ひ、進んで陸軍には桂公、海軍には西鄕從道侯を推薦して內閣の成立を助け、

内閣には感謝されたが、實にこの兩大臣を通じて常に牽制、監視し、兩黨の内輪揉めを巧にけしかけ、いざと言ふ時には、いつでも爆破出來る用意を怠らなかつた。この邊の用意、駈引は、當時の政黨政治家は大隈侯を除くと、實に甘いもので、殆んど問題とならなかつた。

兎に角、總辭職の翌々六月廿七日、大命は大隈板垣兩伯に降つた。板垣は首相を大隈に讓り、その代りとして内務、大藏は絶對に自由黨系に寄越せと主張し、卅日親任式を行はれたが、その顏觸れは次の通りであつた。

首相兼外相　大隈重信(改)　　内相　板垣退助(自)
藏相　松田正久(自)　　文相　尾崎行雄(改)
遞相　林有造(自)　　農相　大石正巳(改)
法相　大東義徹(改)　　陸相　桂太郎
海相　西郷從道

大隈の外相を自由黨系に讓れば、恰度閣員の均衡が取れるのだが、大隈は適任者のあるまで、自分が兼任すると頑張つて居つた。實はこの椅子を餌として、自由黨系の有力者を手馴づけやうとしたもので、大臣になりたい先輩中には、隨分侯に踊らされた連中があつたやうだ。

何分、始めて政權を獲得したのではあり、みんな役人になつて、金ピカ服の着たい連中の多い事とて、隨分獵官運動が激しかつた。煩さい連中は大方次官、局長などに收まつて嬉しがるものだから、暫くの間は至極泰平であつたが、ものゝ二ケ月と經たぬ中に、早くも内輪喧嘩を始め、伊藤公や藩閥に手を叩かせるやうになつたのは情ない話である。

陷穽に落ちた政黨

獵官運動の爭ひが地方に展開して、地方官や警察部長等の任免まで、政黨員が口を出すやうになり、これは又、中央と違つて多年狹い土地で角突合つてゐるため、その爭ひはひどかつた。近頃も連りに政黨の大同團結とか、合從連衡とか唱へられてゐるが、地方の政黨地盤と言ふものは、さう簡單に飴細工や指物のやうに、合せたり離したり出來るものではない。四十年も昔のこの兩黨合同がうまく行かなかつたのは、中央の喧嘩もあるが、地方地盤の融和の出來なかつたのも一つの大きな原因であつた。何しろ始めての政權だから、獵官運動がなか〳〵煩さいものであ

つた。只併しこの中で選擧だけは、多年官憲のため、受けて居つた干渉壓迫が無くなつたゝめ、比較的公正に行はれ平穩だつた。結果は憲政黨二百六十と言ふ壓倒多數で、その外には國民協會の二十人、無所屬二十人と至極單純な色別で、この點では久原君の言ふ一國一黨に殆んど近いものが出來たわけである。

内輪喧嘩に火をつけたのは星だ。星はその頃米國公使をして居つたが、憲政黨内閣成立と、聞くと、政府の許可を俟たずに歸朝して來た。外相の椅子が空いてゐるから、自分がなるつもりである。大隈首相は自由黨の有力者を釣るつもりだから、なかなか星をすると言はず、人格者で通つてゐる江原素六君に白羽の矢を立てたが、江原は黨内の空氣や大隈の肚を讀んで、就任を承知しなかつた。星に對する黨内の空氣は、決していゝ方ではなかつたが、星が煩いのと、今一つ閣議で自由黨系がいつも進歩黨系に押されるので、星を入閣させて、この頽勢を盛返さうとの考へから、星を一致して擁して居つた。進歩黨は首相の大隈始め、大石、尾崎、大東みな辯論の雄で、これに對する自由黨系は板垣、林、松田いづれも口下手な、むしろ沈默家揃ひだつたから、とても閣議では太刀打ちにならなかつた。桂が板垣に同情し、自由黨系に好意をもつて大隈を牽制したり、後の山縣内閣で自由黨と妥協の橋渡しをしたのは、みなこの閣議の模樣から起つてゐる。

こんな有樣で、星は自由黨側から一致して擁されながら大臣になれず、黨内を煽動して、大隈に反抗して暴れまはつて居た所へ、例の尾崎君の共和演説が突發して、いよ／＼騷ぎを大きくした。共和演説と言ふのは、尾崎が敎育茶話會で金權の跋扈を攻擊し「もし我國で大統領選擧でも行はれたら、三井三菱の主人が當選するだらう」と下らぬ譬へ話をしたのが原因だが、何しろ文相の地位にあるため、藩閥や貴族院の連中から騷ぎ立てられ、到頭防ぎ切れずに辭職して終つた。星は黨内からこれを攻擊し、いよいよ尾崎が辭職すると、今度こそはその補充と共に、外相を任命しろと迫つたが、大隈は犬養君を尾崎の後に入れただけで、星や自由黨系の希望を入れない。

一體この時尾崎が辭めれば、後任には當然鳩山和夫君を任命すべきで、これは當時黨内の輿論であつたが、どう言ふものか大隈は鳩山を嫌ひ、犬養を取つた。これには我々自由黨系のものも非常に鳩山に同情した。その後も鳩山は、大隈一黨に迫害され通し、改進黨系に居つては、到

底芽が出ないので、自分が斡旋して、僅か第一西園寺內閣の時だつたか、政友會に入黨させたものである。その鳩山の息子の一郎君が大隈侯の政敵となり、大隈の庇護を受けた犬養を政友會の總裁に擔ぐと言ふのだから、坊さんならずとも、因緣輪廻の不思議さを感じないわけにいかぬ。

この內閣では組閣後間もなく、今の官僚が考へたやうな內閣政務調査局を作つたが、この調査局の立案に板垣內相自ら反對してこゝで公然、隈、板兩巨頭の衝突が始まつて居つた。そこへ尾崎問題だから、星を始め自由黨系の暴れ者は承知しない。大體我が黨內閣などと言つても、すべて進步黨の言ひなり放題で、我黨の威力など何もありはしないと言ふのが不平で、それに板垣伯自身は、元來大隈侯と提携する事を好まないものだから、こゝにいよ〳〵自由黨系總辭職となつた。

大隈侯は板垣伯達が辭職すれば思ふ壺で、後は自分獨力でやつて行くつもりで、三大臣の辭表だけ執奏御裁可を乞うた所御裁可にならない。これについては前述の筋書で、伊藤公から內奏し、大命は兩人に降下したものだから、他の大臣は兎に角、板垣だけは大隈と不可分であるとの建前から、これを御裁可にならなかつたもので、大隈もやむなく他の閣僚の辭表をも取纏めて捧呈、恰度滿四ケ月でこの歷史的な內閣は潰れて終つた。顧ると何の仕事一つ仕殘してゐない。官僚から黨人の淺間しさと無能ぶりを嗤はれただけで、全く問題にならなかつた。伊藤公のかけた陷穽に註文通り落込んで、自殺しただけであつた。

辭表を捧呈すると勿論、黨は即時に分裂し、自由黨は內相官邸、改進黨は外相官邸に集まり、これを政黨本部のやうにして、黨員の爭奪戰を始めたが、その結果は自由黨系が百十九人、進步黨系百二十三人となつたが、本部は自由黨系が占領して、憲政黨を維持し、進步黨系は憲政本黨と稱へて、滑稽な本家爭ひを始めた。

大命は山縣公に降り、十一月八日山縣內閣が成立した。同じ年に三度目の組閣である。

對露問題を中心とする東洋の風雲は、この時すでに次第に險惡を加へ、山縣公は非常な難局に當面した譯だ。當時の一般情勢を簡單に述べて見ると、三國干涉の直後、獨逸が膠州灣を租借したのを手始めに、英國は威海衞、露西亞は旅順大連に占據して、各〻これに砲臺、軍港を築き、滿洲全土は殆んどロシア領化する有樣であつた。日本としては戰勝の結果を見す〳〵返還したのみならず、返還させた當のロシアにこれを橫取りされたのだから、國民としては恨み骨髓に徹する

思ひであつた。いつかはこれに報復して奪還せねばならぬに拘らず、ロシアは日本の感情など委細構はず、シベリア鐵道を延長し、東清鐵道を滿洲に乘入れて、旅順大連に延ばして來た。そればかりならまだしも、鴨綠江沿岸に砲臺を築き、さらに進んで朝鮮の龍巖浦や對馬の對岸馬山浦にまで市街を作り、砲臺を構へると言ふ傍若無人な侵略ぶりを示して來た。日清戰爭により折角、支那の勢力を驅逐した朝鮮には、王室を始め各方面にロシアの勢力が侵入して、支那以上の力を揮ひ始めた。

ロシアの目的は既に明白であつた。滿洲朝鮮を領有して、日本海、支那海の海上權を握らうとするのだから、次いで來るものは、日本の存亡問題だ。遼東還附の恨みを晴らすどころか、逆に向ふから足許を襲はれ始めたのだ。何を措いても、この際は東洋でロシアを擊退するだけの軍備を用意せねばならぬ。伊藤內閣は自由黨の協力で、この問題に一歩手をつけたが、それはホンの外廓だけ、內容はこれから充實しなければならぬ。それにも拘らず、打續く內爭のため、豫算は二年間續いて不成立となり、急を要する軍備は、全く顧られてない。最早一日も一刻も待てない切迫した事情となつてゐると言ふ時、山縣內閣は出て來たのである。

山縣公としては、ロシアの狀況が手に取るやうに分つてゐるだけ、その心配は一通りではなかつた。しかし政黨は藩閥を憎み、同時にその牙城たる軍部に好意を持たぬため、この急場に當つてこれに協力を求める事も容易ではない。こゝに桂公と言ふ軍人政治家が居つて、この難場切拔けに活躍した。

桂公はこの內閣でも、陸相として殘つて居つたが、山縣公からの相談を受けると、それには自由黨と提携する外ないと述べ、その承諾を得て奔走を始めた。第一議會に於ける板垣伯の態度には、山縣も桂も非常に感じて居つたと見え、その後同じ政黨でも、改進黨よりは自由黨に好意を寄せ、殊に憲政黨內閣の閣僚であつた桂は、自由黨系の愚直さに同情し、私かに板垣等を援助して居つたから、軍備擴張案を議會で通過さすためには、自由黨と手を握るを近道と考へたものであらう。

內閣成立後間もなく、攝河泉の野で大演習が行はれる事になつた。この時、桂から板垣の所へ密使が來て「時局について、是非懇談を願ひたいが、東京では人目に立つて煩い。自分も首相も大演習に扈從するから、然るべき幹部を伴つて、大阪まで下つて貰ひたい」と傳へた。

當時板垣始め黨の幹部等は、民黨合同も相手が大隈始め進歩黨の連中では、到底信用して行けずと言つて、現狀のまゝでは到底獨力政權を取る目當もなく、煩悶焦慮してゐる時であつた。幹部の考へはこの時やうやく、從來の政黨運動なるものが、空騷ぎに過ぎぬもので、政黨としては政權を取つて、その政策を行ふ事に全力を集中せねばならぬと言ふ事に落着いて來た。政權を取るためには、進步黨との合同のやうな不自然な方法では物にならず、獨力で絕對多數を占め、秩序と統制を保たねば駄目だと考へて來た。そこで絕對多數黨となるためには、從來の戰法を變へねばならぬと、こゝに政黨運動の方向轉換を決心し、桂の申入れに應ずる事となつた。見方によれば、政黨の墮落と評せられるかも知れないが、既存勢力を利用して、その理想に近附かうとする所に、政黨の實質的進步があつたものと考へてゐる。

そこで板垣伯は林、星、片岡、松田四人を伴つて西下し、大阪網島の藤田傳三郎の邸で政府側と會見した。向ふは山縣、桂、西鄉三人だつたとの事である。この會合で山縣は、アッサリと時局重大だから、行掛りを捨てゝ、政府を助けて貰ひたいと申込んだが、これに對し黨の方からは援助はするが、それには黨からも閣僚を入れねば意味をなさぬと入閣を求めた。山縣からは、尤もな話ではあるが、今組閣早々閣僚の入れ換へをやると言ふ事は、實際問題としてとても出來難い、それを敢てしては、內閣に罅が入る惧れもあるから、それは將來の事として、兎も角も援助して貰ひたいと答へ、この會見は、結局妥協不成立のまゝ袂を分つた。

非常時と官僚軍閥

憲政黨はいよいよ十三議會に臨む黨の態度を決する事となつたが、政府との交涉は、物別れのまゝであつたから、總務會は內閣反對を決議して終つた。

この日、恰度自分は伊東巳代治を訪ひ對話中、そこへ黨の總務をして居つた末松謙澄君が息せき切つて飛びこんで來た。どうしたのか、と聞いて見ると、今總務會で內閣反對の決議をして終つたが、自分（末松）などは、從來の關係上山縣にも反對する譯にはなり兼ねるし、と言つて脫黨する事も出來ず、その上、憲政黨が反對となれば、勿論この議會も解散だから、國務はます〳〵澁滯する事となり、實に弱つたと頭を抱へて弱り切つてゐる。そこで自分は「何だ、それ位の事なら、何でもないぢやないか」と笑つた所、末松も伊東も「それなら君に名案があるか」と

帝圖

聞くから、大威張りで「そんな事位、朝飯前の仕事だ。」と法螺を一吹き吹いて見たら、二人共目を丸くして居つた。そこで自分は二人にかう話した。

「板垣總理始め幹部一同、打揃つてわざ〳〵大阪まで出かけると言ふのは、妥協したいからだ。總務會が反對を決議したといつても、それは本心からではない。本氣で反對するなら、何も態々大阪まで行く必要はない。大阪まで出かけたと言ふのは、言はゞ落花流水、誘ふ水あらば去なんとぞ思ふ奴で、必ずや妥協は出來るであらう」

と言つたところ、二人はそんならその策を訊かうと言ふから

「今假りに兩君に鄙見をお話しても、諾否の御答へは出來まいから、若し山縣公にして鄙説を聽かうとあらば、直接首相にお話しやう」と應へたので、二人は「それなら、若し首相が面會すると言つたら、直ぐ總理官邸へ來て欲しい」と言つて立歸つた。

本當の事を言ふと、自分は黨の反對決議も、この時始めて知つた譯で、勿論名案なんぞまだ持合せる筈がない。併し、かう言つて山縣が會ふと言へば、その時適當な案を考へるつもりであつた。亂暴な話だが、双方妥協したがつて居るのだから、何とか話し合ひは出來ると言ふ確信はあつた。末松はこの時、心配の餘り伊東に相談し、二人で山縣公の所へ行くつもりで來たのだから自分の話を聞くと大喜びで、それならすぐ總理を說いて來ると言つて出て行つた。

末松がどうしてこの時憲政黨の總務になつて居つたかは、ちよつとこの際話しておきたい。元來世間は、末松は一切合財伊藤公の指揮で働き、獨力では何も出來ぬ消極的な人間のやうに思つてゐるが、決してさうではなかつた。恰度憲政黨分裂騷ぎの眞最中であつたが、偶然自分は芝公園の末松の門前を通りかゝり、何の氣なしに茶話しをするつもりで立寄つた。すると末松から内訌の話を切り出し、將來の政治運用の話などが出て、一つ自分も政黨へでも入つて見るかと、冗談のやうな獨り言を言ひ出した。そこで自分は「君が本當に入黨する氣があるなら、幹部に話して、大いに優遇する。政黨も今のやうな野人ばかりではいかぬ。君のやうな學問もあり、官界の經驗もある人物を集めなければ、今後は發展出來ぬ」と話した所、大乘氣に乘出して來た。自分は入黨するなら、自分などの紹介で輕々しくやつてはいかぬ。黨の幹部から禮を盡して、叮重に迎へさせるから、そのつもりにしてくれと言つて、本部に飛んで歸つた。本部は當時内相官邸であつた。

本部は進歩黨組と喧嘩の眞つ最中だから、殺氣立つて居つたが、この話を總理や先輩達にすると、第一に星が、それは面白いと贊成し、自分に案内してくれと言つて、一諸に迎へに行つた。末松もさう早く來るとは思はなかつたらしいが、當時黨内を一人で切りまはしてゐた領袖の星が自身迎へに來たので非常に氣を好くし、直ぐ入黨の手續きを執つた、勿論伊藤公にも誰にも相談しはしない。黨の方も敬意を表して、直に總務委員に推薦したわけである。

普通平靜の時でも、當時の政黨と言へば、亂暴者の寄り集まりと見られ、官僚や藩閥は近寄る事を毛嫌ひして居たのに、分裂騷ぎの眞つ最中どうなるか分らぬと言ふ時、わざ〱入黨して來ると言ふのが變つてゐる。それが、世間からは伊藤公の腰巾着と見られてゐた末松だから、尚更變つてゐる。見識と言ひ度胸と言ひ、伊東なぞより或は上であつたかと思ふが、餘り伊藤公の蔭に隱れてゐたものだから、世間からその眞價を認められずに了つたのは、氣の毒な事だと思つてゐる。

自分は二人に高言は吐いたものゝ、實は何も名案なぞは無いから、家に歸つていろいろと思案してゐる所へ、その夜十時頃首相官邸から電話で呼びに來た。行つて見ると二階には大勢集まつて何か評定でもしてゐると見え、ガヤ〱してゐる。やがて山縣公と二人きりで對座した。公の話を聞いてゐる中、初めの間はこの藩閥の古狸奴、うまい事を言つて騙し居るわいと思つたが、段々國事の機密に觸れて來るにつれ、これは一時のごま化しでなく、眞劍の話だと思ひ、終ひにはその純忠と至誠に打たれ、すつかり感激して終つた。自分が公を正當に評價して、大政治家だナと思つたのは、この時が始めてである。そこで初めは冷かし半分のつもりが、本氣に打込んで奔走する氣持になつた。

公の話は大體次のやうだつた。

「今日この國家の存亡に關する重大問題を控へ、首相たる自分は、これに處せんとするに全く寸前暗黒、殆ど手の出しやうもない時に當つて、君と會見し局面打開の策を協議すると言ふのは、實に不思議な奇縁と思ふ。第一議會當時、自分は總理大臣であつたが、政黨と議會が將に正面衝突しようとした危機は、當時農商務大臣だつた陸奥伯によつて辛うじて救はれた。あの妥協で憲政の軌道が定まり、國務も澁滯せずに濟んだ。今自分が首相として、國家の大事に臨んだ時、伯の緣邊たる君に會ふと云ふのは、實に奇縁と言はざるを

得ぬ。自分は必ず君の手に救はれるものと確信してゐる。」

これが枕言葉だから、若い自分が腹の中で此の老爺、謹嚴な態度の中になか〳〵うまく殺し文句をつかふ人だと、可笑しくなるのも無理はあるまい。公は續いて語つた。

「先程、伊東と末松に會ひ、自由黨が政府反對を決議したと聞いて、實は當惑してゐる所である。國家多事、殊に對外問題では寸前暗黒の重大危機が迫つて居り、國策遂行のためには、お互行掛りを捨てゝ、國家のため妥協する外はない。この見地から、大阪で板垣君始め自由黨の幹部諸君と會合したが、遂に一致點を見出し得なかつた。相提携する以上、黨員を入閣せしめよと言ふ諸君の主張は、決して無理とは思はぬ。併しこれは事實上不可能だ。今組閣後一ケ月も經たぬ今日、改造する事となれば、閣僚の中から犧牲者も出さねばならず、その他政府の全般に亘つて動揺を起すこととなり、これは到底行ひ得ない。自分としては、何としても自由黨と提携する外、差し迫つた國難に處して行く事は出來ぬと思つてゐるけれども、妥協談は決裂して當惑して居る時、君に打開策ありと聞いて、救はれたと大いに喜んでゐる所である。是非助力して貰ひたい。」

そこで自分はかう答へた。

「政府の人々と政黨員では、肌合ひが全く違ふ。改進黨系に屬する者は、白足袋ですましてゐるが、自由黨系の者の多くは粗野で率直、無邪氣に言はんと欲する處を申上げるから失禮な事があつても、御許しを願ひたい。今閣下の御話しでは、差し迫つた國難とか、寸前暗黒の重大危機とか言はれるが、恐らく之はロシアを始め列國の東洋進出を指すものと思ふ。然るにそれ程の重大事を政府では、曾て國民に知らしむ事をなさらぬのみならず、大阪會議でも我黨の最高幹部に對してすら、その重大事の内容を詳細に打ち明けて居らぬ。官僚や軍人の惡癖は、秘密の中に籠つて、胸襟を開かぬ點にある。そんな態度でどうして國家の大事が語れやうか。重大危機と言ひ、國難と言ふ内容を率直に承りさへすれば、我黨としては國家の爲め、窮通の途を考慮するに吝かではない。もつと率直に胸襟を開けば、自ら妥協の途は開ける。寸前暗黒、國情窮迫とは、一體何を意味するのか。その内容を承はりたい。」

公はこれに對して、軍事外交の機密に亘る事ではあるがと前置して、事細かにロシア南下の實

情を話された。甚だ迂濶な話ではあるが、自分もロシア南下の大勢だけは心得て居つたが、公の話を聞いて實は驚いた次第である。ロシアの計畫は大規模に又周到を極め、而も頗る迅速に行はれ、數年後には朝鮮すら危い事が明かに豫想される。從つてこれに對應するの覺悟は、全く避け難い運命となつてゐる。又彼我軍備の狀況を見れば、實に一日も安閑としては居られぬ有樣である。國民は三國干涉の復讐心に燃えてゐるが、國力や軍備の內容に至つては、全く詳細に知らされてゐなかつた。これは國民や政黨の罪と言ふより、官僚や軍人の責任である。

昔に限らず、今日でもその惡癖は見える。昔から見れば幾分國民に打ち解けては來たが、非常時とか國防の危機とか、抽象的な事は言ふが、その具體的な內容に至つては、なか〳〵外間の窺知を許さぬ有樣で、これでは國民の眞の協力をかち得る事は難しい。

山縣公は、この情勢にありながら、政局は紛亂して、既に豫算は二回續けさまに不成立となつて、國防の將來は全く寸前暗黑、正に危急存亡の危機に迫つてゐる、何としてでも政黨方面の諒解を得て、國防を充實すべく豫算を成立せしめねばならぬのだから、是非協力して貰ひたいと、それこそ赤誠を披瀝して話された。自分もこの話には深い感激を受けた。

公の話に對し、自分はさらに勸告した。

「實に容易ならぬ事態であるが、政府は今日迄、この事を我々に秘して居つた點に責任がある。政黨は徒らに獵官運動にのみ熱して國家を忘れるものではない。胸襟を開いて、共に國事を論じたなら、決して理解しない事はない。今の話を丸裸となつて、我黨の幹部即ち過日大阪で會談した人々に話さるべきである。國家を重しとする板垣伯等は、恐らく小異を棄てて政府を助けるに相違ない。併し黨內の大勢は、今政府反對熱が強いから、これを理解せしめ、政府と提携させるには、非常な力が要る。それには板垣伯は勿論なれども、星の外適任者はない。星には特に今の通りを話して、協力を求めたらいいであらう。」

公は「自分も是非今一度板垣伯に會見して話して見たいが、既に決裂して取りつく島がない」と言ふので、自分は「そんな事なら、わけはないと思ふ。私がその機會を作り、否應の返事をしよう」と約して辭去した。實際この晩の公の話は凄味があつて、聞いてゐる自分も、自ら全身總毛立つやうな緊張味を感じたものである。

それからすぐ夜中だつたが、星を叩き起して委曲を話し、山縣公と會見の顚末を話し、且つ自

分は星に説いた。

「憲政本黨を一方の敵として、一方政府と戰ふなど、愚の骨頂ではないか。殊に山縣の話と言ふものは理路整然として、國家の危急を深憂し、我黨の協力を望んでゐるのだ。嚢に我黨は三國干渉を是認し、伊藤內閣の軍備擴張豫算に贊成したが、以來政變など打續いたため、あの豫算以來豫算は未だ一度も成立して居らぬ。そのため國防計畫は中途半端なものとなつて、輪廓だけは出來たが、內容は全く空つぽに過ぎぬ狀態にある。この上、政府と爭つて豫算不成立を續ける事は、我が黨のためにも考へねばならぬが、國家の危機を增すやうなものだ。この際は行掛りや感情や、獵官熱などは抑へつけて國家のため我が黨が御奉公すべき秋ではないか。今は國民として臥薪嘗膽すべき時期だ。官僚や藩閥を助けるのではない、國民の危機を救ふと同時に、事實は藩閥官僚を降伏せしむるのである。」

と十二分に説きつけた。星は

「尤もな事とは思ふが、今日反對を決議したばかりに、直ぐこれを取消すわけにはいくまい。併し何とか考へて、兎も角近い中に山縣と再會する途を考慮する。」

と答へたが、却々急には腰を上げさうにも無かつた。するとその翌朝、別れて三四時間も經つた頃と思ふが、星が直ぐ來てくれと呼びに來た。顏を見ると星は

「あれから徹夜で提携の方法を考へたが、やつと案を考へついた。昨日の反對決議は、黨員の入閣を拒んで、政黨を基礎とせざるがため反對すると云ふにある。そこで政府が議會の機能を認め、議會を尊重し、政黨を基礎とすると言ふ事になれば名目は立つ。黨員の入閣も、その一方法には相違ないが、それが政府の都合で出來ぬと言ふから、閣僚の方から入黨して來ればいゝではないか。大臣達に入黨を求めよう。」

と言出した。餘り自慢する程の名案でもなく、實行もなか〳〵困難とは思つたが、政府と會見の機會を作るには、それでもいゝと考へたので同意した。幹部會を開いて見ると、いろいろ議論はあつたが、黨の方針が先に述べたやうに、まづ政府と提携して絕對多數を獲得する事となつてゐるため、名目さへ立てば、妥協差支なしとなつて一決した。幸に幹事の一致を得て、板垣伯、林、片岡、星、松田等相携へて山縣公を官邸に訪問し、會談時餘に亘り、全く打解けて相互所懷を盡

した。此會談後、自分は單獨で公に面會すると、公は斯う言つた。

「板垣等の言ふ所も尤もだと思ふ。大體自分は議會を尊重しないのではないから、閣僚を入黨せしめる事に敢て反對ではないが、他人の身上に關する事だから即答しかねる。軍職以外の者は、各自の考へ次第で入黨出來ぬものではないから、よく個々の閣僚と相談して見たい。曾禰や芳川などは入黨するとすれば、別に支障もあるまいと思ふ。いづれにしても君の盡力で幹部と再會して、胸襟を開く機會を與へられた事感謝する。今後兩者の關係に就ては努力を頼む。尙ほロシアの形勢について、板垣等極少數の最高幹部だけで、篤と熟談したいから、斡旋して欲しい。」

そこで星と片岡と二人だけを連れて公と會見させ、公からは陸海軍、外務等の秘密報告書類まで持出して、詳細に極東の形勢を說明し、危機の切迫を說いた。二人の中、特に片岡の方は非常に感銘して、その場で

「これは正に國家危急存亡の秋だ。一切の行掛りを捨てゝ、臥薪嘗膽の後始末をつけ、軍備を充實して、ロシアに備へねばならぬ。」

と言ひ出し、星も勿論これに同意した。これで自由黨と山縣內閣との妥協がやうやく軌道に乘る事になつたのだが、この結果、さしもの軍備充實案並に增税案も無事に議會を通り、對露開戰に關する當局の自信と覺悟を固めさせる事が出來た。もし、この妥協が成らなかつたならば、第十三議會も勿論解散。豫算は不成立となつて、對露戰の準備には重大な支障を生じた事と思ふ。政黨を國家の害蟲のやうに惡罵する人達は、かやうな歷史上の事實について、今少し研究してもらひたいものだ。

自由黨と政府の楔

こんな譯でいよいよ提携する事になつたが、黨員の中にはそれでも疑惑をもち、一路平安と言ふ譯に參らず、餘波の鎭撫ではなか〳〵骨が折れた。その不平黨三四十名を新富町の萬安と言ふ旗亭に集め、自分が說得する役を命ぜられたので、山縣公との會見顚末を述べ、一同やゝ納得したと安心すると、熊本の人で田中賢道と言ふむつかし屋が、起つてこんな事を言ひ出した。

「岡崎君の說明は一應諒承した。如何にも堂々たる態度で、政黨として恥づかしからぬ。

然しこんな事柄は、自分の主張するやうに世間は取つてくれぬものだ。我が肥後と薩摩の國境の峠に一個の大石があり、肥後では之を御降参石と言ひ、薩摩では之を和睦石と云ふ昔秀吉の島津征伐の砌、秀吉此石に腰を掛けて、島津の降参を容れたと言ひ、島津方はこの石に兩人腰を並べ、和睦したのだと言ひ傳へ、島津は和睦石と呼ぶべしと布令まで出してゐるが、やはり降参石の方が世人に通つてゐる。岡崎君の説明によれば、國家的見地から提携する、誠に堂々たる話であるが、世間は政黨が山縣等に降參したと誇る事を覺悟せねばならぬ。」

と美髯を振り立て、威風堂々として捲くし立てられたには弱らされた。藩閥をみな仇敵と思つてゐるのだから、之を宥めるのは容易ではない。結局この人々を納得はさせたが、小半日も油汗を流させられた。

兎も角も黨内も納まり、憲政黨は對露問題解決のため、政府を助けて國防豫算を成立せしむる事を約束し、政府は近い將來に二三の閣僚を入黨せしめ、政黨尊重の意思を表示することとなつた。この約束は言はゞ以心傳心とも言ふべく、別に覺書など言ふものを交すでもなく、双方誠意をもつて應酬すると言ふ事であつたが、兩者の間にあつて齒車となり油となつて、之を調和した大功勞者は、西郷從道侯であつた。

西郷侯と言ふ人は、實に不思議な性格の人で、ちよつと話して見ると、何を言ふのか取り止めのない不得要領な人であつたが、實は非常に要領を得た、話のよく分る、而も實行力に富んだ人であつた。要談を持ちこんで分つたのか分らんのか、雲を摑むやうであるが、それでゐて必要な決斷などは、非常に明快で又迅速だつた。維新の諸元勳中では、全く毛色の變つた、底の知れぬ偉さがあつたやうに思ふ。

この時なども政黨側から、早く約束通り閣僚を入黨させろと煩く迫るが、政府としてはさうもなりかねる事情であつて、なか〳〵實行出來ない。と言つて斷れば、自由黨は面目からでも怒らざるを得ぬ。それを西郷侯が間に立つて政黨操縱係りとなり、政黨を宥めつ賺しつ、最後まで約束を果さずに、而も怒らせなかつた。その他の事即ち極端に自由黨嫌ひの地方官の更迭など、相當我が儘と思はれるやうな事までよく聞入れ、政府に實行させて居つた。

例へば、地方官などに隨分亂暴な先生があつて、自由黨を目の敵にし、黨勢を壓迫するものな

どが居るので、黨の方は與黨となつたこの機會とばかり、更迭を要求する。さう言ふ場合、最初から自由黨と交渉してゐる桂に持込んでも、決して埒は明かず、西郷の手にかゝるとすぐ解決した。そして紅葉館だの官邸などで、始終黨員を呼んでは痛飮すると言ふ有様だから、黨員の人氣は素的に好かつた。

元來板垣伯とは維新の頃から、互に正直一途の性格が合つたものか、肝膽相照らして居るので、黨員とはます〳〵親密となり、會ふ人毎に「おいどんは板垣さんのお守をし申す」と言ふ位で、實に申分の無い調和役であつた。自由黨としては東北の地盤が頗る振はないので、この頃大擧して東北の黨勢擴張をやつたが、內務大臣たる侯が、板垣伯等と一諸に黨勢擴張の手傳ひに出張するやうな事までやつた。品川の干渉後まだ十年と經たず、自由黨と言へば矯激な破壞主義者と信ずる官吏の多い時節、內務大臣が板垣伯と共に、地方を步くのだから、世間はビツクリするし、舊式地方官などは、瞻を潰す有様だつた。

その又黨勢擴張ぶりが揮つたもので、歡迎會の席などに出る事は出るが、演說は一切やらず、「演說は一切板垣さんにお任せします」と濟まし返るが、酒席では「この方はわしの受持だから」と地方有志を相手に酒を呑む、唄ふ、終ひにはあの體で踊り出して徹底する。之が地方有志を感激させて、どの位地盤擴張に役立つたか知れない。板垣伯の演說よりこの方が、實際は黨勢を擴めたのではないかと思ふ。

この西郷侯の要領のいゝ斡旋で、別に角立つた約束とか覺書などを持出さず、政府と自由黨は公然提携した。山縣公はこの時、自由黨の議員一同を首相官邸に招待して大いにもてなし、自分も厳めしい軍服を脫いで、フロツク・コートなど着込んで、和親ぶりを示し「國家非常の時局だから、一切の私心を去り、主義政策をもつて提携しよう」と、頗る立憲的な挨拶を述べた。

黨の方でも最早閥僚の入閣などをかれこれ言ふ者もなく、政府を助ける一方、この機を外さず黨勢を擴張して、絕對多數を獲得し、將來の政權に備へる一本槍で進んだ。そこでその手始めに、自由黨を亂臣賊子扱ひして、壓迫ばかりしてゐる地方官や警察部長の更迭を要求し、之は西郷侯の計らひで順調に進んだ。恰度この秋府縣會議員の總選擧が行はれたので、この情勢を利用して、一擧に黨勢の大擴張が行はれ、從來寄りつけもしなかつた地方にまで、地盤が開拓される事になつた。

一例を擧げると、青森縣の如きは官憲の威力の旺んな土地で、憲政本黨（改進黨）の方は相當な地盤があつたが、自由黨の方は、演說會を開くことすら出來ない土地であつた。末松謙澄君がこの選擧に演說に行つた所、宿屋を群集に包圍され、演說どころか屋外に一歩出る事すら出來ず、這々の態で逃げ歸つた。激怒した本部では、星を總大將に血氣の黨員を選り、十分な用意をして、青森征服に乘込んだが、沿道では石を投げられ、會場で毆り込みをかけられ、血を流す騷ぎであつたが、今度は官憲の力が相當取締りにものを言つて、青森憲政黨の土臺だけは築く事が出來た。かやうな例は他にもある。兎も角我が黨としては政府と提携したゝめ、所期の目的通り全國に亙る地盤の大擴張だけは、この前後一年間に相當の效果を收めることが出來た。

憲政黨が誠意をもつて、政府を助けたものだから、多少の紛擾はあつたが、山縣內閣は軍備大擴張案を含む豫算を無事に成立せしめることが出來た。軍事費の財源としては、地租始め各稅目に亙る大增稅を行つたのだから、普通なら容易に通過するものではない。この時も松田正久君その他九州組を中心として、反政府議員が種々策動して、一時はなかなか面倒であつたが、幹部の決心が固いものだから無事通過した。第一議會と日淸戰爭中の二議會を除けば、初期以來無事に議會を乘切り、通常豫算を成立せしめたのは、これが始めての事だから、山縣內閣としては實に異常の大成功であり、それだけその喜び方も大きかつた。

我々としてはそこで當然、曾禰、芳川等の閣僚は我が黨に入黨し、尙この上與黨として種々の便宜を與へるものと思つてゐた。所が與黨扱ひどころか我々はこゝで彼等のため騙し討ちにあつて終つた。即ち山縣公は、我々憲政黨員を首相官邸に招いて、感謝の演說までしながら、その後一ケ月經つか經たぬ中、例の文官任用令なるものを公布して、拔討的に官僚擁護、政黨排擊の色彩を明らかにして來た。豫算を通過させると言ふ政黨の役目は濟んだから、もう當分我々に用はないのだ。よく芝居の筋にある通り、散々コキ使はれた揚句、下郞は口の善惡ないものと、バツサリ騙し討にされる奴である。藩閥、官僚政治家の陰險さと卑怯さをこの時程、痛感したことはない。

それまでの官吏は、勅任官以上は自由任用となつてゐた。黨員の間にはたとへ半年でも憲政黨內閣の味が忘れられず、いよいよ與黨だから、今度こそ何かの役につかうと密かに獵官運動を始めてゐるものもあつた。所が官僚にして見ると、この議會の成績から見て、政黨に對して非常な

警戒、恐怖を感ずるやうになつた。

彼等の一樣に考へついた事は、政黨の威力と言ふ事である。それまでに小煩さい破壞主義者か、浪人の集團位にしか考へてゐなかつたが、多年何人も解決出來なかつた軍備の大擴張を而も巨額の增稅を伴はせながら、苦もなく成立させて終つたのだから、その威力の恐ろしさがやうやく分つて來た。幹部が承知すれば、多數黨員がこれに從つて動き、これ程の大問題を難なく解決した以上、この勢で獵官運動などを始め、行政府の內部にその力が浸潤することになると、どんなことになるか分らぬ。山縣公の威力をもつてしても苦心慘澹、憐れみを乞ふ態度で、やうやく妥協せねばならぬ程だから、今の間に官僚を保護し、政黨の行政部進出を防遏する方法を講じておかねば、將來恐るべき事が起る。かうした考へから官僚を防衞するために、鹿柴でも植ゑるつもりで考へ出したのが、文官任用令である。この改正ですべての官吏は、國家試驗を經て一定の年限を勤務したものでなければ、進級できぬやう、恰も武官の任用進級と同樣になつた。

勿論我々黨の方には、何等の相談も豫告もありはしない。豫告どころでなく、ひた隱しに隱して、一方には御用を務めさせつゝ、一方にはこの毒刃を用意して居つたのだから、その陰險さ卑

劣さ、實にお話しにならない。自分はこの時、始めて官僚の陰險さと言ふものを滿喫して、爾來徹底的に官僚嫌ひとなり、官僚の言ふことを、一切信用せぬ事とした。自分としては、國家のため眞面目に山縣の議論に協調し、政府と黨との結合に楔の役を勤めたのだから、政府のこの不信行爲には、切齒して憤慨した。

議會後は分に應じて任官を志して居つた黨員達は、この拔討ちに果して蜂の巢をついたやうに沸き立つた。從來のまゝで任用せぬと言ふのならまだよろしいが、未來永遠に亘つて、政黨員の進出を閉塞して終つたのだから、その憤慨も激しい。憤慨の鉾先は幹部攻擊となり、あれだけ政府を支持させられながら、こんなことを幹部が知らぬ筈はない、幹部は何か私的利益を得てゐるのだらう、と猛烈な幹部彈劾が始まつた。勿論幹部に私心のあらう筈もなく、星は勿論、自分なぞ腹の底から激怒してゐるのだから、山縣首相の所へ怒鳴りこんだ。信義の問題だから、山縣公にも辯解の辭はない。いろいろ押問答の末、公は最後に

「諸君の憤慨も當然であるが、既に樞密院の御諮詢を經て公布した任用令を、今更ら撤廢すると言ふわけにはなりかねる。そこで諸君の希望を半ば容れて、除外例を設けやう。」

と言ひ出し、結局警視總監、警保局長、內閣書記官長、法制局長官、秘書官を自由任用とし、外に各省に今の政務次官に當る官房長と言ふものを作つて、それを自由任用とすることで妥協がついた。

妥協はしたが、自分は官僚の本體をこれで見破り、爾來如何なることがあつても、官僚の言を信用しない。一方で政黨に媚びながら、他方では毒殺を圖るなど、信義のある人間の出來ることではない。これが官僚政治家の型である。由來官僚と言ふものは、昔の新知識階級で、藩閥の力に縋つて立身し、その新知識をもつて藩閥政治を助け、いつの間にか自ら治者としての階級觀念を作り上げ、國民を被治者と見るやうな封建思想に固まつて終つたのだ。平田、東助伯など言ふ連中が、その代表的人物と言へやう。

政黨の擡頭は、彼等として恐るべき相手の出現である。そこで早くこれを抑壓し、少くも行政部に於ける官僚の陣營だけは確保するため、考へ出したのが文官任用令である。この任用令公布後、政黨の力は官界から締出され、永く官僚は泰平を頌つてゐた。所が昔の官僚が思ひも寄らぬ政黨全盛時代となつて、官吏は有資格者の中に政民兩黨色が現れ、事實上政黨による自由任用同様の狀態となつて來た。

そこへ突然の出來事として、犬養首相が陸海軍士官に銃殺され、政界の形勢は一變して、政黨の力が退却し、齋藤內閣が出現したものだから、官僚は好機逸すべからずと、直に分限令の改正を行つて、官吏の身分を保障する方法を執つた。名義は立派であるが、實は官僚がその特權を回復し、政黨の勢力を抑へやうとするもので、この三十二年に於ける山縣內閣の官僚思想をそのまゝ繼承したものである。

齋藤內閣には、政黨からも代表者が入閣して居つたが、昔のこの煮え湯の味を知らぬものだから、ウマウマと騙されて、官僚の思ふまゝにされて終つた。昔も今も官僚は事務に練達し、小手先きが利くから、政黨はいつもよく掬はれては轉ぶものである。併し小手の利く者は、細工が細か過ぎて、大局に失ふ處のある事は免かれない。

立憲政友會創立

山縣內閣と我々憲政黨との交情が次第に冷めて來た折柄、伊東巳代治からフト自分は非常な吉

報を聞かされた。それは伊藤公に政黨組織の意向が動いてゐると言ふ事である。

公はこの年支那に行かれ、九月頃北九州から山口地方に滯在して居つたが、その歡迎會席上、立憲政治の圓滿な運用には、是非政黨が必要である旨を演説して居ると言ふのである。今日なら伊東に敎へられなくとも、新聞を初め通信の事業が發達してゐるから、注目すべき演説なら、即日にも聽けるが、この頃は勿論新聞に演説など出る事はなかつた。伊東にこの話を聞いた自分は、直にこれを幹部に傳へて、公の歸京次第、幹部一同公に入黨を勸告しようと言ふことに一決した。

たしか九月の下旬と思ふが、公は大磯の滄浪閣まで歸られたので、黨からは末松以下自分などまで、代る代る入黨勸告に出向いた。入京後は板垣伯からも直接、黨を擧げて一切公の統制に服せしむるから、入黨されたいと勸告したが、公はこれにいづれとも返事をされなかつた。

その頃公爵は上京すると、帝國ホテルの裏手にあつたホテルの横山支配人の家に泊つて居つたが、ある日そこへ呼ばれた。公の言ふには

「憲政黨の諸君から入黨を勸められて、何とか返事をせねばならぬから、板垣君以下黨の代表者をホテルに招待してくれ。」

との事であつた。板垣、星、片岡、松田、末松、林の諸先輩に自分が加はつて、ホテルで會見した。公は

「立憲政治の完成は、政黨の向上、發展に俟たねばならぬ。その希望については、諸君とは、全く同樣であるが、その實行方法につき、諸君は自分に入黨せよとの話であるが、自分の考へは聊か違ふ。政黨を充實向上せしめようとするにはまづ廣く人材を天下に求めねばならぬから、それには新政黨を組織するが便宜有效である。諸君の好意は感謝するが、入黨は自分として無意味と思ふから拜謝する。諸君も自分と志を同じくするものと信ずるから、將來自分が新政黨を組織し、天下の人材を糾合する場合には、是非解黨の上協力して貰ひたい。」

と述べ、新黨組織の意を明らかにされた。憲政黨としては公の入黨は得られなかつたが、これで公の意向が明らかとなり、將來の行動が非常に便利となつた。直接何の結果をも生み出さなかつたが、政友會の創立はこの時に確定し、その中心勢力も略定まつたわけで、政友會としては實に

意義深い會合であつた。この時の公の挨拶草稿は、自分が公爵家から貰ひ受け、今政友會總裁室に掲げてある。

三十三年の九月十五日いよいよ立憲政友會が創立された。憲政黨はこの日解黨して、黨を擧げて新黨に入黨した。新黨は又西園寺公始め、官界からは渡邊國武、金子堅太郎、原敬、末松謙澄、都築馨六の諸君、衆議院の他派からは大岡育造、元田肇、尾崎行雄の諸豪が參加し、當時としては目を聳てしむるだけの人材を蒐め、政界の中心勢力たるに十分な壯觀を呈した。

黨員は大得意であつたが、伊藤公自身は物足りぬ不機嫌さうな顏をして居つた。それは公として、己惚れと期待を裏切られ、輕い失望を感じて居つたものらしい。政友會創立に當つては參內の上、拜謁して、自己の決心を申上げ、朝臣としては一種の御暇乞ひまで言上して乘出したのであるから、乃公一度手を擧ぐれば、天下の俊豪悉く集まる位に己惚れて居つたのである。所が集まつたものは、平の黨員としては、驚く程人物が寄つて來たが、公から見れば大したものは一人もなく、依然として憲政黨に毛の生えたものに過ぎなかつた。元勳としては井上侯、財界からは澁澤子爵、その他財界、學界各方面の代表的人材が、接踵して到るものと思つてゐたらしいが、

それらの人は一人も來ず、井上、澁澤兩氏など結黨式に臨んで、お座なりな祝辭を讀んだゞけ、頗る冷淡なものであつた。何人が見ても、第一番に馳せ參ずると思はれた伊東巳代治すら、入黨を承知しなかつた。こゝに公の失望があり、比較的政友會に對する見限りを早くつけた原因がある。

伊東の入黨しなかつた原因は歸する所、巳代治一流の利害の打算から來てゐると思ふが、その裏面には、山縣の意を受けた桂の策動があつた。最初に公の演說を自分に敎へてくれた程であるのに、公の入京後は餘り寄りつかず、態度が變であつた。それは、憲政黨の人物や末松などの振合を見て、公が伊東を重用するかどうかによつて、進退を決しやうとして居つたものらしい。

山縣公は又、伊藤公が政黨を創立する以上、自分と對立して來るに相違ない。その場合、伊東を敵にすると味方にするのでは、非常な違ひとなるから、桂を唆かして伊東を牽制させた。伊東は公が餘り自分を重用しさうもなく、一方山縣公からは、又頻りに色眼を使はれるので、遂に入黨せず山縣公について了つた。併しその割合に山縣にも用ひられず、餘り利害に重きを置き過ぎて、結局永い生涯としては、損を招いたのではないかと思うて居る。

この時、自分の心から敬服した人が二人ゐる。板垣伯と西園寺公だ。伯は伊藤公に向つて「自分も留まつて、君を助けるが至當であるが、それでは數十年來の關係で、黨員が自分に對する愛着が斷ち切れず、君との親しみが容易に出來まい。黨內に若しも事故でも起しては面白からぬから、此際黨外に去り、一切君が自由手腕を揮へるやうにしたがいゝと思ふ」と言つて入黨せず、黨外にあつて援助する事となつた。凡人の眞似の出來ることではない。

西園寺はあの名門にあつて、その閱歷材幹、當然副總裁たるべき人であるが、決して自ら出しやばらず、伊藤公の邪魔にならず、黨內を纒めるため苦心して居られた。渡邊國武子が副總裁然として切廻すのを、公は彼等と先を爭ふが如き考へは起さず、そのなすが儘に打ちまかせて居られた。すべて公の態度は、他人に道を讓りつゝ、結局その他人をも自分の思ひ通り步かせると言つた品の高さと、大きさがあると思つたが、その後の公の言動を見てゐると、この流儀がますます圓熟老成、始終一貫して居らるゝと思ふ。

政友會が結黨して十日目、九月二十六日山縣內閣は突然辭職し、後任には結黨したばかりの伊藤公を推擧し、二十九日大命伊藤公に降下した。これは言ふまでもなく憲政黨創立の時、伊藤公がその準備未だ整はざるに乘じて、隈板兩伯を奏薦し、その出鼻を挫いた故智を、今度は山縣公が伊藤公に浴びせたものである。

伊藤公としては、大政黨は出現したものゝ、豫期に反し財界、學界、官界より、集まる人材が少なく、多少氣を腐らしてゐる所へ、不意の大命降下であるから、大分マゴつかれたらしい。それがため組閣の準備も不十分で、閣內にいろいろな議論を生じ、彼是間隙を窺ひ政黨政治に妨害を企てた。それかあらぬか、山縣公等の策略に因つて、數年後には政友會を捨てねばならぬやうな原因も、すべてこの政黨政治に胚胎したやうなものである。

元來官僚政治家は、藩閥の袖の下に隱れて出世した連中であるから、藩閥出身文官の大先輩たる伊藤公は、自分等の首領と考へて居つた。その伊藤公が官僚を捨て、多年その敵視して居つた政黨を組織して、其の首領となつたので、公に對し猛烈な逆恨みを懷いた。山縣公は政黨を利用する程度の考へはあつたが、ある意味では、自分の競爭者である伊藤公が、政黨の總裁となつて見ると面白くはない。こゝに至る迄には、幾度か御前會議ですら爭つてゐるのだから、官僚政治家が伊藤內閣に對する反對運動を起すことには、相當の援助を與へ、官僚派は又山縣を恃んで、

活潑な反對をやつた。その中心となつたものは淸浦、平田以下、山縣系の勅選議員二十六名である。

彼等の當時の思想としては、政黨員は全くの野人で、これが朝に立つことが、既に間違ひだと考へてゐた位だから、それを中心として內閣を組織するなどは、今日の時勢に共産黨が組閣する位に考へたものである。從つて一日も速かに內閣に打擊を加へることを考へ、まづ第一に不評判な星が、遞信大臣となつてゐるのに目をつけた。何しろ剛腹で、放漫な星のことだから、身邊を洗へば、疵はでぬとはかぎらぬ。これを陰險な暴露戰術でホジくり出し、百八十餘名の連署をもつて、議會前に星を彈劾した。伊藤首相もこの成行には苦慮したのである。星は此狀勢を觀て、伊藤の苦衷を察し、辭表を提出し、後任は原となつて、此一件は落着した。此間面白い自慢もあるが、差控へて置く。近頃泥試合とか暴露戰術とかを政黨獨特の卑劣な政爭だとして、非難の聲が高いが、何ぞ知らん、この時まで政黨は、その爭ひにこんな陰險な手段は知らなかつたのだ。官僚から實際敎育を受けて始めて、この卑劣手段が卑劣ではあるが、効果覿面な戰術であることを知つた位である。選擧の墮落にせよ、議會の騷擾にせよ、又この暴露戰術にせよ、男らしからぬ政治の腐敗墮落は、凡そすべて官僚に始まつて居ると云つていゝ。

いよ〳〵十五議會が開かれて見ると、貴族院では前記淸浦、平田等が中心となつて研究會、茶話會、庚子會、木曜會、朝日俱樂部、無所屬の六派百九十餘人を結束して、政黨主義反對を決議し、政友會を基礎とする伊藤內閣に正面から挑戰して來た。

この年の豫算には日露開戰に備へて、巨額の海軍擴張費が計上され、その財源としては酒稅、砂糖稅、煙草稅、海關稅等の消費稅を中心として、二千餘萬圓の增稅案を伴つて居つた。官僚の內閣虐めには打つてつけの好材料である。衆議院から送附された豫算案と增稅案は、官僚一流の執拗さで每日々々虐め拔かれ、流石の伊藤公もへこ垂れて終つた。その揚句、增稅委員會は政府案を否決して終つたので、政府も驚いたが、山縣、松方、井上等の元老諸公も藥の利き過ぎに驚いた。增稅を否決すれば、當然豫算も實施不可能となるが、その豫算の中には、對露戰爭準備に一日を爭ふ海軍擴張費が多分に含まれて居るのである。伊藤首相自ら貴族院の有力者を說き、山縣等諸元老も奔走したが、最大會派たる研究會が「如何なる勸誘あるも、所信を枉げず」と決議してゐる程で、手のつけやうもなかつた。

本會議當日、伊藤首相が有名な「七重の膝を八重に折つて」とまで、悃願演說をやつたが、大勢如何ともすることが出來ず、遂に否決して終つたので、十日間の停會を命ぜられた。

それから後の約二十日間は、政府と貴族院、元老の間でいろ〳〵な折衝が行はれたが、政黨主義を叩き潰さうと言ふのが反對派の目的だから、何と政府が讓歩しても承知しない。最後には畏れ多い次第だが、近衛議長を宮中に召され、勅語を賜はるに至つて、やうやく鎭まり政府案を可決した。勅語を拜して貴族院を鎭撫させられた近衛公は、この事で伊藤公の責任を詰問する手紙を送つてゐるが、自分のこゝで考へておきたいのは、官僚や貴族院の連中の愛國心の問題だ。

先にも述べた通り、この增稅案は軍事費の財源であり、豫算は緊迫した對露作戰に備へる非常に重大な意義をもつたものである。永年行政の衝に當つて居つた官僚政治家が、これを知らぬ筈はない。又政府もこの間の事情は十分に說明してゐる。それにも拘らず、この豫算を犧牲にしてまで、內閣を苦しめ、政黨主義を叩き倒さうと、詔勅を拜するまで、執拗に食下つたのである。口を開けば、官僚は政黨を不謹愼とか、黨本位で、國家を忘却してゐるとか非難するが、彼等のこの態度は、果して愛國心ある政治家のなす所であらうか。かやうな例はこの時に止らず、まだいくらでもある。

若手將校連の運動

どうやらかうやら議會を閉ぢはしたが、貴族院の攻擊に伊藤內閣――つまり最初の政友會內閣は散々な目にあつて、息も絕え〳〵となり、五月にはたうとう倒れて終つた。直接の原因は、渡邊藏相の財政方針に黨議が反對して、原遞相始め黨出身閣僚と藏相の意見一致せず、內閣不統一のためとなつてゐるが、眞の原因は、貴族院に對する詔勅問題の責任にあつたと思ふ。議會の鎭撫に詔勅を奏請するといふ事は、實際、憲政の運用上重大な問題で、近衛議長の詰問書に對し、伊藤公は「詔勅降下に關する一切の責任は、自分にある」と答へて居り、その責任を執つたものであらう。

渡邊對黨議の對立と言ふのは、黨議が積極政策と決まり、國運の大飛躍を圖らうと言ふのに對して、渡邊は官僚根性から拔け切れず、非募債政策を唱へ、今で言ふ健全財政方針を固執して肯かぬので、衝突したものである。渡邊といへども黨員だから、黨の財政方針に反對する譯は無い

のだが、この邊が立黨匆々の事で、十分な諒解や準備の出來てゐなかつた點である。

唯、當時の事情で渡邊の態度を詮索して見ると、或は何等か政治的陰謀のために、わざと黨議に反對し、政變を早めたのではないかとも思はれる事がある。

伊藤公と渡邊の關係は、非常に親密なもので、伊東や末松などより先輩といふ故もあるであらうが、極めて重んぜられて居つた。それゆゑ又大事な相談相手でもあつた。政友會創立の仕事など、殆んど渡邊任せで、大體渡邊に扱はせ、事實上、副總裁として得意に働かせて居た。それ程の渡邊が、この總辭職前後から極端に伊藤と仲違ひし、公は渡邊の名を聞くさへ、いやがれる程になつた。恰度この頃、末松の邸で黨の園遊會があり、自分はその途中渡邊邸の前を通りかゝつたが、渡邊が病氣と聞いて居つたので、一寸見舞に立寄り會場へ出た。そして伊藤公に「渡邊の病氣も大した事ではありませぬ」と、見舞の狀況を述べたところ、公は自分が嘗て經驗した事のない不興氣な顏をされた。これは餘程渡邊を怒つて居られるナと、心中に考へた次第だが、二人の間柄はその後死ぬ迄、直らなかつた。

その原因は、どうも渡邊が公を裏切つたためではないかと思つてゐる。この總辭職の時、渡邊一人は辭表提出を拒み、兄の宮內大臣渡邊千秋によつて、何事か上聞に達したと言ふ噂が出たり、渡邊內閣說が飛んだり、どうも妙な事が多かつた。深い事情は自分も知らず、今日之を承知してゐる人は、西園寺公以外には金子伯位であらう。いろ〳〵後に考へ合せて見ると、渡邊が後繼內閣の野心を起し、伊藤公を怒らせるやうな事をしたもののやうに想像される。

この後には、桂が最初の組閣に成功したが、非常な難產で、何でも內閣瓦解から組閣まで、一ヶ月近くもかゝつたやうに覺えてゐる。元老の間を方々に持ちまはり、最後に井上侯が大命を拜したが、侯はこれを拜辭した上、桂を奏薦したのである。今日こそ、桂は明治時代の大政治家として、非常な貫錄をつけて見られてゐるが、この第一次組閣の頃は、まだ〳〵第二流人物で、世間でも問題として居らず、伊藤、山縣、黑田、西鄉などに較べて、一種の猿芝居扱ひされたものであつた。

その桂の出現は、表面は元老、就中、井上の斡旋となつて居るが、事實は陸軍部內の强硬派、即ち當時の青年將校を中心とする一團が押出したもので、その中心は兒玉源太郞中將等であつた。

自分は桂系の人々とは、全く別の立場にあつたから、勿論眞相は分らぬが、その連中の話を聞いて見ると、對露問題その他を解決するため、青年將校が中心となつて、桂を擁立したものだとの事である。當時の青年將校は、田中義一君が少佐か中佐で、駐露武官をして居り、これが若手の中堅で、兒玉中將を中心に大いに硬論を張つて居つた。この一派は、對露問題の解決に老人連では駄目だから、若い者と相通ずる桂を押立てろと、元老の間を奔走策動したといふ話である。

桂は組閣の翌三十六年七月、突然辭表を捧呈して、葉山の別莊に引つ込んで終つた。理由は伊藤公が元老と政黨總裁を兼ねてゐる事は、大政燮理に障害となり、首相たる自分は到底責を盡す事が出來ぬと言ふので、伊藤公を彈劾したものであつた。桂の言分では、伊藤公が出では絕對多數黨の總裁となり、入つては元老として、機務の御諮詢に對してゐるため、首相たる自分の責任は、盡く伊藤公に掣肘され、何事もなし得ないと言ふのである。この伊藤公彈劾が桂一人の發意であつたか、それともその他の元老も、相談してやつたものかは分らぬが、その後の元老の行動を見ると、伊藤公が總裁として、着々國民的勢力を増大して行くのに恐れをなし、桂を唆かしてこんな芝居をやらせたもののやうに見える。

桂の上奏に對して、元老會議が開かれて、その結果、伊藤公に忝けなくも宸翰を賜つて、樞密院議長たるべく勅命を蒙つた。伊藤公も隨分躊躇して居つたが、勅命を蒙つた上は、是非もないからと樞府に入り、その代り當時樞府議長だつた西園寺公を後任總裁に推薦して來た。黨員は伊藤一人を賴りにして居る時、樞府に召されたので、月夜に釜を拔かれたやうに失望狼狽を極めてゐた處、この進步的な新總裁を得たものだから、雀躍して喜んだ。この就任に對して、園公は「自分の如きものが、大政友會總裁に推薦された事は、非常な名譽である云々」と演說され、黨員を安心させ、又喜ばせた。

そこで桂も留任する事となり、間もなく日露戰爭の大舞臺を踏む事となつて、幸運の幕が開けて來た。

日露戰爭を決するまでの狀況は、如何に上手に語らうとしても、到底當時の眞相の百分の一をも現はすことは難しからう。支那に勝つたとは言ふものゝ、國力から見て、軍備から見て、その他人口、財政、領土、どの方面から見ても、到底日露は比較にもならぬ程、甚だしい隔たりがあつた。それを押切つて開戰の決意を固めるのだから、國民としても當局としても、なかなか容易

な事ではなかつた。
國民の復讐心は燃え上つて居つたし、それに露國の事情に精通せる田中義一君を中堅とする青年將校群は、ロシア恐るゝに足らずとして、國論を刺戟するものだから、國民の間に開戰論が早くから沸騰して居つた。政黨もこの國論の沸騰を受けて、開戰論が壓倒的大勢を占め、それが遂に爆發して、有名な彈劾奉答文となつて現れて來た。

三十六年の十二月召集された第十九議會は、政友會も憲政本黨も擧げて開戰熱で沸き立つて居た。併し元老に掣肘されてゐる桂內閣は、容易に決心を附けず、相變らず左顧右眄して、硬派からは腰拔けとして、非難の的となつて居つた。陸海軍部內の一派は、何とかして政府に活を入れ、これを牽制してゐる元老連の夢を醒まさんと畫策して居つたが、その中心は、時の參謀次長兒玉源太郎と陸相の寺內である。彈劾奉答文はこの軍部强硬派と議員の硬派、民間志士の合作になる名演技であつた。

開院式の勅語に對する奉答文と言ふのは、この時まで別に委員を設けず、議長の手許で用意する慣例となつて居たのを利用し、議長河野廣中君に「內政は彌縫を事とし、外交は機宜を失し」

と最大級の內閣彈劾を織込んだ奉答文を朗讀させた。河野君といふ人は、世間では非常な大豪傑として通つてゐるが、實は有德の人で、意志も餘り鞏固と言ふ方ではなかつた。併しこの奉答文朗讀は、實に見事であつた。悠然として議長席に立上り、あの美髯を扱きながら、朗々と讀み上げた。その態度、音聲に釣り込まれた議員一同、何の氣もつかずパチパチと拍手して終つたので、河野君は勵聲一番、滿場一致可決確定を宣告した。所が議場を出る頃になると、流石に「少し今日の奉答文は、怪しい節があつた云々」と誰言ふとなく言ひ出し、議長室から寫しを取寄せて見ると、前記の通り堂々たる內閣彈劾決議だから、一同蒼くなつて驚いた。滿場一致彈劾の上奏を可決した譯だから、驚くのも無理はない。

狼狽した與黨側の議員連中は、議長室に呶鳴りこむやら、各派交渉會を請求して、奉答文議事やり直しを提議するやら、或は議長の參內を阻止しようとするものまで飛出して來た。他の事なら兎に角、上奏文を再議するなど出來る事ではない。殊に硬派は豫期した事だから、河野君を促してサッサと參內、闕下に捧呈せしめて了つた。

鮮かな芝居であつたが、この筋書作者は、自分は確な事は知らぬが、多分當時の書記官長林田

龜太郎君だらうと思つてゐる。林田といふ男は、非常に智慧自慢の男で、かうした細工にかけては、實に天稟の才能をもつて居つた。議會には長くゐるし、法規典例には通じて居り、我々も折折この林田の智慧を利用し、試みたこともあつたが、議會戰術にかけては慥かに獨歩の手腕があつた。自分が知り過ぎる程知つてゐるあの河野議長を、あれ程機敏に見事に大膽にやらせたのだから、議會の事務に精通せる林田でもついて、十分呑みこませたものに相違ないと思つてゐる。

ついでの事に、河野君の人物についてちよつと語つておかう。世間の人物評など言ふものは、なかなか眞相に徹する事は難かしいものと見え、河野君なども世間の批評とは、隨分違ふやうに思ふ。

河野君と言へば、福島事件の昔から東洋豪傑の典型として、非常な大丈夫と思はれてゐるやうだが、永らく手を携へて政治運動をやつて來た自分などから見ると、正直で、愛國の士には相違ないが、惜しむらくは事に當り遲疑する癖があつた。それは必ずしも同君に限るものではない。自分は昔から古い政黨員と、古い耶蘇教徒とは共通の性癖を持つてゐるものと認めてゐる。それは政府とか社會の苛烈な壓迫のため、自然異分子に對して、常に警戒を怠らなかつた。この習ひが、遂に性となつたといふことである。古い黨員中には、實にこの型の人が多かつた。

三國干渉の始末の時なども、自分が主として奔走し、自由黨と伊藤內閣を提携させ、政府をして干渉善後策を講ぜしめる一方、他日の復讐に備へる軍備豫算成立を助ける約束をしたのだが、この時、自分は第一に黨內で河野を說き落すことに目標を決めた。それは河野さへ同意させれば、他の幹部連はみな話が判ると思つたからであつた。これは見込み通りうまく行つたけれど、議會の末頃からぼつぼつ其性癖があらはれ、遂に大石その他反對黨の連中に、政府に騙されたとか何とか惡口を聞かされ、躊躇逡巡、遂に議會後脫黨して終つた。まるで意味をなさぬ行動だがこれが同君の眞面目で、事實を達觀するよりも、世評に重きを置くがためである。

兎も角、この彈劾奉答文の結果、內閣は非常な刺戟を受け、民間の開戰論は一段と猛烈となり、元老達もやゝ考へるやうになつた。兒玉始め軍部や民間の硬派が考へた開戰促進には、多少の役に立つたわけである。

併し一方、議會自身としては、奉答文議事にこんな拔け道があるやうでは、將來危險でしやうが無いと言ふので、この後は必ず委員十八名を舉げ、愼重に審議する事となつた。

幸運に惠まれた桂公

青年將校はじめ民間志士や議員、一般國民などは、一途に對露開戰熱を煽り、青年將校などは連日會合し、上司に迫つたりして、隨分熱をあげたが、內閣も元老も容易に決心はつかなかつた。殊に元老諸公は最後迄、恐露病者と言はれるまで腰が切れなかつた。そこで彈劾奉答文といふやうな非常手段も出て來たのだが、これは元老が何も臆病だとか、時代を見る眼が無かつたとかいふわけでなく、元老諸公の生立ちが、然らしめたものだと思ふ。

伊藤、山縣始め維新の元勳といふ人々は、言ふまでもなく幕末の紛亂時代が青年期であつた。そして自ら廟堂に立つて政治を行ふやうになつたのが、明治の初年で、以來外國に頭の上る時とては無かつた。今日でも拜外思想だとか、歐米崇拜主義とか言つて非難する人があるが、元老諸公は歐米の恐るべき巨人のやうな實力を、身に泌みじみと體驗し、苦勞のありたけをし盡して來てゐる。それが世界最大の强國と開戰しようと言ふのだから、其最上の位置に居り、最大の責任を擔ふ身として、容易に決心のつかぬのも無理はない。餘計な話かも知れないが、これら元老諸公が、如何に對外問題に惱んだかといふ挿話を二三話して見よう。

日淸戰爭なぞ、今の人が考へると、まるで赤兒の手でも捻るやうに、簡單にやつたかと思ふであらうが、どうして當時は、外國など頭から日本など問題にしてゐなかつた。日本人すら勝てるかどうか、到底自信がなく、陸海軍とも最初の一戰を交へるまでは、非常な心配であつた。從つて戰はねばならぬ運命と決まつてゐながら、決心するまでは容易なことではなかつた。遮二無二、開戰に漕ぎつけたのは、參謀次長の川上操六中將と陸奥外相が、どちらも强氣同士だつたから、牒し合せて否應なしに開戰の機會を捉へたのであつた。

當時朝鮮の公使は、大鳥圭介君であつたが、例の東學黨が內亂を起して、在留民の生命財産が危いと言ふので、出兵することになり、陸奥は川上と話し合つて、東學黨の勢がいよ〳〵增大して、最早一刻も猶豫は出來ぬと、內閣を脅かしてゐる所へ、大鳥公使から亂徒の勢も衰へて、近く平定されるだらうといふ報告が舞込んだので、その電報を握り潰した上、內亂はます〳〵甚だしいとの電報を打てと、こちらから報告の內容を指圖する有様であつた。こんな滅茶な話はない。

その通りの電報が來たので、これで廟議を出兵に賛成させ、取敢へず一個旅團派遣と決まつた處その書類を參謀本部にまはす間に、一個旅團の上に「混成」の二字を加へた。これも陸奥と川上の相談である。混成一個旅團となれば、各兵科を網羅して、優に一個師團の兵力に匹敵し、立派に獨立部隊として戰鬪出來る。陸奥や川上の腹は出兵した以上、淸兵と衝突して開戰となるに決まつてゐるし、又さうするつもりで、萬事畫策して居たその場合、劈頭の一戰に敗れるやうな事があつては、後の作戰や士氣に大障害を及ぼすといふので、十分な準備を整へたものであつた。これ程の無理な非常手段を執つて、元老諸公を日淸開戰に、謂はば牽き摺つたのだ。さうしなければならぬ程、元老諸公は支那を恐れて居つたわけだ。元老ばかりではない、議員も國民一般もみな恐れて居つた。丁汝昌が開戰の數年前、北洋艦隊を率ゐて橫濱沖に示威運動に來た時など、上下盡く震へ上つた。この時招待された兩院議員連は鎭遠、定遠を參觀し、その巨大さ、堅牢さ、設備の素晴らしさ、大砲の大きさ等に度膽を拔かれ、とてもこれは叶はぬと、心の中に恐れをなしたことを覺えてゐる。

さらにこの日淸戰爭以前に溯ると、明治初年の對外交涉としては、琉球處分の重大問題があつて、朝野の有力者に頭を痛めさせて居る。

琉球處分といふのは、廢藩置縣を機會として、各藩知事をすべて東京に住居すべく命ぜられたので、琉球の藩知事、即ち舊琉球王尙氏も東京に轉住せしめ、琉球を圓滿に統治しようと言ふので、今考ふれば、全く問題にもならぬことであるが、三條、岩倉以下、元老から民間有力者に至るまで眞劍に憂慮し、ビクビクものでこれに當つたのである。この時、知事に任ぜられたのは、後に東京府知事となり、地方官中の第一人者と推賞された松田道之といふ人であつた。この松田家が零落し、フトした事から、自分に長持一杯あるその文書賣却を賴まれ、琉球處分の苦心を知つたわけである。岩倉、三條、木戶、大久保始め、あらゆる大官達から細々と注意を寄せてゐるが、その內容は必ず「萬一の事があると、國際問題を惹起し、如何なることになるかも知れぬから、十分に用心せよ」との意味が書いてある。國際問題とは支那との葛藤を恐れたので、まるで虎の髯にでも觸れるやうな戒心ぶりであつた。如何に恐ろしがつてゐたかが判る。

これらの手紙の中に福澤先生のもあつたが、これは流石に外の人々とは違つて居つた。國際問題を恐れてゐるのは同樣であるが、その手段として國王や役人のみを相手とせず、「今度の改革を

よく島民に呑込ませねばいかぬ。それにはまづ平易な文章で各村々に告示を掲げ、さらに村毎に演說でもして、人心を安定させるのが肝要だ」とあり、時流を抜いた見識を示して居る。

それはとに角、琉球問題ですら、これ程支那を恐れてゐたので、日清戰爭は容易なことではなかつた。況んや支那に何倍し、世界中から恐れられて居つたロシアに一戰を挑むなど、かうした經驗をもつてゐる元老連には、虎の聰を探るやうな大冒險であつた。決心のつき難かつたのも無理はない。我々にしても現在の青年諸君から見たなら、或はかうした恐外病に多少罹つてゐるかも知れない。近頃重臣ブロックなどと、若い諸君が排擊して居るのも、重臣は昔の外國の力に苦しめられて、今の日本の實力に認識の不足があり、若い諸君は現在に眩惑して、外國の眞の恐ろしさを經驗してゐないから起る矛盾だと思ふ。

これ程心配して大事を取つた戰爭も、やつて見ると、陛下の御稜威と將卒の奮戰により連戰連捷、大勝利の中に局を結ぶこととなつた。始めの心配がひどかつたゞけ、連勝して見ると國民の心理は甚だしく驕慢となり、增長し、そのため媾和條約に對する不滿を爆發させ、有名な日比谷の燒打事件となり、桂の退却となつた。

桂公も大政治家には相違ないが、政治上に殘した仕事と言ふものは、むしろ幸運に惠まれたものが多く、彼自身の力量による治績と言うては、餘り大したものは無い。日露戰爭を脊負ひ、媾和に成功し、後には日韓合併を斷行して、維新以來の對外政策の總決算をつけるなど、勳業如何にも赫々たるものがあるが、その多くは幸運であつた。日露戰爭は誰が局に當つても、戰爭に負けない以上、あれより以下のことはない。擧國一致で桂を後援した形となり、運に惠まれて居る。日韓合併にしてもその通りで、既に十分先輩の努力で機運が熟し、刈取る許りの時に、伊藤公の遭難事件や海牙の密使事件などがあつて促進し、桂としては大した苦勞なしに、歷史的事件を處理する光榮を荷ふことになつた。全く幸運の政治家と言へる。

元來が非常に派手な政治家で、山縣の門下から出ながら、伊藤公の派手なやり方を學び、それに輪をかけた派手好みであつた。戰ひには勝つて、世間は好景氣に浮かれてゐる所だから、こんな派手な政治家は誂へ向きの時世であつた。伊藤公も遊び好きで、隨分花柳界を賑はしたが、桂には叶はなかつた。明治の花柳界は、桂によつて一つの時代を作つたと言はれる位、派手な遊びもし、花柳界を發達させもした。桂の政治のやり口が、すべてこの流儀であつた。

戰ひは軍人が勝つてくれ、政治は西園寺公を抱き込んで政友會を使ひ、大して苦勞もなかつたし、手腕らしいものも見なかつた。唯一つ先輩の持たぬ特殊の手腕があつた。それは金を借りる手腕である。金を借りると言つても、當時は戰費は勿論、戰後の諸經營盡く借金によらねばならぬから、政府としてこれが實は第一の大仕事であつた。これだけは桂に獨特の技倆があつた。澁澤とか豊川等を始め、東西の財界巨頭をどうして手馴づけたか、すつかり取りこんで、思ふまゝに借金しては、國費の不足を補つて行つた。金を借りるためには、たとへ國家の代表者でも頭を下げざるを得ぬ。有名なニコポン流で、これら金融資本家にお世辭をふりまき、何か政治上の相談をする場合には、必ずこれら金融財閥を集めて持ちかける。同じ實業界でも事業家、商工業の代表者は餘り相手にせず、金貸し業者ばかり相手にした。この連中を手馴づけることは、金を借りるに便利なばかりでなく、同時に商工業者もこの連中には頭が上らぬから、政府としては、非常な便利を得るわけである。

桂のこの金融財閥操縱は、桂以後彼等を次第に增長させ、日本の政治は事實上、彼等に指導され、抑へられるやうな結果を生み出して來た。政府が如何なる事業を起し、或は政策を行はうとするにも、先づ金融財閥の意嚮を第一に聞かねばならぬやうな習慣を作り、こゝに政界に對する金貸業者の巨大な力が生じて來た。

昨今、內閣審議會に實業界から人を入れると言へば、眞に生產に從事してゐる事業家の代表は一人も入れず、三井、三菱兩社から金融資本の代表者を任命したと言ふのも、桂に始まつたこの習慣の結果である。いはゆる資本家の橫暴なるものも、詮じ詰めると金貸資本家の橫暴で、これは政治家にその責任の一部があり、その俑を作つたものは、桂と言ふ事になる。

惡口を言ふやうだが、桂と言ふ人は先輩や友人などに對して、眞に誠意があつたかどうか、自分には疑はしい。例へば伊藤公に對しても、曩に話したやうに、政友會總裁と元老を兼ねてゐるのは困ると、突然彈劾的な上奏をやつて、態のよい押込み隱居にするなど、隨分どうかと思はれる。日露戰爭前、日英同盟か、日露協商かと言ふ時代、伊藤公を勸めて協商のため露國に旅行して貰ひながら、その旅行最中一方には秘密に日英同盟を進めるなど、あの大先輩の人格を傷つけ、煮え湯を呑ませるやうなやり口と言はねばならぬ。

又西園寺公に對しても、前後二回までも助けて貰つて、成功して居りながら、第三次桂內閣が

憲政擁護運動の全國的反對を受け、進退谷まるや、西園寺公を窮地に立たせて、違勅の汚名まで着せ、政府の手で惡宣傳をやつて、その窮境突破を企てたことすらある。これなどは怨みをもつて、徳に報いるの類で、士人の取らざる所だと思ふ。この桂公の不信行爲に對し、流石は伊藤公で、煮え湯を吞まされたことも忘れ、國家のため日英同盟の成立を慶賀祝福して居つた。西園寺公なども桂公の毒計に對し、事宮中に關すると云ふので、一言半句 の辯明 もせず、政界を去つて、京都の別邸で謹愼の生活を送られたなど、如何にも人格の相違が現れて、奥ゆかしく感ぜられる。

有名なニコボン主義の本山だから、相對すれば、頗る感じのよい人ではあつたが、信義と言ふ點では、到底恕せなかつた。從つて人を取るにも人物、人格と言ふより、その才能を愛した傾きがあり、これはその身邊の事情を見れば、一目瞭然である。自ら英雄的政治家をもつて任じ、目的のためには手段を擇ばぬと言つた人で、これが悲慘な終りを遂げさせた大原因でもあつたと考へる。

媾和不滿と憲政擁護

日淸戰爭の終りには三國干涉に對する不滿から、國民を激昂させたが、あの場合は、誰が考へても三國を相手に、あれ以上戰へる自信がなかつたゝめ、政府の處置を不承無承認めたが、日露戰爭の場合は、國民の自信や意氣込みがさうでないため、遂にあの大騷動となり、さらに重大な事態すら起らうとした。敵には新鋭の力が加はりつゝあるが、味方は既に精一杯伸び切つて、これ以上押す力の盡きてゐる時であつた。日本としては戈を收める外無かつた。

捨てた氣で捨てられてゐる隱者哉

誰の句だか覺えぬが、こんな句がある。捨てた 氣で一切を諦め 切る決斷が、 必要な時 であつた。思ひ切りが肝腎である。併し國民はさうとは知らず、鼻息が荒かつた。そこで期待を裏切られた。國民の感情が爆發して燒打となつたのである。

この重大な場合に、我々政友會は總裁西園寺公の冷靜透徹な判斷の下に、國家の大政黨としての責任を果し得たと思つてゐる。

戰爭は僅かに連勝してゐる。併しそれは十二分な勝利ではない。陸軍の力は殊に彈藥や兵員の不足で、いつも決定的な戰機を見す〳〵逃がしてゐる。この狀態は將來も續くであらうし、敵は陸續と戰線を充實しつゝあるから、次の戰ひは勝敗全く不明と言ふ外なかつた。のみならず、我からあれ以上攻擊に轉ずることも出來なかつた。

この狀態を國民は知らない。又知らしては、媾和談判に不利を招くから、政府は我が軍が非常に優勢なやうに宣傳して、國民を彌が上にも增長させて居つた。そこへ發表された媾和條約は、償金は取れず、樺太は南半分しか取れず、東清鐵道も僅かにその南部線を長春まで取れるだけと言ふのだから、絕對優勢を信じてゐる國民の感情爆發して、國民大會から燒打ちまで惹起した。政府と軍首腦部以外眞相は知らないのだから、國論は殆んど一致して政府を彈劾し、媾和條約を否認するに傾いた。もし政友會までこれに雷同したなら、條約の運命はどうなつたか判らず、從つて戰爭の終局も如何に結ばれたか判らない。國民の人氣の上に立つ政黨として、白熱した國民的輿論に正面から反對すると言ふことは、正に自殺的な冒險である。この場合、政友會は西園寺總裁が眞つ先に、國家百年の長計のため、敢然としてこの冒險に突進み、國論に反抗して媾和條約を支持した。三國干涉を承認して、時の伊藤內閣を助け、善後の處置を十分に講ぜしめたと、全く同一精神から發した行動である。

黨內でも條約に對しては、大半の議員が囂々たる非難を浴びせて、政府糾彈の火の手を擧げて居つたが、大會に代る協議會を開き、總裁が演說された。その要旨は、彼我の大勢は今日をもつて媾和の絕好機とする。日本は完全な戰勝國としての權利を主張する迄に至つてゐないのだから、この程度を以て滿足する外なく、國民は政府を助けて戰後の經營に當るべきであると言ふにあつた。國論も黨論も沸騰してゐる時であつたから、總裁のこの演說には、俄然風雲を捲き起しさうに見えた。自分は平生餘り多人數の場所で演說めいたことをするのは好まぬ方であるが、この場の空氣が、如何にも穩かでないので、直ぐに起つて總裁の演說に贊意を表し、鎭撫役を買つて出た。

それがキツカケで、他にも追々贊成者が現はれ、遂に政府の處置を是認することに黨議が纏まつた。その日、家に歸つて見ると偶然、郷里の有志神崎修三と言ふ人からも、媾和條約支持の手紙が來てゐたので、これを同封して西園寺公の處へ感謝の手紙を出した。數日後公から叮重な挨

捗狀を貰つたが、この時つくづく西園寺公の偉大さが判つた。いつでも一大事となると、必ず冷靜になる人で、あの瀟洒な貴公子が毅然たる鐵のやうな人となるに驚かされる。いはゆる大節に臨んで、奪ふべからざる眞の大丈夫であると思ふ。

この燒打ちの一周年後に、公は首相となつて居つたが、自分は横井時雄君と何事かありはせぬかと、三十間堀の大村屋で日比谷邊の樣子を覗つてゐた所、そこへ鳥打帽姿の公が入つて來られた。公も同じ心持で、一人ブラリと日比谷を見廻られたとの事で、その大膽さにはちよつと驚かされた。

非常に果斷であり、同時に聰明な人である。昔から藤原氏の傑物と言ふのは、すべてこの型の人で、政治に成功して來てゐるやうに思はれる。滅多に人を褒めぬ陸奥が、公を類稀な人として推賞して居つた事で、その偉さが知れる。近年は唯一人の元老として、いよ〳〵その聰明と果斷に磨きがかゝり、如何なる反對者も非難の餘地のないやうな、鮮かな裁斷を下されてゐる。

公の事を政黨主義者だなどゝ言ふ人があるが、自分にはその邊の判斷はつきかねる。只公は折にふれて「……誰が言ふか知らぬが、政黨政治をもつて憲政の常道と言ふさうであるが……」とか「……いはゆる憲政の常道など言ふ……」と言ふ風な話をされて居り、これによつてその見識を忖度すれば、略見當はつくと思ふ。

いづれにしても近年の公は、全く至公至平、神に近い正しい判斷を持つて居られ、自分など訪問する度に、何か心身を淨められるやうな心持がする位である。

話が大部傍道へ外れたが、政友會は公のこの演說で、敢然と國論に逆らつて政府を支持し、媾和成立に邁進した。政友會がもし逆に媾和條約否認のやうな輕率な行爲に出たなら、戰後の時局は、到底圓滿には收まらなかつたであらうと思ふ。この點でも我々は、日清戰爭の場合同樣、國家本位の立場から、大局を誤らず、相當の御奉公が出來たものと確信してゐる。

桂公も西園寺公のこの時の態度の立派さに感激して、次の政權はこの人を措いて無いと、この時に決心し、桂冠するや、元老の間に公を推薦して、第一次西園寺內閣を出現せしめたとの事である。

三十八年から明治の終りに至る間は、いはゆる桂、西園寺妥協時代で、頗る平穩な時代であつたが、自分はこの頃は、議員を辭して居つたものだから、詳細な事は與り知らぬ。この間この妥

協を斡旋し、桂と西園寺の間を取持つたのは、主として野田卯太郎君であつた。野田はあの通りの大男で、要領を得ぬやうで、非常に要領を得た、妥協にはもつて來いの智慧者であつた。西園寺公の信用を得たのみならず、三井財閥や福岡財閥の支持を受けて、桂公とも非常に親しく、その上、井上侯に信頼されて居つたものだから、この間の斡旋には掛替へのない役者であつた。桂、西園寺時代の平和は、主として野田の功績と言つていゝ。

所がこの妥協も餘り長過ぎたため、人心漸くこれに倦み、大正初頭の政變を生む事となつた。憲政擁護は直接には桂の横暴を懲らし、軍部に根據を据ゑる藩閥を打倒すると言ふことに原因してゐるが、實は十年近い妥協政治に天下の人心が全く倦怠を感じ、局面を一新せんとする空氣が、強く動いて居つたためである。

この大運動は、自分が中心人物として、すべての筋書を書いたやうに言はれ、又前後の事情で隨分世の誤解を受けたものであるが、事實自分として相當の働きはしたに相違ないが、世間でいふやうなものではない。この機會に、憲政史上のこの重大な爭ひの表裏の事情を明らかにしておきたいと思ふ。

この護憲運動から既に二十五六年も經つた今日、政友會でも、交詢社でも、或は當時の國民黨の人々でも、この運動は自分達が火元だと主張してゐる。騒動の火元爭ひなどは珍らしい話で、これだけを見ても、如何にあの運動が人爲的に起されたものでなく、國民の感情を代表して、自然に捲き起つたものであるかと言ふことが分る。火元爭ひをして決しない程、一時に各所から火が出たわけである。何故一時に各所から火が燃え上つたか。これには當時の一般政情及び桂公の進退をまづ述べてみる必要がある。

桂公が次第に増長して、先輩も先輩とせず、暴慢となつたことには、期せずして朝野の反感が集められた。四十五年　明治天皇御不例の公表される頃、公は先輩伊藤公の志を繼いで、ロシア訪問の途にあつたが、御大患を承知すると、途中から歸朝した。勿論鬱勃たる政治的野心を懐いて居つたことは、渡歐に當り明治天皇に奏上した意見で明らかであるが、歸朝間もなく四園の事情は公の野心を封じ、内大臣として新皇帝陛下の側近に奉仕する運命となつた。公の胸中に何事の去來して居つたかは、その後、半年にして宮中を出でゝ首相となり、續いて同志會を創立して大いに政界に驥足を伸べんとした事で想察出來る。

當時財政の窮乏は次第に甚だしく、歳入不足六百五十萬圓にも及ぶ有様であつた。西園寺內閣はこれがため財政、行政の一大整理を立案し、各省豫算に對して天引一割五分乃至九分の整理を求めた。所が陸軍はこれに應じないのみならず、逆に二個師團增設の費用を求めて來た。陸軍の要求を容るれば、次ぎは海軍が六六艦隊完成のため、初年度經費として一億六千萬圓乃至三億五千萬圓以上の要求を持出さうと待構へて居り、今も昔も變らぬ軍部豫算が、財政當局苦惱の種であつた。

時の陸相は上原大將で、隨分閣議で激しい論爭が行はれたが、結局增師不承認と決定し、陸軍と內閣の衝突が起つた。西園寺首相からは反覆して、陸相の反省を求めたが肯かず、後には閣議にも出席せず、山縣公その他陸軍の諸先輩と協議の末、十二月二日單獨辭表を捧呈した。

そこで西園寺公は山縣公と會見して、善後處置を相談し、當時の慣例に從つて、後任陸相の推薦を賴みこんだが、陸軍一體となつて增師を求めてゐる際だから、公は膠もなくこれを斷つた。陸相が得られぬとなれば、內閣は總辭職する外ない。軍部が政治上に持つ特權であつて、政黨の力をもつては如何ともすることが出來ない。その翌年、山本內閣で政友會が志を得るや、直に陸海軍大臣の任用資格を豫後備將官にまで擴張したのは、この時の苦い經驗から始まつたことである。併しこの改正は今日迄、二十餘年間未だ一度も實際の役には立つて居らぬ。恐らく將來も軍部の政治的特權を制御するといふ役に立つことはあるまい。役に立たぬとすれば、政界は事實上、ある程度まで軍部の特權に支配される外ないものと思ふ。憲政運用上の一疑問であるが、如何ともし難い。

十二月五日閣員一同辭表を捧呈した。山縣公等は餘りに西園寺公のアッサリした退却に、實は狼狽したやうであつた。陸軍側巨頭連の觀測では、西園寺公も強さうなことは言つてゐるが、結局增師案を認めるから、陸相を出してくれと哀願するものと思つてゐたらしいが、公はかやうな場合には、非常に強い人となる。同時に正義感の強い人であり、又聰明であるから、よく先が見え、從つて果斷である。山縣公等の意表に出て、スパリと總辭職して終つた。

翌一日には各元老が御召によつて參內し、西園寺公に一同から留任を勸誘したが、頑として肯かない。そこで第一候補者として松方侯を推したが受けず、次は山縣公の腹心平田子爵に交涉して見たが、これも承知せず、山本權兵衛伯にお鉢を廻したが、やはり引受けない。みな增師案の

後仕末をつけるためには、政友會を敵にせねばならぬから、誰にも自信が無いのである。

この間にも陸海軍の連中は、それぞれ各處に集まつて策動し、次の內閣によつて豫算を獲得しようと、協議するのが目立つて來た。それが今日と異つて、陸軍は長州、海軍は薩派に壟斷されて居る時代だから、如何にもこれらの閥族が、軍部を根城に國民を苦しめ、議會を輕視して、横暴を働くやうに見えたものである。日露戰後の反動不景氣時代で、國民は貧富共に苦しんでゐるから、この閥族の跋扈横暴には、期せずして一大不滿が勃發して來た。議會を擁護して、軍閥の横暴を挫けと、こゝに一大國民運動が起つた。これに「憲政擁護閥族打破」の旗印を押立てたのが、我々の運動であつた。この旗印は今から考へても、當時の國民的感情や四圍の情勢にピツタリと當てはまり、絕大な効果を現したのであつた。

桂公への反感

この陸海軍の策動の間に、チラホラと桂の名が現はれて來る。さらに遡つては、上原の內閣爆破にも關係してゐるやうな風評が出て來て、公に對する反感が大分强くなつてゐるところへ、元老會議は後繼首相として公を推薦し、十二月十七日大命が降り、二十一日第三次桂內閣が成立したから、閥族横暴に憤激してゐる國民の感情は「さては一切桂の陰謀であつたか」と、怒濤のやうに非難攻擊となつて、新內閣に打寄せて行つた。

桂に對する第一の非難は宮中、府中の別を紊すと言ふ事であつた。側近に奉仕して、常侍補弼の責に任ずるかと思へば、半年も經たぬ中、軍部政治家の間に策動の手を伸ばして宮中を出で、政權を橫取りして、我意を振舞はうとする、その態度が不都合であるとして、痛烈な非難を蒙つた。もし公が德の人であり、信義を重んずると見られて居つたなら、この場合、これ程の非難を浴びる筈は無かつたのであるが、曩に述べた通り、權變常なく、目的のため手段を擇ばぬそのやり方が、いつの間にか國民的不信と反感を招き、こゝにその淸算を餘儀なくされる事となつたのである。

桂首相個人への反感と閥族軍部に對する不滿が、同時に爆發して、全國に流れ出した。燎原の火の如しと言ふが、實にこの時の運動の猛烈迅速な有樣こそ、その通りであつた。政友會內部の憤激は固よりの事、第二黨たる國民黨も、犬養君があの性格だから、「宿敵御座んなれ」とばかり

腕に撚りをかけて奔走を始める。一方當時實業界特に産業家唯一の集會所であつた交詢社では、煖邊も談話室も桂內閣反對の空氣が旋風のやうに渦巻き、出入する政治家に對して、運動資金をも提供せんとするまでに激勵するから、いよ〳〵火の手が煽られて來た。こゝの有力な社員福澤桃介君などは、當時代議士として政友會に屬してゐたし、日本新聞を經營して居つた伊藤欽亮君もこゝの社員で、時事新報その他と呼應して、桂に言論の十字砲火を見舞ひ、輿論の指導には非常に有力な味方となつてくれた。又、交詢社には産業資本家が多かつた事も、桂を敵視した一つの原因であつたと思ふ。桂は澁澤以下金融資本家、即ち金貸業者には公債政策の必要上からであつたか、日露戰爭以來、非常にお世辭をふりまくが、産業資本家には餘り取り合はず、むしろ金融資本家を優遇するため、産業資本家は幾分不利な立場に置かれて居つた位である。産業資本家から言へば、我々こそ國家經濟の眞の力となつて居るもので、産業の振興、貿易の發展みな自分等の仕事である。それに拘らず、「桂が金貸しのみを優遇するのは怪しからぬ」と、言はず語らずの裡に不滿を皆もつて居つた。一つはそれがこの機會に爆發を手傳つてゐるやうであつた。國民の空氣は、前述したやうに妥協政治に倦怠し、桂の橫暴を憤つて、閥族を憎んでゐる時だから、これも旗印に魅せられて沸き立ち、運動勃發後、半月も經たぬ一月早々には、既に全國物情騷然たる有樣となつて來た。

自分は元來かうした運動が得意でもなく、又好きでもない。どちらかといふと、大衆と共に騷ぎまはる事は嫌ひであり、不得手でもある。それにも拘らず、この時は黨內で率先してこの運動に加はり、後にはこのため一時脫黨するやうになるまで、打込んだと言ふのは何故か。これにはいろ〳〵な理由がある。

軍部を根城として、特權の城塞から議會を脅かし、國民の權利を抑壓する閥族の橫暴に、この機會に一擊を加へやうと考へた事は、勿論理由の一つである。又桂の態度が暴慢不遜で、宮中、府中を紊し、權勢を專らにしようとするのに憤慨した事も、重大な理由の一つである。實はこの外に自分は、桂の重なる不信な行爲に、いつかは一矢酬いてやらうとも、多年心がけて居つた。それがこの機會にめぐり合つたものだから、餘り得手でもなく、好きでもない運動に全力を擧げて、飛込んで行つたものである。さらに又政友會と桂との打續く妥協政治に、實はもう倦き〳〵して居つた。政治の沈滯、政界の墮落は、そのためだと思つてゐたから、この機會に風雲を捲き

起して、政界の空氣を一新してやらうとも考へた次第である。

桂の不信な行爲は、既に述べた通りだが、就中自分として忘れられない事件は、第二次山縣内閣の折、自分は黨の交渉係として、政府の連絡係たる桂の相手に種々の交渉をしたのであるが、重大な軍備充實增稅案の通過に骨を折らされ、政府が十二分に成功するや、突如として文官任用令を發布して、我々の立場を窮地に陷れて居る。この煮え湯の味は、終生自分として忘れられない。

それで自分は、西園寺公が桂と妥協を繰返すのに不滿であつた。恰度第二次桂内閣が成立した時、この時は「西園寺と桂が情意投合した」と言ふ演説をして、いはゆる情意投合の政界新熟語を作つた時であるが、議員一同と桂公以下閣僚とが築地の精養軒で會食した。その席で雜談の折、自分は「今度はもう昔の手は使はんやうに願ひたい。騙し討は困る」と桂に言つた所、彼は「あの時はホンの小問題で、いろ／＼行違ひも出來たやうだが、今度は眞に國家の重大事を控へてゐるから大丈夫だ。よろしく頼む」と、極りの惡い顏もせず言つて居つた。この時もこの男はどこ迄、圖々しいか分らぬ。到底こんな政治家を相手に眞劍な相談など出來るものではないと考へて居つたが、その後、報復の機會もなく過ごして居る中、憲政擁護の槍先に桂自ら現れて來たから、この機を外してはと打込んで、奔走盡力したわけである。

その頃交詢社へ出入してゐた黨の常連は二十六七人位もあつた。交詢社が護憲運動の火元の一つだから、この連中は、最初から昂奮してゐる。自分も前述の次第で、この仲間と一緒に黨内の硬化に努めたが、いづれも泰平に倦き、藩閥に憤慨してゐるから、忽ち大勢は決して終つた。それに自分と云ふものは、元來西園寺公にも相當に知を辱うして居ると見られ、原は勿論、松田も同樣、重大な事は自分らに相談する間柄と黨内でも見てゐたから、その自分が乘出す以上、原も松田も西園寺公も相應に諒解があるだらうと、一般に買ひかぶられて居つた。これが非常に黨の硬化を促進した。奥繁三郎の如き幹部まで「君の事だから、それ程やる以上、總裁その他と十分打合せをやつてるのだらう」と聞く始末で、自分はこれに「かう言ふ事は、總裁や幹部の諒解なぞ得べき問題ではない。かゝる際はお互に上を見ず、傍見をせず、自分の足許だけ見定めて歩かうではないか」と答へた事を覺えてゐる。

犬養も交詢社の社員であるため自然、この問題で度々會見して、協力を相談した。が、元來同

君には餘程前から時々出會つて居つた事が、憲政擁護には役に立つた。又この間には中野正剛君が、大分働いた事があつた。犬養の方は、國民黨の內部に桂系の分子があつて、黨が動搖してゐるものだから、大喜びで共同動作を取ることゝなつた。その際自分は、犬養と一緒に第一線に立つて、國民を動かすには、我が黨では尾崎の外ないと考へ、尾崎が大阪から歸るのを待つて相談した。

この時の尾崎は、不思議な位沈着で尻込みし、穩和な妥協意見を吐いて居つた。尾崎の言ふには

「新帝の御即位後間もない昨今、混亂を起しては實に申し譯のないことだから、桂と今一度妥協して政局を收拾しては、どうだ。妥協の條件としては例の任用令を改正する意味で、官吏を政務官と事務官に區別させ、黨員進出の途を開いたらいゝではないか。自分は永い間政黨めぐりをやつて、浮草のやうな生活を送つて來た。今度政友會に入黨したのは、こゝを死所と定めて來たのに、この運動に參加すれば、恐らく再び脫黨か除名を免れまい。自分の性質上、一旦やり出したら、必ず行過ぎるまで行かねば止れないから、今度の運動も一度加はる以上、必ずそこまで行くに相違ない。それは困る。」

併し犬養と竝べて、民衆を指導させるには、尾崎以上の役者はない。そこで嫌だと言ふのを何も構はず、新富座かどこかの內閣彈劾演說會に起たして終つた。一度演壇に上ると、尾崎と言ふ人は自分でも言ふ通り、行過ぎるとも、尻込みするやうな人間ではない。悍馬は自分の足音に調子づいて、足の折れるまで走ると言ふが、尾崎などは自分の演說に調子づいて、壁に突當るまで突進する。この時も演說會每に熱を揚げ、又民衆に受けて、憲政の神樣など言はれるものだから、いよいよ調子に乘り、議會の彈劾演說では、たうとう有名な「玉座を障壁とし、聖旨を彈丸とし、以て政敵を傷つくる」云々と、言ふ痛烈極まる大演說をするまでになつた。最初引出すのに苦心した自分が今度は手綱を締めるのに困る位で、考へれば妙な話だが、尾崎と言ふ人は、さうした人間なのである。兎も角、あゝした場合の立役者なり、彈劾演說なりには、うつてつけの役者で、又あれ以上の役者は、今日迄の所、外にはないやうである。

一月十二日には政友會、國民黨を筆頭に民間の有志十五團體が、日比谷公園で藩閥打破の大會を開き、殺氣橫溢、何となく動亂を思はせるやうな無氣味な空氣が都下を包んだ。

この護憲運動に更に一層の油を注いだのは、桂の新黨組織運動である。桂及びその身邊の人々の話では、前年桂が外遊するに當つて、明治天皇に御暇乞申上げた際、憲政の運用上、政黨の必要な所以を奏上し、歐米の政黨事情を調査して、歸朝後はそれによつて皇謨を翼贊し奉るべき旨内奏して居つた。即ち政黨組織は既に先帝の御代に、腹に決めて居つたものを、偶々政界に復活したので、これを實現したものに過ぎないと言つてゐる。

桂が先帝に内奏して居つたか否かは、問題ではなかつた。あの場合、桂の新黨組織によつて、第一に國民黨は犬養一人を置去りにし、大石始め五領袖以下有力な黨員は、大半脱黨して終つた置去られた犬養以下の國民黨員が、桂に對する敵愾心をいよ〳〵昂めるは當然の事で、この分裂以來、國民黨は眞に死に身となつて奮闘した。それから又、安達君等の大同倶樂部を始め、當時の政界で普通の交際をしなかつた札付きの小會派が、擧つて桂の傘下に走つたことも、桂黨を輕侮させ、一般世間の反感を挑發する一つの原因となつた。

ともかく、かうして寄せ集めた桂の新黨は、國民黨から出たいはゆる五領袖大石、河野、島田、箕浦、片岡等を中心として結成され、立憲同志會となつた。これがその後尾崎の一黨や、大隈伯後援會の中立議員などを包容して憲政會となり、さらに政友本黨と合併して、民政黨となつたのである。

尾崎の彈劾演説後、議會は停會となり、政府は八方活路を求めたが、院外の民衆運動は日一日と猛烈を加へ、燒打騷ぎまで起つて、警官と民衆が衝突し、政黨側もますます氣勢を揚げるので手のつけやうなく、桂はいよいよ解散か總辭職か、いづれか一を擇ばねばならなくなつた。政府筋からの情報は、すべて解散を決意したと言ふに意見一致し、これが又護憲軍を逆に硬化させ、萬一解散となれば、如何なる事態が勃發するかも分らぬ有樣となつた。

この時、桂と同鄕で多年親しくして居つた大岡育造君は、恰度議長であつたので、桂に偵察旁旁忠告に行つたが、その時桂は大岡の質問に對し、ハツキリと「解散の外ない」と述べたさうだが、大岡はこれに向つて「今解散すれば、恐らく內亂が勃發するであらう。貴下は內亂の責任を負ふつもりであるか。」と、辛辣な警告を發した所、流石の桂も顔色を變じて、沈默したと言ふことである。大岡君の報告では、恐らく桂は解散を思ひ止まるであらうとのことだつたが、果して解散出來ず、議會中の政變と言ふ新記錄を作つて退却してゐる。大岡のこの警告が、桂の胸を射

拔く程の効果があつたものと思つてゐる。

純忠無比の園公

議會停會となり、政府と護憲軍が鎬競り合ひの最中、突然外相加藤高明君が西園寺公を訪ねて來た。話は最後の妥協談である。公としては、今日となつては黨員のみならず、國民的運動となつてゐるから、小細工を弄して妥協などすることは、害あつて益なし、と謝絶された。

するとその翌日、突然西園寺總裁を宮中に御召しになり、政局收拾に關する御沙汰を賜はつた。かつて貴族院に躓いた伊藤公が、近衛議長に勅語を奏請した同一手法である。後に聞くと、これは加藤高明伯の獻策で、何でも英國の例か何かをもつて、桂公を勸めたとの話である。御沙汰を拜した西園寺總裁は、非常に憂慮して居られた。まづ原、松田の二領袖を呼んで相談されたが、二人共今日の勢ひは、我々のみの力では鎭撫出來難い。これは主としてこの運動に當つてゐる尾崎、岡崎を初め總務一同を呼ばれて、相談されるがよからうと言ふことになり、我々も呼ばれ、總裁より御沙汰の次第をも傳へられ、鎭撫に努力せよとの御話しがあつた。

尾崎はこの時

「政治上の爭ひに御沙汰を賜はると言ふことは、憲政の運用上、危險な例を開くことゝなる。これは總裁としては聖旨を拜するより、忠諫し奉るが、本分を盡す道ではないか。」

と例の調子で述べた所、西園寺公はキッとなつて、こんな事を言はれた。

「さやうな議論になると、諸君と自分とは全然根據が違ふ。如何なる御沙汰であらうとも、お受けするのが、我々の本分である。」

この時の總裁の言葉は、この通りではなかつた。もつと上品に、穩かな中にも凛然たる忠節を包み、碎いて言ふならば「綸言は汗の如きもので、絶對である。自分の家柄、身分としては、お受けする外なく、忠諫など言ふ議論は此の場合には適せぬ」との意味を頗る上品に穩かな言葉で、而も強い意味を含ませて言はれた。

どうしてもその時の言葉が、その通りに思ひ出せず、又言ひあらはしかねるが、自分としては非常な威力で押伏せられるやうに感じたものである。機會があれば、公爵にこの言葉は聞いておきたいと思つてゐる。

それはとにかく、自分はすでに矢は弦上を放れて、接戰してゐる時であるから、この際內閣が退く外、我々としては鉾を收める途はない。とも角も我が黨として、一大受難の秋たる事は覺悟せざるを得ぬと答へた。その他幹部もみな同樣難色あり、只一二人の外、命に應じようと云ふ者はなかつた。公もこの上は黨の大會を開き、衆議に決する外あるまいとされ、幹部會は態度保留の儘散會した。この間にも總裁邸の幹部が軟化しはせぬかと、本部からは櫛の齒を引くやうに、少壯議員が駿河臺に押しかけ、實に殺氣天に沖すと言つた有樣であつた。幹部會は態度保留とは言ふものゝ、事實上、御沙汰を奉じた總裁の意思に反對してゐるわけだから、大會に臨む總裁としては、既に一身上の頗る悲愴な決意を固めて居つたと想像する。我々も實に御氣の毒な次第と思つたが、勢ひ已むを得なかつたと同時に、純忠の總裁をして、この苦境に陷らしめた桂公の奸手段をいよ〱憎んだわけである。

黨大會では總裁の鎭撫演說に對し、尾崎が同志を代表して、遺憾ながら總裁の希望に服し得ない所以を述べ、他に發言者もなく、大勢は尾崎の演說に決定して終つた。黨議が決すると、總裁は

「自分はその立場上、諸君に妥協を求めたが、諸君がこれを肯かず、黨議一決した以上、諸君は正々堂々と所信に邁進されたい。これ諸君が、その職責上、君國に忠なる所以であらう。」

と挨拶された。その朗々たる高潔な心事は、流石に名門の偉材として、唯敬服の外はない。

政府側ではこの總裁の演說を捉へて、公には最初から聖旨を奉ずる志が無く、暗に黨員を煽動してゐるなどと、惡宣傳の材料にして居つたが、陰險な自己の心事をもつて、高朗な公の人格を測らんとするもので、實に失笑を禁じ得ない。

西園寺總裁が遂に黨內を鎭撫し得なかつた一方には、山本權兵衞伯が現れて桂首相を脅かし、遂に桂內閣は僅か五十三日の短命をもつて倒れて終つた。桂側からは連りに西園寺公の違勅を放送して非難した。自分も現に後藤新平伯の口からこれを聞いて、一言應酬したことがあつた。違勅であるかないかは、前後の事情を究明すれば、明白なことであるが、公はその身分上、衷心これを申譯なしとして、政變後間もなく總裁を辭し、同時に一切の公職を捨て、東京の本邸すらも鎖ざして、京都市外中村に隱栖、固く門を閉ぢて、自ら謹愼の意を表せられた。

勿論何人が訪れても面會せず、桂側から發せられる違勅の非難に對しても、一言の辯明もせず、只管謹愼の意を表されて居つた。公のこの態度に對し、當時松田正久君が「昔菅公は太宰府に都府樓の甍を見、又觀音寺の鐘聲のみを聞いて、謹愼して居つたと言ふので、忠臣の鑑として神に祀られたが、公の昨今は、それにも劣らぬ態度ではあるまいか」と言つた事を記憶してゐる。それ程公は身を愼まれて居つた。

反對派が如何に惡宣傳をやつても、結局公の純忠は世間の同情を惹き、その後數年して山縣公はわざわざ洛北の閑居を訪れ、世に出るやうに勸め、その後さる宮殿下も御微行で、公を訪ひ給ひ、懇ろな御言葉を賜はつた。宮中方面でも公の至誠明らかとなり、晴れて再び元勳としての御優遇を賜はることとなつたものである。

恰度黨の態度を決する大會の日、山本權兵衛伯が飄然と本部に西園寺公を訪ねて來た。そして言ふのには、「今、桂公を訪問して辭職を勸告して來た所だが、恐らく今明日中に辭めるであらう」と。そして總裁とは別室で、何か密談を交はして歸つて行つたが、この時ほゞ次の內閣引受けの見當をつけ、政友會に援助を申込んだものらしい。

山本伯は桂公に對して、少しも遠慮するやうな人ではなく、いつも貴樣呼ばはりで、頗る痛快にやつて居つた。この時も桂の態度を見るに見かね、單身首相官邸に不意を襲つて、桂に例の調子で、辭職を迫り、事の序でに次期政權への橋渡しを持込んだもので、憲政史四十餘年間、こんな豪快な政變はない。

桂が退き、元老會議は山縣、大山、西園寺、桂の四人で開かれ、山本伯を奏薦した。伯は豫定の筋書に從つて、西園寺公に閣僚の推薦を一任し、萬事政友會と協調することを聲明した。公は原、松田二人と相談した結果、黨からは以上二人の外、元田君を遞相に入れ、黨外からは高橋是清君を藏相に、山本達雄君を農相に、奥田義人を文相に推すこととなつた。黨外とは言へ、山本君は既に西園寺內閣の藏相として、准黨員のやうなものだし、高橋、奥田兩君も政友會の黨友として、親密な間柄にあつた連中である。

この結果に對して、黨內は果然沸騰して來た。閥族打破を叫んで、長閥の桂を葬つたものが、薩閥の山本と妥協するのは、純理に反すると言ふのが第一、政黨主義を拋棄するのが、怪しからぬと言ふのが第二、倒閣第一の功勞者たる犬養、尾崎兩人を一人も入閣せしめないのは、怪しか

らんと言ふのが第三、凡そこんな理由で、幹部の處置に反對するものが續出し、勝戰の後だからとても鼻息が荒い。

幹部の方では第一、第二の理由に對しては高橋、山本、奥田の三大臣を入黨せしめれば、事實上我が黨内閣となり、薩閥が我が黨に降服したこととなるからいゝではないかと、山縣内閣と憲政黨の故智を襲つて宥めにかゝり、これは間もなく實現した。第三の犬養、尾崎兩人を入閣させぬことについては、肝腎の山本首相が、例の閥族癖を出して、彼等は大臣となるにはまだ早いと言つた調子で、適當な椅子もなし、遂に駄目と決まつた。硬派中の硬派は騎虎の勢ひ、幹部と一戰せざるを得なくなつた。自分も他の事は兎に角、犬養、尾崎の中、せめて一人だけでも入閣せしむれば、面目が立つからと、山本伯に談判に及んだが、同意せしめ得なかつた。その上、積日の努力を謝し、倘入閣に洩れた餘儀なき次第を自分より挨拶に行つてくれとの蟲のいゝ話を依頼されたが、これには少々呆れて、原か松田の中で行つたらよからうと斷り、遂にこの挨拶には松田が行つた。

そこで黨が山本内閣を支持すると決した二月十四日の夜、最硬派の會合を開いた所、約三十名ばかり集まつた。その顏觸れを見ると、尾崎始め竹越、福澤、林(毅陸)、小山(完吾)、菊地(武德)など、純理を主張する人々であつたが、中には人氣のよい脫黨組を踏臺として、他日桂黨に赴かんとする人もあるやうに見えて居つたが、後日やまと新聞社長松下軍治君から、當時後藤伯の意を受けて、我々の同志買收に當つた事情を聞かされ、啞然としたこともある。

果してその後、同志會に投じ、中には政務官などに任官された人もあつた。

話しはいよいよ脫黨まで進んだが、初めから自分は深く注意して居つたため、特に脫黨宣言書に註文をつけ、起草に竹越君を煩はした。それは桂、西園寺の妥協に慣れた政友會を辭め「政友會をして理論に則り、筋道の立つ行動を執らしむるやう改革するためには、今日黨に留まるよりも、この機會に黨外に去つて、志を行ふが便宜である。我々は政友會を捨てるものではない。常に黨外より故鄕の山川を見る如き心持をもつて、政友會を我々の理想へ導かんとするものである」との意味で、最初から復黨の機會のあることを示し、黨を敵視するものでないことを明かにしたものである。

脫黨連中はなるべく道連れを多くしようとしたが、自分は極力これを阻止し、最少限に止め

た。そして脱黨議員で政友倶樂部と言ふのを組織したが、議會の末頃から同志會の誘惑の手が動き始めたやうであつた。政友會の不評に煽られ自然、政友會を非難し、これに反對する傾向が出て來た。もしそのまゝ進んだなら「故郷の山川」を永遠の敵地とせねばならぬことは、最早明らかであつた。そこで自分は議會閉會後、この事情を打開け、諒解を求めておいた。そして倶樂部の會議慰勞會の席上で、主人として挨拶を述べ、突然脱會を發表した。

みな寢耳に水であつたので、一同は思ひ止まるやう、切に忠告されたけれども、自分は懇ろに説明した。

「諸君とは志を同じくし脱黨したのであるが、その目的は、黨外にあつて政友會を牽制し、時には之を助けて、その善をなさしめようと考へてゐたものである。然るに日に〳〵彼と遠ざかりつゝあり、これより各自選擧區に報告に歸ることとなれば、政友會の不人氣な所より、勢ひこれを論難するやうなことにもなるであらう。自然、桂黨と同一の途を步むやうなことにならぬとも言はれぬ。自分等は諸君と共に、大政友會を引摺つて、桂內閣を倒したのである。然るにそれと同一の途に進まんとするのは、自分の欲する所ではない。唯今は諸君と同一の所に立つて居るが、明日踏出さんとする道は明らかに分れて居る。自分は政友會を善導せんとし、諸君は之を敵視せんとするは明らかで、既に千里の差を生じて後、悔いるは至愚の事である。烏滸がましい申分ではあるが、最後まで同行出來ざることが明らかな限り、今日分るゝことが、或は智に近いかと思ふ。」

と言ひ切つて脱會した。この自分の脱黨、脱會が早過ぎたゝめ、尾崎を黨外に連れ出すための芝居など、いろ〳〵非難を受たものであるが、芝居でも何でもなく、畢竟芝居氣がないからである。倶樂部員中にも自分と志を同じくする人があつたが、何分若手が多く、新聞等の人氣に叛いて、脱會の出來なかつたのも、人情の然らしめる所であらう。その後、政界の狀況も變り、政友會の友人達も勸說するので、その年の冬再び政友會に復歸したのである。倶樂部員中にもボツ〳〵脱會し、復黨した人も少くなかつたが、尾崎君始め多少の人は、最後には遂に桂黨の同志會に赴き大隈內閣の閣僚や政務官となつた人もあることとは、承知の通りで、智を誇るわけではないが、自分としては、必然の成行だと思つてゐる。

井上(侯)板垣、原

山本內閣はシーメンス事件と言ふ、妙な問題で倒れたが、政友會は緣もゆかりもないこの事件の捲添を喰つて、一世の非難を浴び、おまけに護憲運動の竹箆返しを受けた。この後に出來たのが、同志會を基礎とする大隈內閣である。

政界と全く緣を斷つて終つた大隈侯が、而も永年の政敵、山縣、井上等の長閥元老に推薦されて出現して來たのは、頗る奇妙な事であるが、これにはいろいろな理由がある。增師と海軍擴張問題を解決させやうと言ふ事が理由の一つ、官僚と同志會が殆んど一體となる程、握手して居つた事も理由の一つだが、最大の原因は、當時の元老等か政友會叩き潰しの手として、大隈侯を利用したものである。

政友會は明治三十三年の立黨以來、第一黨又は絕對多數の地位を讓つた事がない。日露戰爭後は殊に桂と妥協して或は朝に立ち、或は桂の與黨となつて、常に政權と離れず、その勢力は次第に政界を壓倒するやうになつて來た。政府は政友會に頭を下げる以外、如何ともする事は出來な

い。

そこで自然政友會橫暴の聲も起り、又閥族官僚から見れば、その全盛ぶりは癪に障つて、仕方がなかつた。憲政擁護運動で一氣に桂內閣を押し倒して後は、その威力に恐怖をさへ感じて來た。これを叩き落すには、大隈以上の適任者はない。そこで大隈が選ばれて、奏薦されたわけである。

大隈奏薦には井上侯が殊に力瘤を入れ、その後、選擧費の調達を始め、いろいろと內閣の世話を燒いてゐるが、これには井上侯が板垣伯以來、政友會を憎んで居つた事が原因してゐる。井上侯と野田や自分等は親近であつたが、板垣伯とは犬猿の間柄であつた。その最初の原因は、藤田組の贋札事件である。この事件は、薩長爭覇の犧牲のやうなもので、長閥が薩派の北海道官有物拂下事件を攻擊したものだから、その復讐に薩派は、その支配下にある警視廳に命じて、この事件をホジり出させたものである。長閥の資金係りだつた藤田傳三郎が、外國で大仕掛の贋札を印刷し、それを使用したと言ふ事件で、警視廳にゐた鹿兒島出身の安藤中警視と言ふのが、主として調べたものだ。大阪の藤田組の幹部を拘引するためには、大阪府知事は長州人で妨害する惧れ

があるとて、隣の堺縣廳に本據を置いて取調べた。堺の知事は薩州人であつた。事件は藤田を隣縣の堺の獄に投じて取調べ、天下の大問題となつたが、結局證據不十分で問題とならなかつた。警視廳方面では、この事件に井上侯が關係ありと睨み、その調書の中には、關係の筋道が詳しく書かれてある。議會が開かれた後、安藤中警視がこれを板垣伯に持込み、伯は又之を埼玉縣選出の代議士齋藤珪次に調べさせた上、井上侯が大臣であつた議會で、痛烈な質問演說をやらせ、侯は辭表を出すまでの騷ぎを起した。この時から徹底的に板垣嫌ひ、自由黨嫌ひとなり、政友會となつても、依然として好意を持たなかつた。三國干涉の後、伊藤內閣と自由黨の提携を自分がやつた時も、井上侯が信用せず、伊藤公も持て餘し、遂に公侯立會の前で自分から其顚末を說明して、やつと承知させたやうな事もある。

官僚の政友會反對は、これは歷史的因緣で、清浦、平田以下すべて政友會を敵視し、その上、大浦始め官僚の錚々たる連中が、この頃同志會に入黨してゐたから、官僚と同志會とは親類同樣の關係となつて居た。この官僚が山縣公の指圖を受けて、大隈內閣を助け、政友會虐めに狂奔した。さらに又岩崎以下有力な財閥の巨頭が、元老のお聲がかりで大隈侯を助け、選擧費を寄附したものだから、政友會は元老、官僚、財閥の包圍攻擊を受ける事となり、こゝに立黨以來の難局に陷つたものである。

政友會を少數黨に落とす事が內閣の重要な使命目的だから、次の議會は增師問題を名として、遮二無二解散、總選擧となつた。この回顧談の冒頭に述べたやうに、この選擧は大浦內相の手で辛辣な大干涉が行はれ、一面財閥總掛りの選擧費應援があつたものだから、政友會は一擧に半分以下、唯の百八人に叩き落され、同志會を中心とする與黨が絕對多數となつた。大浦は二十五年の大干涉の頃は、鳥取縣か島根縣の知事で、官僚の山陰道總督として干涉を行ひ、その後、選擧干涉を專門に研究したやうな人で、地方事情に精通してゐる事は驚く程であつた。安達君が選擧の神と言はれるのは、地方情勢や人物、親戚關係等を綿密に調べて、虎の卷を作つて居るためと言はれるが、これは大浦の工夫をそのまゝ見習つたものらしい。

政友會は大隈侯も癪に障るが、この大浦のやり方に特に憤慨し、遂に村野常右衛門の手で議員買收の事實を告發し、社會的に葬つて終ふまで爭つた。この買收事件と言ふものは、增師問題解決のため政友會の議員を誘惑したもので、政友會內部では板倉中が元締となつて居た。自分は

板倉を思ひ止まらせるため、彼れの宿厚生館を訪問した所、刑事の番所の様な恰好で、取次ぎに出て客を調べて居つたのを見て、これはもう駐目と諦めた。この事件を主として調査したのは横田千之助で、告發人を村野にしたのは、その道には素人であるが、眞面目な人物故、世間の信用から見て納得すると思つたからである。

いよいよ罪狀明らかとなつて、大浦が引責辭職の上、隱居する事となり、閣議にこれを報告して退席した時、その後姿を見送つて外相加藤高明伯は「この事件を彼一人の責めに歸するのは餘りに酷である、不條理だ」として、總辭職を主張したが、閣議はこれを容れず、遂に加藤の外若槻藏相、八代海相が辭任、改造の上、內閣はその命脈を倚一年餘り繋いだ。

併し山縣公以下藩閥や官僚として見れば、直系の大浦は隱居謹愼までしたのに、內閣が洒々としてゐるのが甚だ不滿で、その上、政友會討伐の使命は既に達したのだから、これ以上內閣を助ける必要もないと言ふので、この事件以後、締を立て始め、間もなく長閥の嫡流寺內伯をもつて、取つて代らせる事となつた。

大隈侯は大浦事件以後、長閥の元老等が寺內伯に次期政局を擔當させようと畫策してゐるのを知つて、頻りに憲政會——同志會を中心に大隈系の中立を合併した新黨——と寺內を握手せしめやうと奔走したが、寺內が全然これに振り向かない。大隈侯が次期政權の話を持ちかけた所、大權私議なりと逆襲する有様で、到底手がつけられなかつた。そこで突然加藤伯を後繼首相として奏薦し、辭表を捧呈したが、これは御嘉納相成らず、大命は寺內伯に降下した。

大命を拜した寺內伯は、政友會に提携を求め、その援助の下に內閣を組織したが、多數黨を敵とし、少數の政友會を味方としたのは理由がある。それは主として野田の奔走だ。山本內閣時代野田が東拓副總裁に、伊藤大八が滿鐵副總裁に任ぜられ、その後野田は朝鮮に居つたが、井上侯との親密な關係から、當時總督であつた寺內伯とも昵懇となり、その信用を得て居つた。大隈內閣は成立後野田、伊藤の兩副總裁を更迭しようとしたが、寺內、井上などの庇護があるため、野田だけは目的を達する事が出來なかつた。野田も亦、福岡まで歸つて來て、いろ〳〵內地政界との連絡は取るが、煩さい中央には決して顏を出さず、寺內との接近工作に餘念がなかつた。寺內伯が憲政會を相手にしなかつたのは山縣、井上等が、既に大隈に見切りをつけたせいもあるが、その主な原因は、野田の手で政友會との連絡が、既に熟して居たためである。大命を拜すると、

間もなく寺內、原の結合が出來、政友會に一陽來復の機會を作つたのは、實に野田の炬眼と働きである。

原內閣については、語るべき材料があまりに多いが、これを一々述べたのでは、煩はしくもなるし、又、手前味噌の臭氣、讀者の迷惑とならうから、すべて略しておくが、唯一つ、自分の終生殘念に思ふ事は、原君の橫死である。これは親友不慮の死を悼むと言ふのではなく、政黨政治のため、取り返しのつかぬ損失となつたがためである。政友會や原に對する非難は頗る多い。併し如何なる反對黨も、原內閣が始めて眞に政黨內閣らしい內閣を組織した事實は、認めると思ふ。又公平に見て政黨の力を强化し、比較的正しい政黨政治をもつて、國民の信賴を得つゝあつた事も認めざるを得まいと思ふ。もし原の兇變が無かつたならば、政黨政治は正しく强く發達し、國民の間に確固たる根を下して、日蔭の花のやうな凋落は、遂げなかつた事と思ふ。

近年の政黨は精神的には墮落し、政策的には無力化して終つた。要するにこれは人の問題である。こゝに原、加藤兩君の政黨首領としての偉大さが憶ひ出される。もしこの兩君に今十年の壽命があつたならば、政黨もかくまで信用を失墜しなかつたであらう。從つて國民の信望も繫がり、政治の實際も活潑に行はれ、政黨は沒落するどころか、政黨政治の力を確立出來た事と思はれる。元來原は事務家である、人事には殊に注意した。決して人まかせにはしなかつた。愼むべきは人事である。

原を失つた事は、政友會によつては固より厄難であつたが、同時に政黨政治のためにも、大損害であり、昨今の政情を見るにつけ、國家のためにも、取り返しのつかぬ一大損失であつたと思つて、遺憾に堪へない。

原に對する非難は、いろいろあるが、その非難の大部分は、同君が力の政治家であつて、德の政治家でなく、從つて政爭を激化せしめたと言ふにあるやうだ。政權を握るや、絕對多數獲得のためあらゆる手段を講じ、その志を達するや、その威力をもつて專恣橫暴至らざるなしと非難する。專恣橫暴は見る人によつて所見を異にするから別として、絕對多數獲得に苦心し、多數となるや、傍若無人にその政策を强行したと非難するのである。併し其非難の種は折角山縣公の主張に依り立てた地方郡制を廢止されたための不平の聲に過ぎぬ。

政黨の目的は、その志を政治の實際に行ふにある。所信を實行すれば、反對の立場より激しい

非難を蒙る事は固より當然で、反對が無ければ、政黨の分立する必要は、始めから無い。反對黨の非難攻撃を無視してこそ、始めて政黨は、その所信に忠たり得るのである。原の場合は、いはゆる政友會の四大政綱をふりかざし、ひた押しに押進んだため、反對勢力を壓伏し、それらに攻撃されたものである。

絶對多數獲得のためには、選擧法の改正を始め、種々の準備を整へ、特に普選案を解散の題目として、反對黨の不意を討つた態度に幾多の非難を買つてゐるが、これらも亦、感情に囚はれて、政治の本道を無視した議論と言ふ外ない。

百の政策研究も絶對多數の威力がなくては、芝居の幟程の効果もない事は、我々が早くから心づいた事である。憲政黨分裂の後、我々はこの見地から山縣內閣と妥協して、先づ絶對多數獲得へ目標を定めた。政治家として比類ない才能を具へた原が、この事に着眼したのも、當然である。殊に大隈內閣によつて、少數黨が如何に無力の存在に過ぎないかを體驗させられて以來、原第一の目標は、絶對多數にあつた。絶對多數の威力をもつて、少くも五年や六年は動かぬ強力內閣を作り、落着いて經綸を行はうと志してゐたのである。一年や二年で退く內閣など、原の問題ではなかつた。

これがためには小選擧區制を準備した。又選擧權を擴張して直接國稅十圓の制限を三圓に低下し、新有權者の投票を政友會の手に掌握せんとした。その他反對黨が攻撃する通り、萬全の選擧準備を整へて、解散を斷行したのであるが、これが非難に値すると言ふならば、政黨はその本來の意義を喪失して終ふ外ない。

普選が生れる迄

普選案を解散の題目としたことも、原に對する非難の一つである。選擧權擴張案の可否を既に有權者たる、即ち一種の特權保持者に問ふといふのは、一つの欺瞞行爲だと言ふのである。理論から言つて、これ程の重大法律案を國論に問ふことが、何等矛盾であるとも思はれないが、之を選擧題目とする事が、原內閣に有利であつた事は慥かである。いづれの內閣でも解散を行ふ以上、最も有利な時期に、有利な題目を撰ぶのは當り前のことで、原にのみ之れを責めるといふのは、要するに反對黨の泣き言に過ぎぬと思ふ。

併し實の所、原は普選案そのものには、好意を持つてゐなかつた。自分はこの問題が、既に世上の論議に上つた以上、いつかは實現せねばならぬ問題だから、その時機を見る事が大切であると、同君に說いたものであるが、容易に贊成しなかつた。之を解散の題目に使つたについては、絕對多數を得やうとの目的が第一であるが、一度普選論者を選擧によつて叩きつけ、當分普選運動を封じこまうとの機略もあつたやうである。

普選派ではあの時、議長に紫の袱紗が渡されても、尙解散とは思はず、停會の詔書と思つてゐたとの事で、政友會の中でも二三の幹部以外、詔書の捧讀されるまでこの事は知らなかつた。それ程秘密にしたのである。これは政治上の駈引と言ふばかりでなく、相場好きの議員や又はその手先らしい代議士が、政府の決心を聞き出さうと、當日朝までも議院の廊下を飛びまはつて居たので、之を極端に警戒したゝめである。原と言ふ人は、あれ程の非難を浴びながら、金錢その他の道德的問題で、かつて攻擊を受けた事がない淸廉の政治家であつたが、この時の狀態を見ても、その潔白ぶりが想像される。

この選擧で、政友會は一躍二百八十の絕對多數となり、政界の中心勢力として最早恐れるものはなくなつた。貴族院など殆んど問題でなく、流石の元老山縣公すら、政友會の前に慴伏しなければならなくなつた。完全な政黨時代がこゝに來たのであつたが、原の兇變後、高橋內閣となり幾許もなく總辭職となつた。

普通選擧制に對して、原は最初から贊成してゐなかつたが、この選擧の結果を見て、決して當分、行ふべきものではないとの信念を固め、黨內にも之に共鳴するものが相當にあつた。併し自分は嚢にも言ふ通り、一度唱へられ始めたら、かゝる問題は決して阻止出來るものでなく、阻止すればする程、激化するものと思つてゐたから、時期を見て我々の手で實施すべしとの意見をもつてゐた。第二護憲運動が起つて、衆議院の各派が協調し、この問題を餘り無理のない程度に解決出來た事は、國家のため同慶に堪へないと思つてゐる。

普選案は元來政友會の有志議員が、明治時代から唱へてゐたものであるが、大正に入ると、犬養等の革新俱樂部がこれを主唱し、續いて憲政會でも、尾崎君等によつて、重要政策として取上げられた。恰も當時は歐洲戰爭の前後で、デモクラシーの思想が全世界を風靡し、共產主義すら世界を掩ふ時代で、普通の思想家の間にもかやうな思想の影響が著しく、從つてその理論も、逕

動も、頗る矯激危險なものが多かつた。普選運動に赤旗を擔ぎまはるものすらあつた位で、識者はその矯激な傾向にみな眉を顰めて居つた。「普選は危險思想なり」との觀念を一部保守派に與へたのは、かゝる傾向のためである。

この狀態を見るにつけて自分は、之は解決の時機をなるべく早く見つけねば、容易ならぬ事になると考へ、普選主唱者中の友人一二の人へは注意も與へ、又激勵もして居つた。その後偶然三派の協調內閣が出來たから、自分はこの政界の癌を切開するのは、この時の外ないと確信し、この解決に努めた結果、幸ひ成立させる事の出來たのは、望外の喜びであつた。

政友、憲政、革新のいはゆる護憲三派が、清浦內閣を敵として同盟を結ぶ時、第一に問題となつたのは、この普選案を如何に始末するかであつた。憲、革兩派は政友會がこの問題に賛成しなければ、護憲運動の共同戰線を張る事は、無意味だと言ふのである。併し自分及び政友會側斡旋者は、提携して終へば、そんな問題は必ず解決出來る。初めから條件をつけるとなると、政友會の黨內にも紛議が起つて纏まる話も纏まらなくなるから、一切を我々に任せてくれとて、三派の提携が出來たのである。そこで我々としては、三派內閣が出來て見れば、この問題解決の責任を負つた事になつた。

政友會內部にはまだ普選反對論者が相當殘つて居つたが、兎も角もこれを說き伏せて、大正十四年の第五十議會に三派の共同案を議會に提出した。貴族院は果して反對論多く、大修正を加へて、衆議院に廻附して來た。この年は護憲運動の餘沫で、貴族院の權限を制限する貴族院改革案も共に提出されて居つたから、貴族院のつむじを曲げるのも無理はなかつた。この兩案のため會期を延長し、兩院協議會を開いたが、貴族院の强い事は勿論、衆議院內部にも案を流產させるため、わざと硬論を吐く議員すらあつて、容易に一致點が見出せなかつた。自分は併しこゝで不成立となつては、必ずその運動が激化し、當時國民思想の動搖時代、恐るべき結果を生ずると心配したから、必死となつて努力した。幸ひ小委員として擧げられてゐたので、黨の幹部にも相談せず、獨斷で妥協案を作り、辛うじて兩院の承諾を得る事が出來た。會期の盡きる僅か數分前の際どい所であつた。

妥協の骨子は住居制限を一年、華族の戶主の被選擧權を認めざる事、不在者投票の擴張等を貴族院に讓り、連坐規定の但書は衆議院の主張を通し、缺格條件に關しては双方協議の上、貧困に

より、生活のため公私の救助を受くる者として、漸く纏め上げた。この妥協には內々流產を希望して居つた黨內の普選反對派や、陽に贊成、陰に反對と言ふ人々など大分不服で、岡崎は黨の機關を無視して專斷だとの非難が起り、除名せよとまで攻擊されたものであつた。併し今日から回顧すれば、普選案はあの時解決する外なく、又あれ以上の解決案はなかつたと確信してゐる。もしあの場合成立させてゐなかつたとすれば、如何なる事態を起してゐたであらうか。政界は恐らく大混亂を起し、國民思想も平穩なるを得なかつたのではあるまいか。

政友會は何故あの全盛時代に分裂騷ぎを起したかといふと、やはり太閤の死後、アレキサンダーの歿後、その天下が崩壞したやうに、原といふ英雄の築いた身代を、養子的後繼者を以て相續するといふ事は如何なる人物と雖も困難と思ふ。

分裂の遠因は、高橋內閣の改造問題から起つてゐる。高橋君が衆望を負うて總裁となり、總理となつたのだから、十分の經綸を行ふためには、名實共に高橋內閣にしなくてはならぬ。それには閣僚中、餘りに友達づきあひする者があつたり、先輩顏する者があつては、高橋君もやり難いから、改造する必要がある。殊に閣僚中には相當の傷手を負つた者もあるから、旁々改造は內閣の若返り法としても必要であつた。この考へから高橋、横田、野田、自分などの間に改造論が起つたのだが、自分はその前提として黨の幹部をもつと充實させ、政府を指揮する位にしなくてはならぬと考へた。そのためには幹事長には少し押しの強い人間を据ゑ、役員の任命も從來の官僚的な型を破り、幹事や總務をした者でも、場合によれば平幹事になる位の事が必要と思つた。それでなければ內閣改造も黨勢の振作も出來ないと考へ、幹事長に川原茂輔を推し、當時の幹事長廣岡宇一郎君に平幹事になれと勸告して、双方共この方針に贊成を得た。

この案を長老會議に持出した所、野田から川原の幹事長では九州團體、特に福岡が、絕對に納まらぬから困るとの横槍が出て駄目となり、お鉢は法制局長官をやつてゐた横田にまはつた。横田なら力はあり、役人をやめて黨に歸るのだから、改造のためにも好都合といふので、一同大贊成、それに決まつた。

そこで改造となつたのだが、中橋は議會中、二枚舌問題で相當の手傷を負ひ、內閣の弱點となつて居るし、元田君も後進に途を開いて貰ふがよからうと、まづ二人の引退を求める手筈だつた。山本男は高橋君より先輩格だし、性格的にも合はぬから、自發的に勇退するものと見て居つ

た。

所が高橋君といふ人は、極めて恬淡な人であるから、手輕に考へたらしいが、相手はなか〳〵さうはいかぬ。現に議會中にも中橋問題で議員の追窮に會ふと、閣員は必ずしも一蓮托生とは決まつてゐないなど答辯して、中橋黨の人々を怒らせてゐたが、この時も事前に何の工作も話合もせず、いきなり閣議の席上で「自分は内閣を改造したいと思ふから、一應全員辭表を出して貰ひたい」と切出した。更迭される顔觸れは、大體誰にでも見當はつく。これでは異論が起らざるを得ない。果して議論は沸騰して、遂に山本、中橋、元田三人の反對の爲め、内閣は潰れて終つた。

高橋君の方から見れば、自分や横田、野田などが、もつと各大臣の間を働いて、調和するものと不足はあつたらしい。併し高橋君は今日に至るも、一言もその時の不足を言はぬ。如何にも俗人離れした高潔な氣性が見えて床しい。これは決して無理とは思はない。此改造の出來そこなひは、高橋君の責任は勿論であるが、其半ばは我々も負ふべきである。高橋君を助け、其功をなさしめなかつた事は、今も猶ほ恥しく思うて居る。

もし當時加藤伯の率ゐる憲政會が、今少し政黨としての節制と訓練が行届いて居つたならば、或は元老の推薦する所となつて、政友會の後を繼承したかも知れない。併し當時の憲政會は、加藤君の節度に十分服せず、その上、普選案などで矯激なデモクラシー思想に風靡され、識者の信用を得てゐなかつた。折角原によつて官僚を抑へ、政黨の威力が伸べられたのに拘らず、反對黨の無力のため、政權は再び中間内閣の手に落ち、海相加藤友三郎君が大命を拜する事となつたわけである。

加藤君は華府條約の責任者で、その後始末をつけるため、大命を拜したやうなものであるから、政友會も當然その責任を分擔してこれを助けた。加藤君の病死から第二次山本内閣となり、虎の門事件でこの内閣が倒れると、加藤内閣以來、機會を窺つてゐた貴族院の華族や官僚系勅選連が、ドサクサ紛れに政權奪取の陰謀を始め、清浦伯を擁して、その目的を達した。

清浦内閣の中心は研究會の領袖連と、加藤内閣時代、岡野法相の下に結成された官僚及び勅選の一團であつた。この連中は、政權の甘味を知り過ぎる位知つてゐる。そして貴衆兩院同權と言ふやうな時代錯誤の抽象論で、衆議院に根據をおく政黨内閣が當然なら、貴族院の多數派が政權

を取る内閣も、不合理ではあるまいと主張し、政局へ乘出して來た。貴族院がその立場と本質を冷靜に考へたなら、こんな議論の間違ひ位、すぐにも氣がつく筈であるが、増長した殿樣連にそんな反省はなかつた。

特權の城塞から民衆を統治しようと言ふ、典型的封建思想の發露なりとして、輿論は蹶然として、これを痛擊し、こゝに第二の護憲運動が勃發して來た。この時局に處する方法について、改造運動以來、政友會の黨內に對峙して居つた二潮流が衝突し、大分裂に導いたのである。

政友會大分裂

大逆事件が暮の十二月二十七日。山本內閣は即日總辭職したが、越えて十三年一月元日、淸浦伯が大命を拜するまでの數日間、貴族院の一味は猛烈な暗中飛躍をやり、我々へも研究會の代表者から、頗る露骨に援助を求めて來た。暮れの慌ただしい中ではあるが、輿論は特權階級の政治進出を不可とし、護憲論がボツボツ燃え始めて來た。

淸浦伯は一月二日大木伯、靑木子と會見し、萬事この一派の人々のお膳立通り、組閣の箸を取る方針を明らかにした。そこで黨の方針を決定するため、二日の夜麻布興津庵に總務會を開いた。最高幹部の間にも大震災の後ではあり、未曾有の大逆事件の後始末をさせるためにも、この際は內閣を援助すべきだと主張する人が相當あつたが、自分はこれに反對した。その理由は、淸浦伯は大命を拜しながら、その組閣は一切貴族院の一部有力者に一任し、これがため護憲の火の手は、既にチラチラと燃え上らんとしてゐる。この火は恐らく日ならずして大火となるであらう。この形勢を輕視してはならぬと、各方面の狀況を說いたが、山本、元田諸君からは、護憲運動は大した事はあるまい。殊に火は政友會から燻べてゐる、薪を引きさへすれば大火にはなるまいと言はれ、自分は政友會の薪を引いても、この火は決して消えまい、この運動の本質は、自分がよく知つてゐると述べ、結局正月早々ではあり、自分始め旅行する人もあるので、當日はその程度として、十五日に再び總務會を開く事として散會した。この事情を詳細手紙に認めて、西園寺公に報告し、京阪地方へ旅行したが、十四日の夜汽車で歸京する途中、十五日曉方の三島の地震に出會はして、到頭十五日の會合に間に合はず、分裂した後に歸り着いたわけである。蟲の知らせと言ふか、沼津附近で汽車が立往生した時、どうしても歸らうと思ひ立ち、徒步で箱根山を

踰え、湯本へ着いてやつと自動車を探したが、この山越しだけは、精神的にも肉體的にも忘れられない。もし汽車があつたら會議の間に合つて、何とでもして分裂を喰ひ止めたと思ふから、諦めかねるのである。少くも數日延ばす位はできたであらう。

夜の十一時頃歸京すると、すぐ望月君から報告を聞いたが、それによると、その夜高橋邸で幹部會を開き、議論を鬪はした結果、黨論は明らかに二つに分れたが、總裁はその場で憲政擁護のため爵位を辭し、丸裸となつて衆議院の議席に就く決意を示し、硬派を感激させ、中立組をも硬化させたとの事であつた。併し山本、元田、中橋、川原等は、これに服せず辭去し、床次君の態度も曖昧との事であつた。

追つて他の黨員からの報告をも聞いて見ると、この分裂は早くから小泉の宅を事務所として、横田等の手で計畫され、岡崎に知らせず秘密にせよと、非常な極秘裡に分裂運動を協議して、畫策されて居つた事が判つた。改造運動以來の內紛をこゝで清算し、純政黨主義へ邁進しようと考へたもので、自分に知られると、黨本位の立場から、清算の强硬手段を封ぜられるのを恐れたとの事である。

小泉、横田君等は、如何に多數に計算しても、所謂軟派を精々二三十名と計算したらしく、總裁の辭爵、衆議院進出の聲明を出せば、擧黨八分通りはこれに就くものと思つてゐたものらしい。當時總裁反對派はそんな少數とは見ず、若し床次君も脫黨する事とならば、恐らくは八十人位に達するであらうと計算して居つた。私は成るべく反對派を少數にするよう努力したいと思ひ、十五日は總務會を開き、猶ほ十分に懇談を盡す考への處、横田君等はこの會議で軟派を叩き伏せ、黨議を硬論に一決させる計畫で、總務以外の同志を非常に多數狩り出して出席してゐる。そしてすべて計畫通りに進行させ、軟派を追出して護憲の旗印を確立して終つた。自分が居つても、この會議では何とも出來なかつたであらうが、形勢をそれと知れば、會議を延期させるか、大勢を集めて討論會を開き、火に油を注ぐやうな事はさせなかつたと殘念に思つてゐる。

床次君だけを引留めれば、分裂の人數も餘程減ずると思ひ、いろいろやつて見たが駄目であつた。十六日の朝から床次君を探したが見付からず、夕刻やつと會見して留黨を勸告したが、床次君は今夜山本邸で、總裁反對派の會合があるから、その席でよく自分から說得しようとの事で、自分も出席しようと言つたが、これは斷られた。その夜遲く同君から電話で「到頭ミイラ取りが

ミイラになつたから惡しからず」と言つて寄越し、萬事休す矣、あの大分裂となつて終つた。

今度は第一護憲運動の時とは逆で、政友會が分裂して、昔分裂した犬養の革新派、加藤の憲政會と手を携へて、護憲の旗を擔いだのだから、運命のめぐり合せは面白い。

この運動の結果解散、總選擧となり、三派が大勝して、野黨の勝利と言ふ日本憲政史最初の記錄を作つた。その結果、元老もこれを朗かに後繼內閣として奏薦し、こゝに憲政運用上、全く新しい、而も最も合理的な政權授受が行はれる事となつた。三派內閣は一年餘の命脈しかなかつたが、政治上に政黨の威力を決定づけ、政機運用に立憲的慣行の第一步を印した內閣として、特筆さるべき內閣である。淸浦內閣は特權を最後の城砦として、國民に挑戰したものであつたが、政黨は總選擧によつて見事にこれを擊破して、憲政を軌道に乘せ、政黨時代の幕は開けた。議會開設以來、三十五年の苦鬪を終へて、やうやく憲政の運用は本格的となつたのである。

この政黨時代が僅か十年の命をも保ち得ず、沒落したと云ふ事は、何故であらうか。理由の如何を問はず、政黨としてはその先輩に對し、又國民に對し、十二分の責任を感じて然るべきであらうと思ふ。

第二護憲運動で特權階級に對する止めを刺し、ここにやうやく政黨時代を迎へる事となつたが、僅か十年の命脈を支へる事も出來ず、政局線上から閉め出されて終つた。三派內閣から犬養內閣まで、僅々八年に過ぎない。八年のため三十五年の苦鬪を經たやうなものである。餘りにも儚い命ではなかつたか。政黨がこのまゝ、永久に沒落して終ふなどは、勿論あるべき筈もないが、復活のためには、政黨自らその過去を省み、大いに自戒發憤する所がなければなるまい。

惟ふに政黨がかくも脆く凋落した原因は、國民の信用を失したゝめで、信用を失墜した原因は多種多樣であるが、初期以來政黨に身を投じ、議會政治のため聊か力を盡して來た自分からこれを言ふならば、信用失墜の最大原因は、政黨が不幸にして二三代、養子相續の如き總裁の更迭を續け、從つて統御力の乏しい總裁下に、野心家が夫々勢威を張る事になつたためと思ふ。この事は高橋總裁の末期頃から始まつたが、これがため黨內に勢力を得るには金力を要し、金力萬能とも言ふべき狀態となつて來た。選擧界が腐敗し、巨額の選擧費を要する事となつたため、金力を擁する野心家が、すべて政黨の中心勢力家となるやうになつた。政黨の生命は政策であり、政治家に重んずべきは識見、操守でなくてはならぬ。金力の如きは、これを助くる道具に過ぎない。

いはゆる威武も屈する能はず、富貴も淫する能はざる大丈夫こそ、政治家の本領でなくてはならぬ。然るに近時の政黨はかゝる政治家も、金力を伴はねば勢力を失墜し、金力さへ豊富ならば、人格、識見の如きは問はず、黨中の有力者となる有様となつた。世間の信用を失ふのも、尤もな次第と言はねばならぬ。たゞ併しこの混濁した政界に於いて、利害のため督軍の下に就くを潔しとせず、識見高邁、操守清高な政治家にして暫く雌伏し、他日の雄飛を待たんとしてゐる士の少からずあるのには、我々老骨意を强うしてゐる。希くは一日も速かに不純なる野心家を整理して、かゝる政治家が政黨の中心たらん事を切望する。

この傾向はすべての政黨に共通し、各派共同の責任と言はねばならぬが、政友會でこの傾向の特に甚だしくなつたのは、田中男が總裁となつた前後からである。

原內閣からこの傾向は、徐々に始まつて居つた。大隈內閣のインフレ選擧に刺戟せられ、政友會にも金持の道樂的進出が始まり、金力によるいはゆる親分子分關係が作られた。それが田中總裁就任以後は特に甚だしく、後には一歩を進めて、政治を金儲けに利用し、儲けた金をもつて勢力を張ると言ふ苦々しい現象まで起るに至つた。

近頃の親分子分關係は、全く金錢一天張りで、選擧となれば數千萬の金を乾分の一人々々に與へ、盆暮れは勿論、毎月の政治資金、生活費まで面倒を見るやうな有様だとの事であるが、我々の想像もつかぬ話である。最近故人の手紙を整理してゐる中に、原君の大正四年の古手紙が出て來たが、それは或る代議士の選擧費が不足してゐて、それに三百圓の援助を與へる相談であつた。昨今一人の公認料五千圓とか一萬圓とか言はれ、督軍達の子分に對する援助が、一人宛數萬圓など言ふ事を聞いては、只啞然たるばかりである。昔、松田君の宅などで幹部の會合を開いても、飯時になると、更科の蒸籠が關の山であつた。全く隔世の感がある。

選擧に金のかゝらなかつた事は始めに述べた。金が大してかゝらぬ間は、有志も負擔に苦しまなかつた。その上、一方には野心家や不良候補者が、金力で勢力を張つて來るので、純正な政治家や有志は、到底さやうな者との競爭にたへず、これが選擧界を腐敗せしめた一因である。

高橋君が退き、田中男が乘出した。その相談の進行中には自分は知らず、ほゞ決定してからその報告を受けたが、當時の關係者は双方を知己として立働いた小泉君と、當の高橋君が生殘つてゐるだけで、田中、野田、横田三君はみな死去し、この間の事情を知るものは二人の外ない。田